

37
475

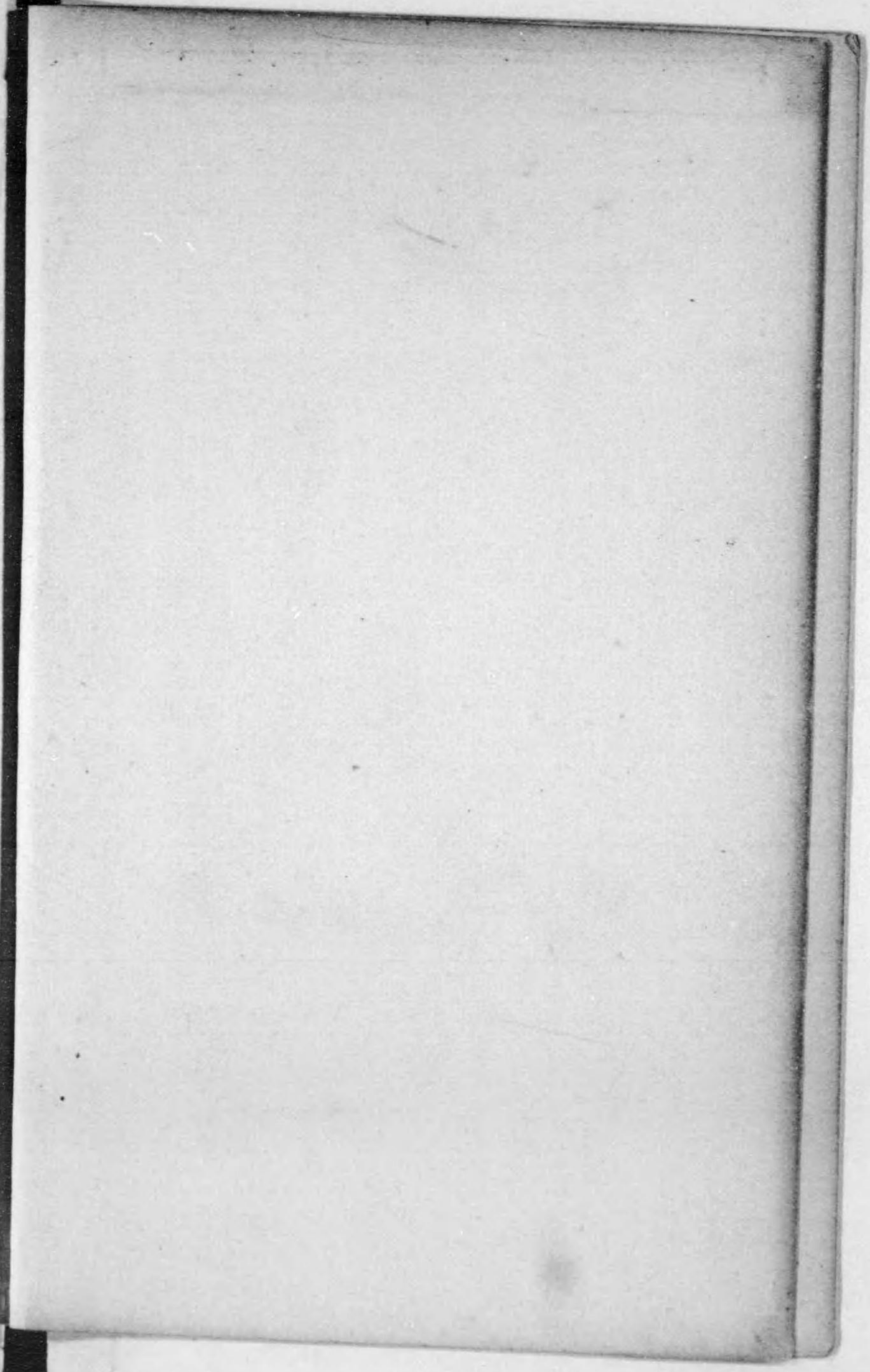
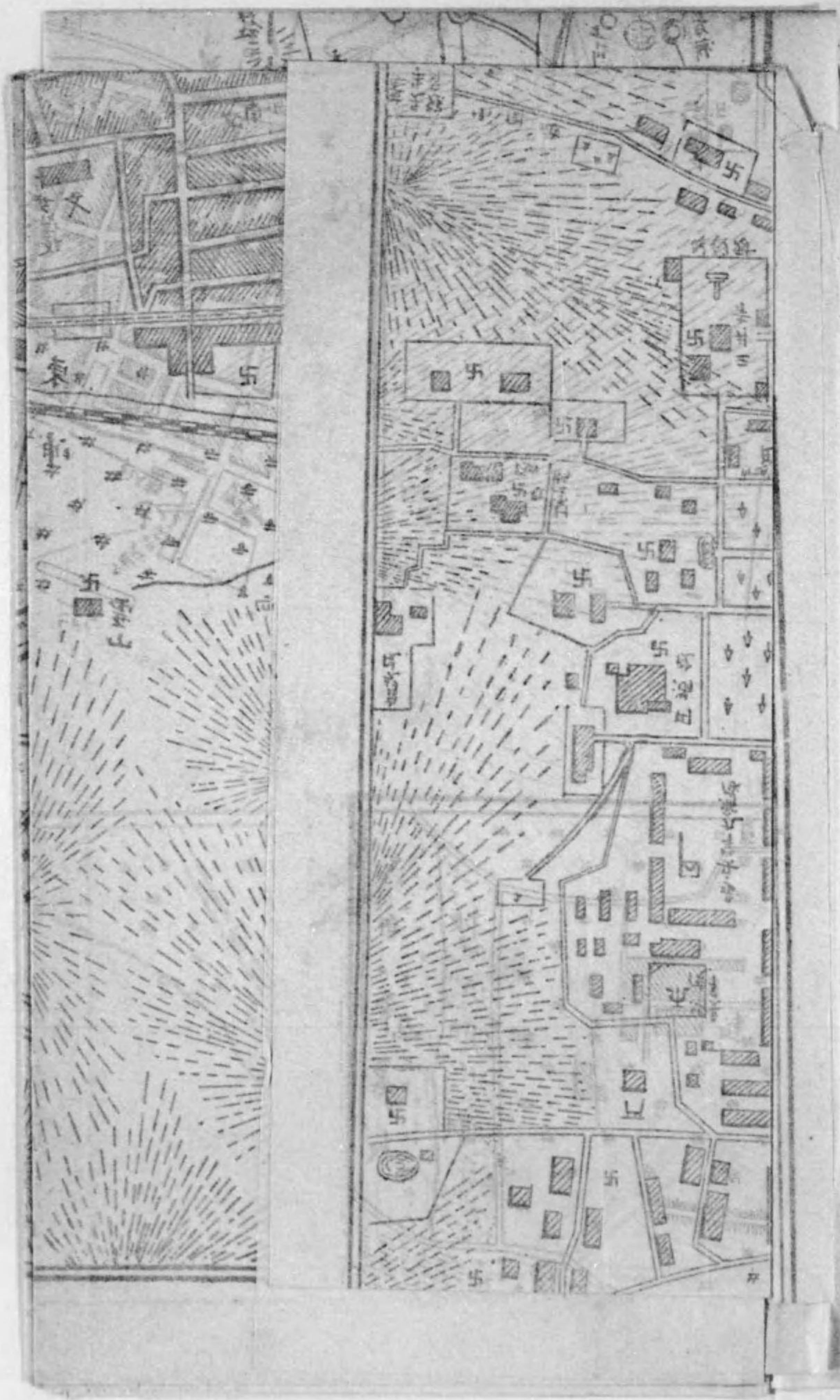


始



37-47

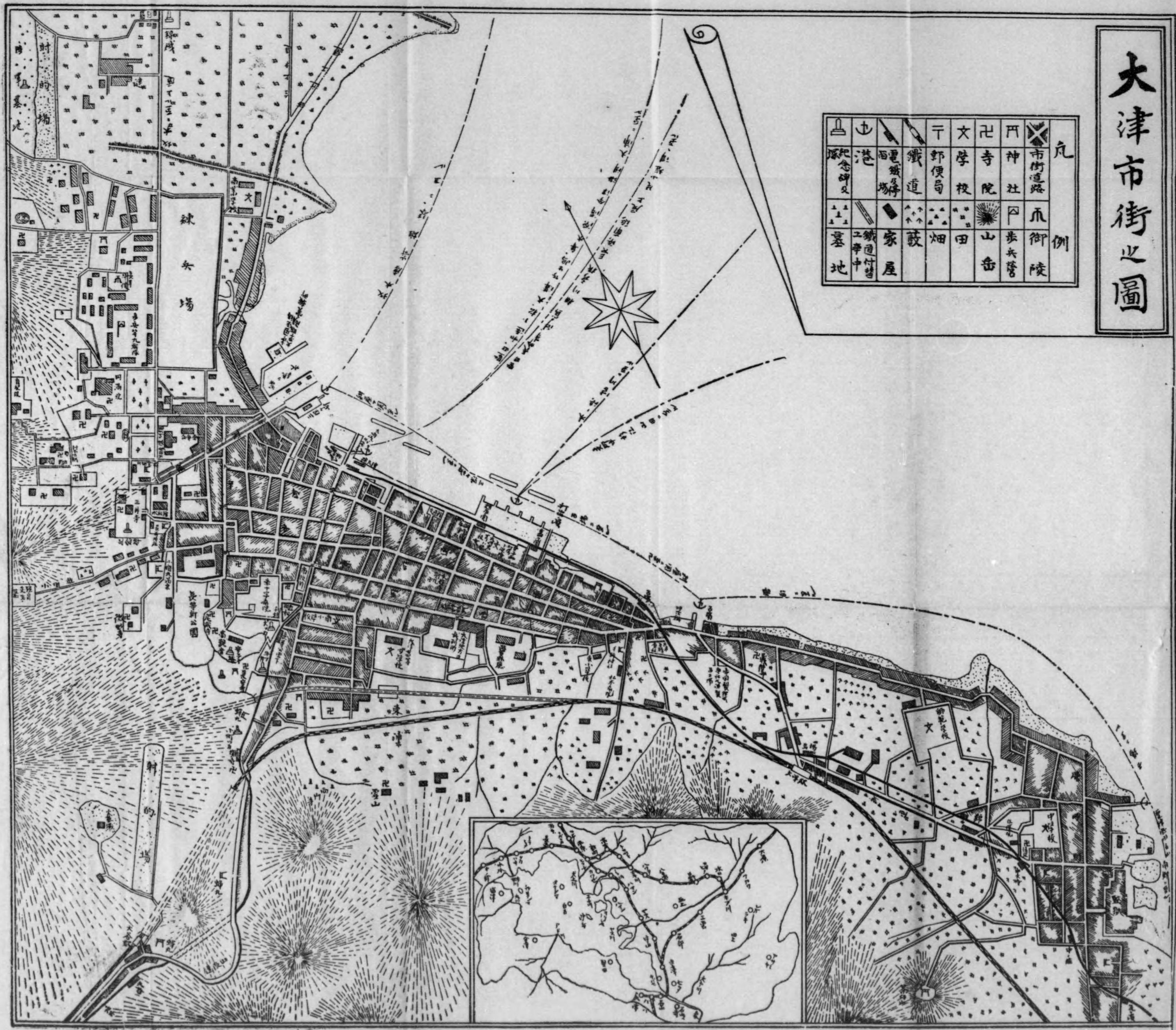
大津名勝案内



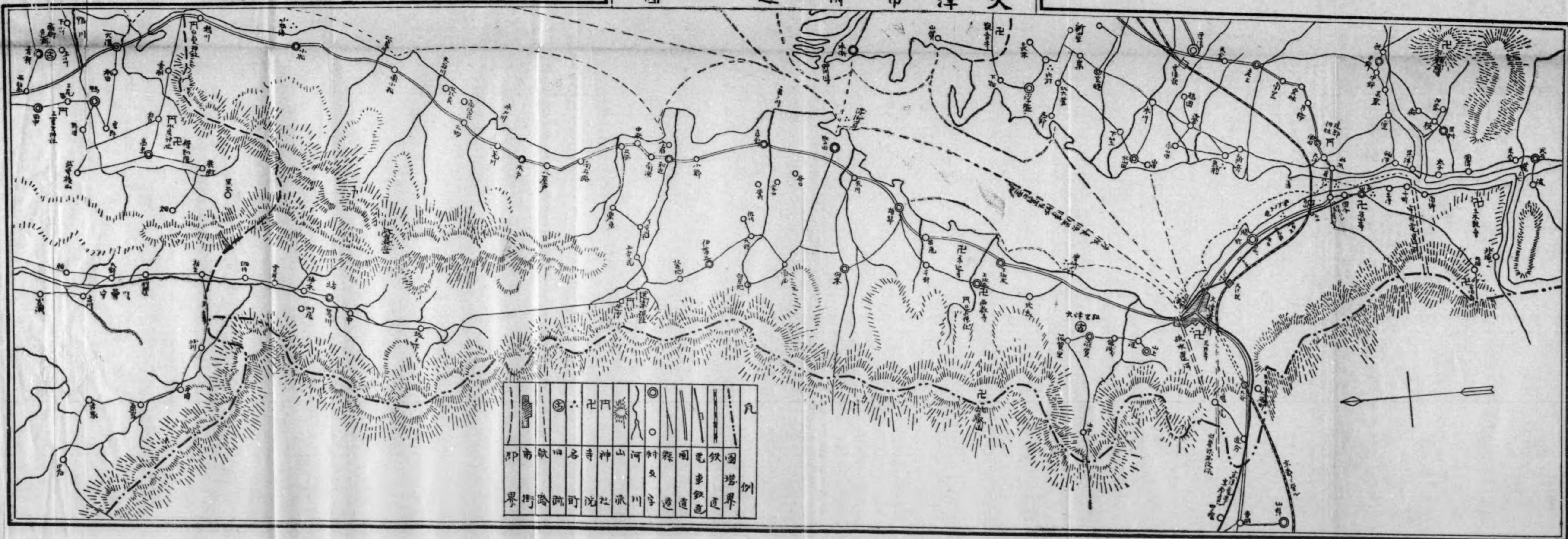
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

天津市街之圖

市街道路	廟	寺	文	行	鐵	電	港	山	凡
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	例
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	
御陵	山	院	學	郵	道	鐵	港	山	

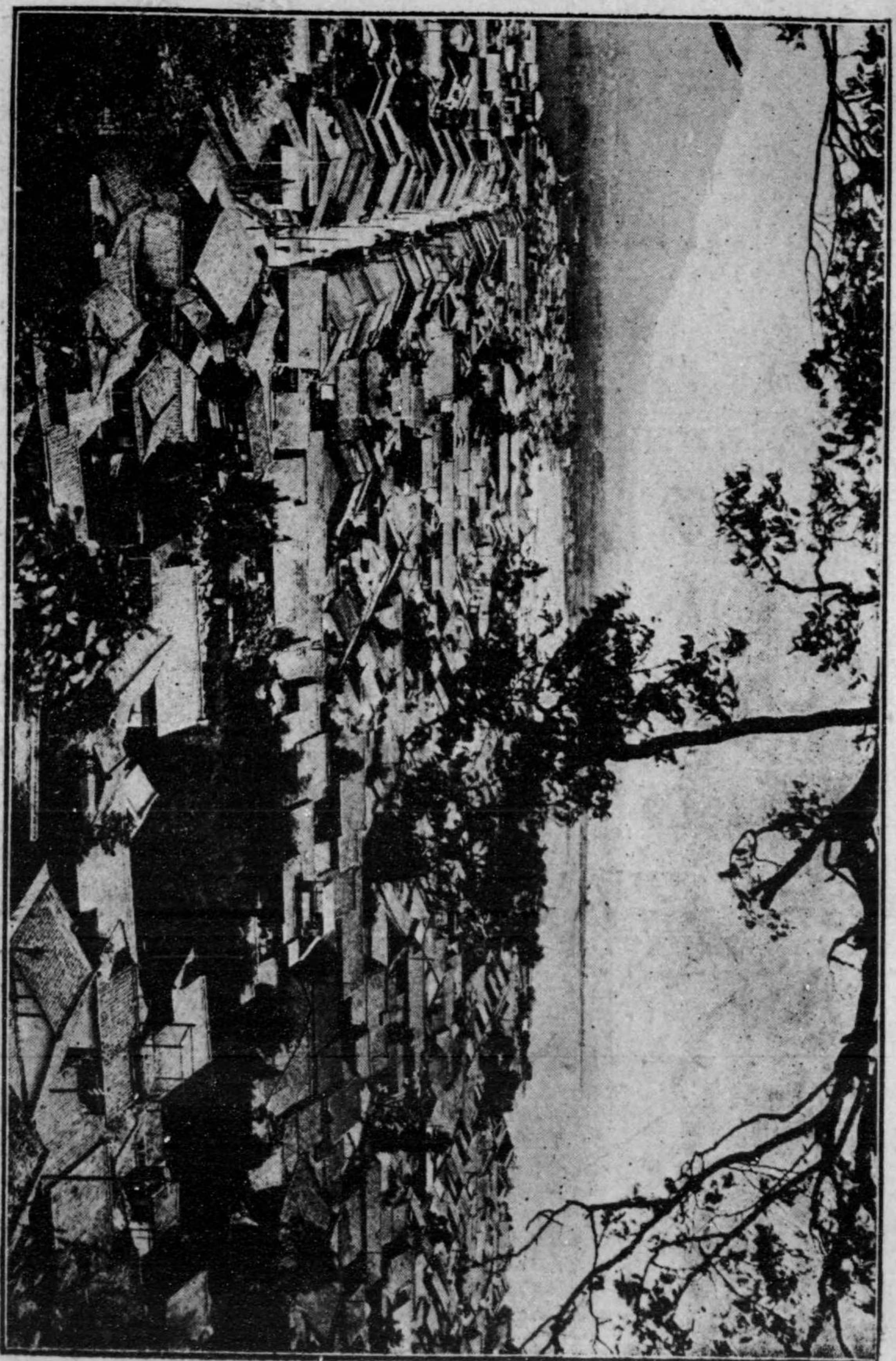


大津市附近圖



市界	町界	村界	山	河	道	鐵道	電報	國境



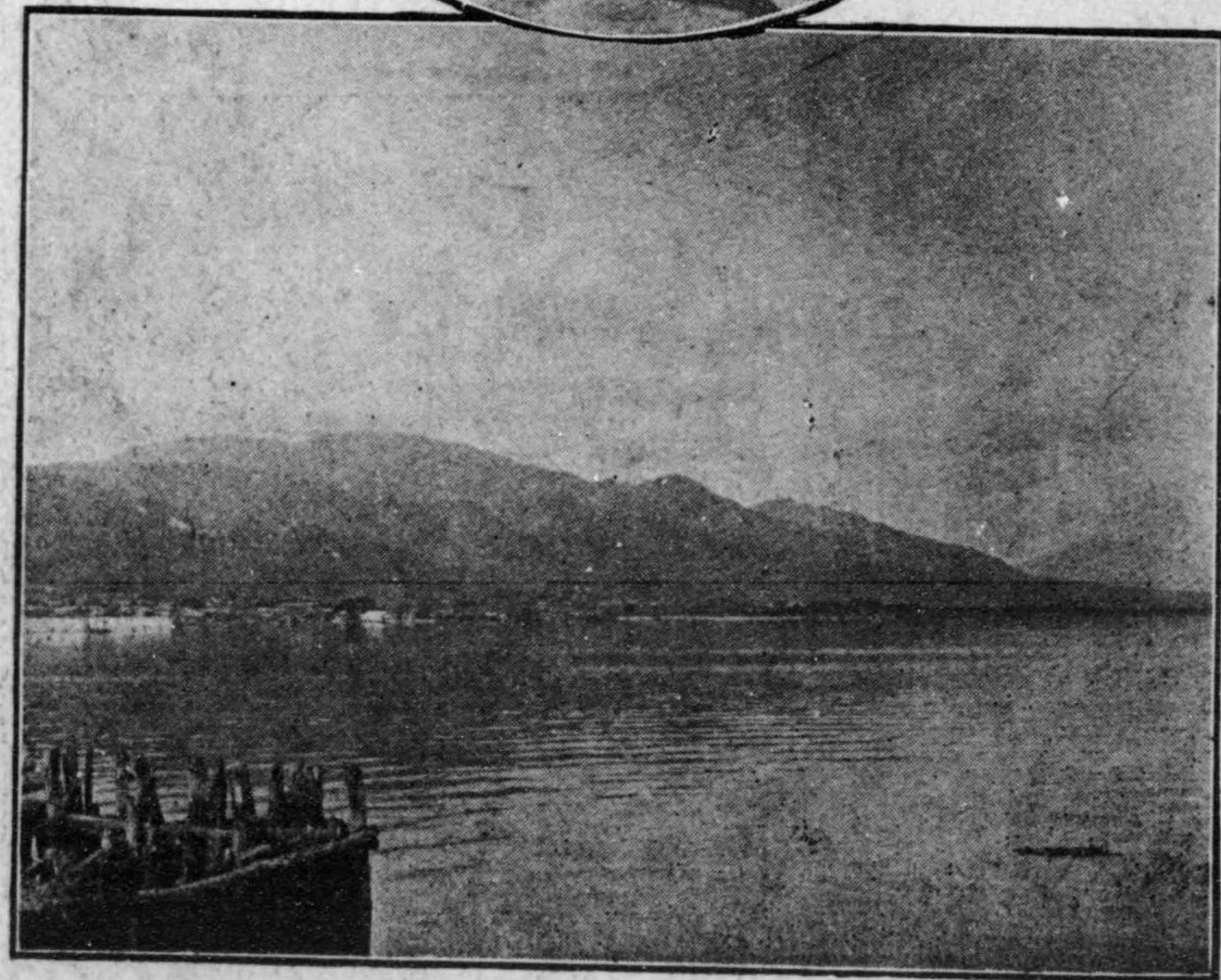


長等公園大津市附圖





大津市役所



琵琶湖の眺望



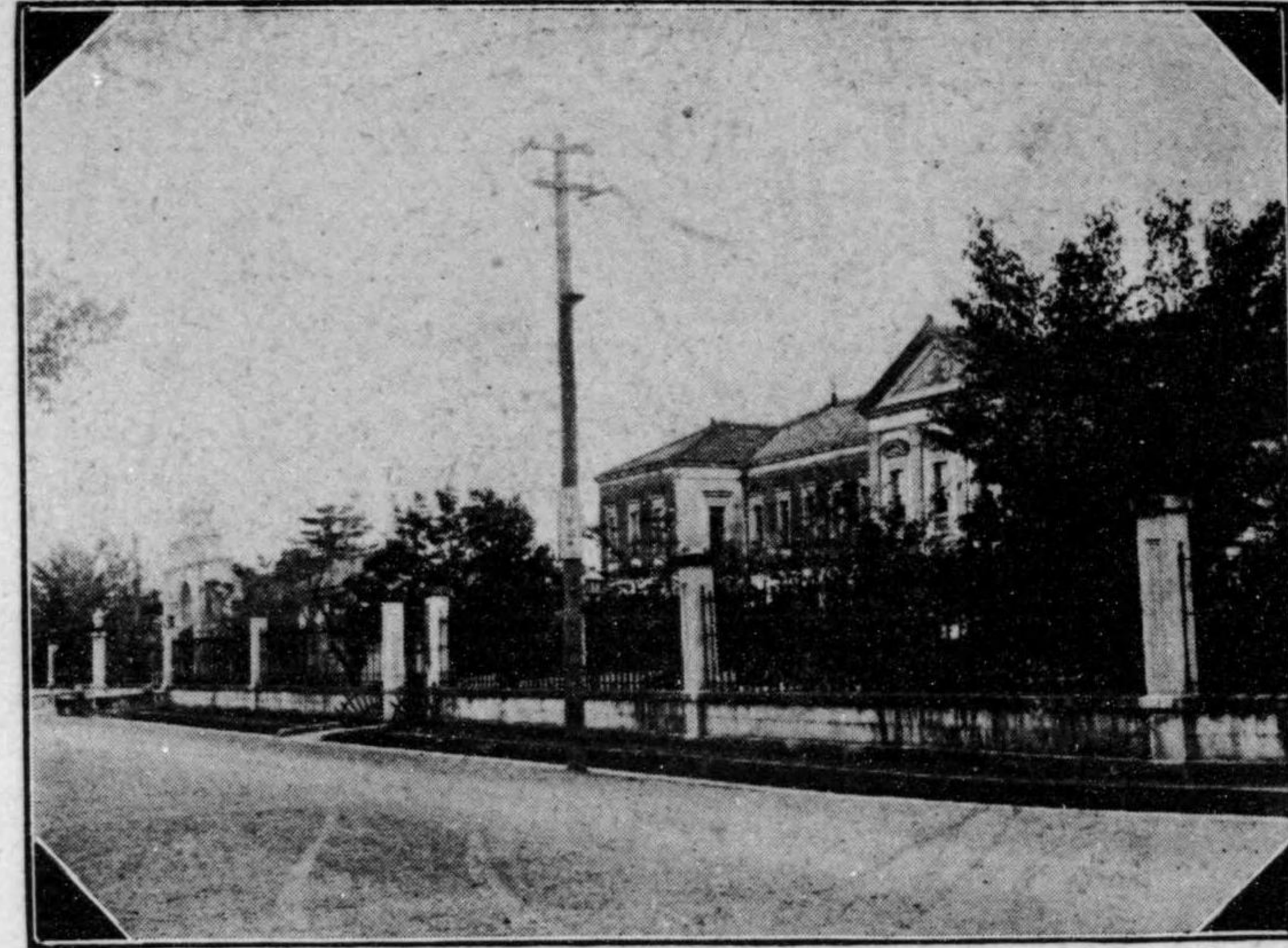
大津四ノ宮祭



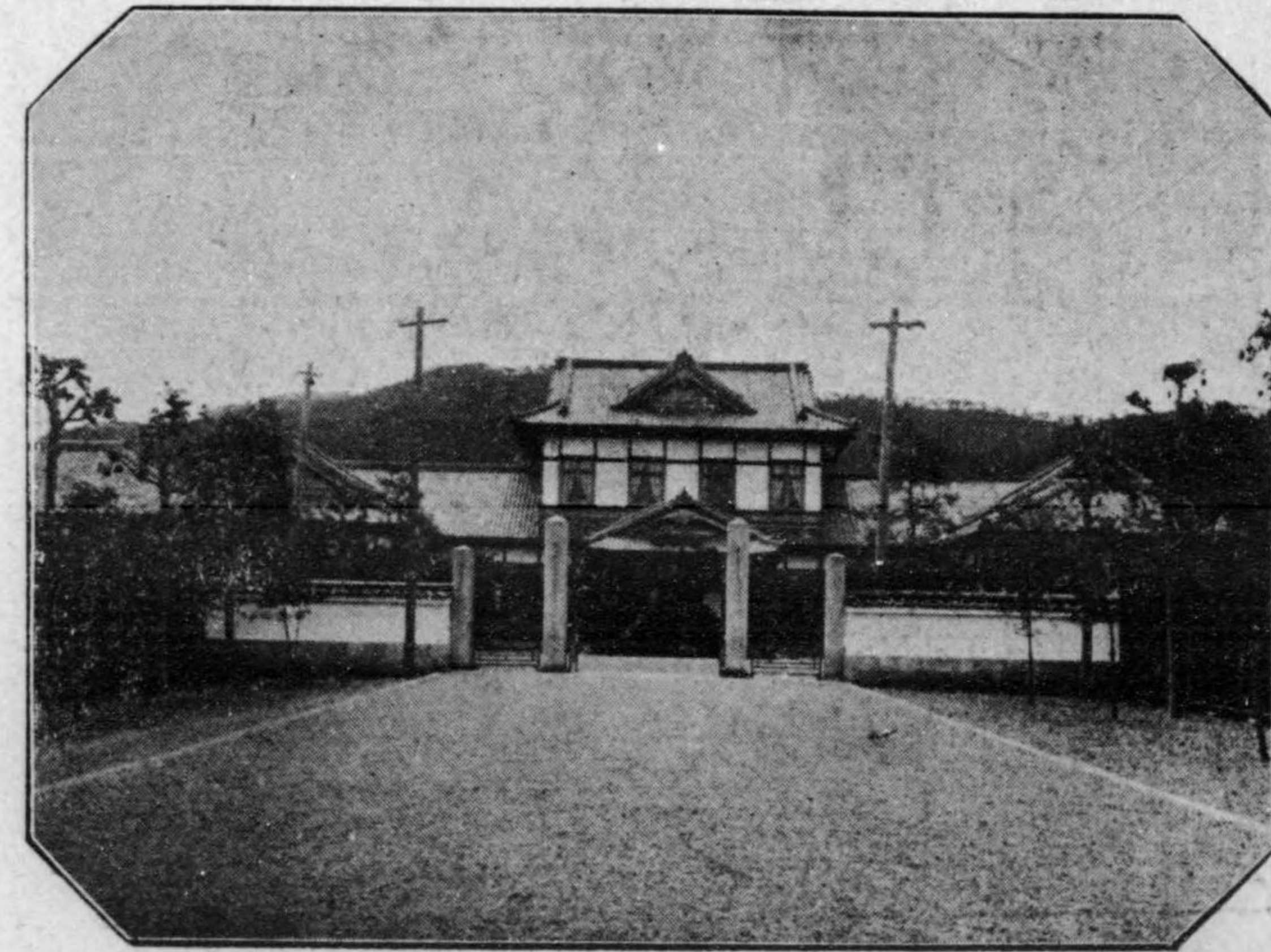
長等公園園



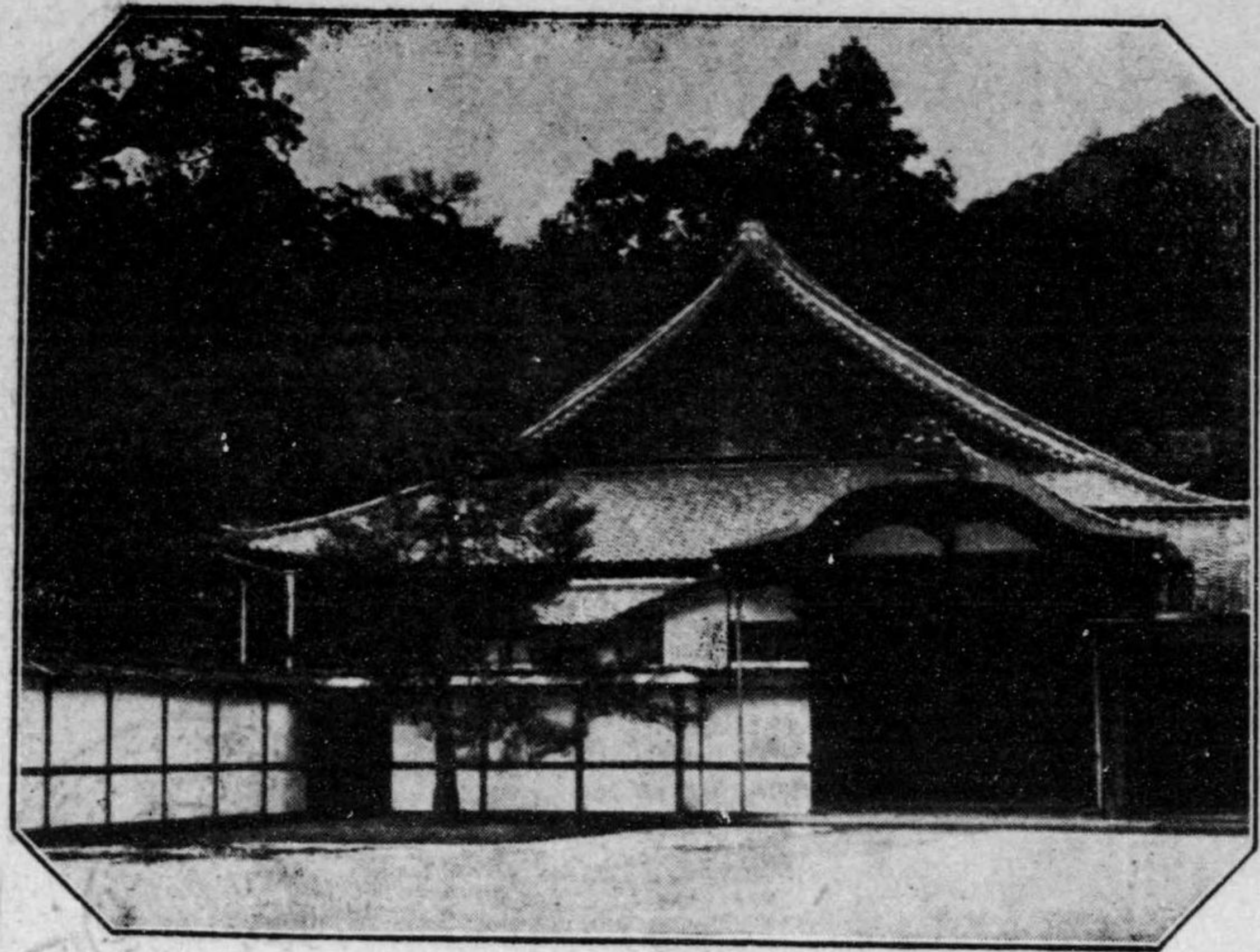
長等公園頂上の歌碑



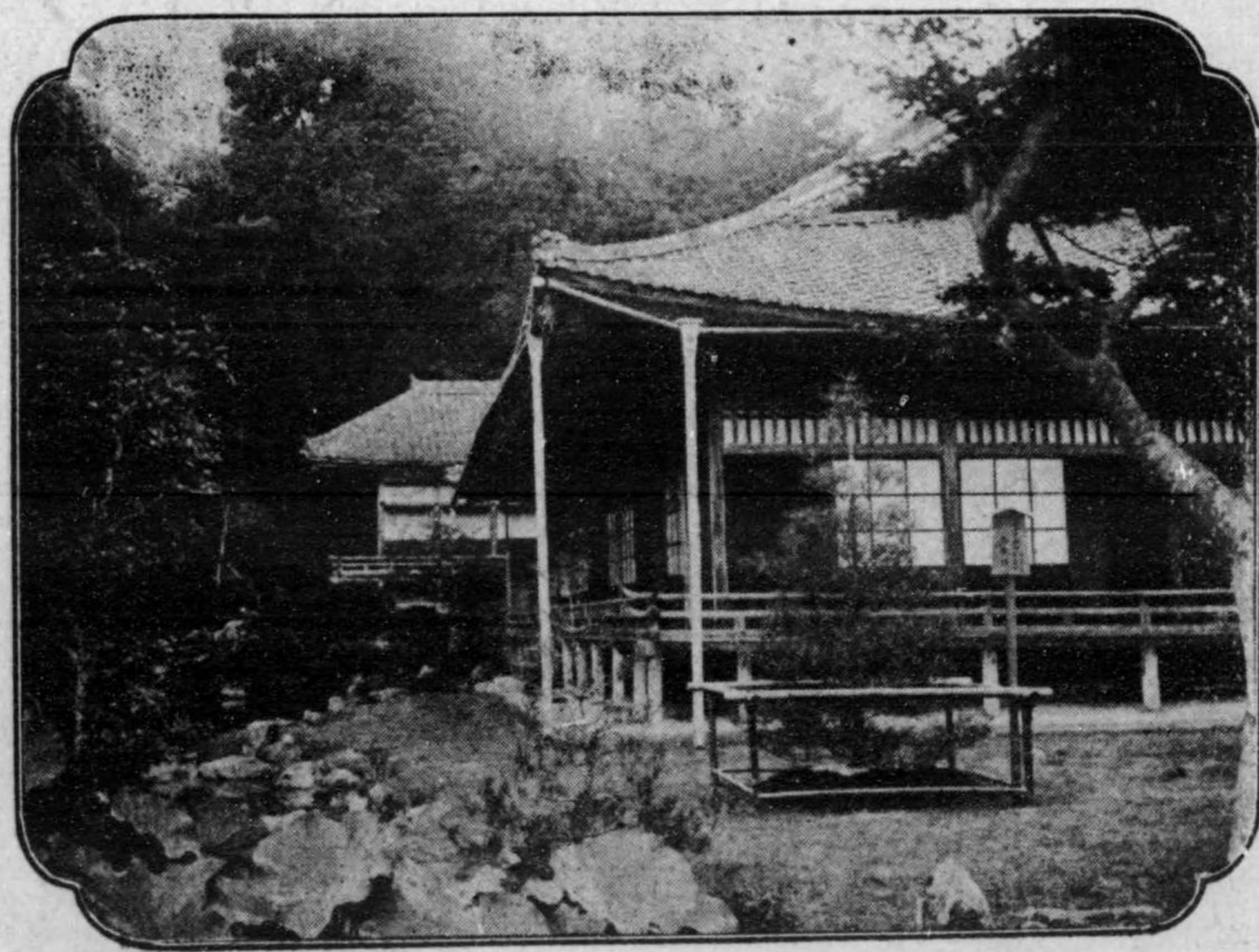
滋賀縣廳



大津地方裁判所

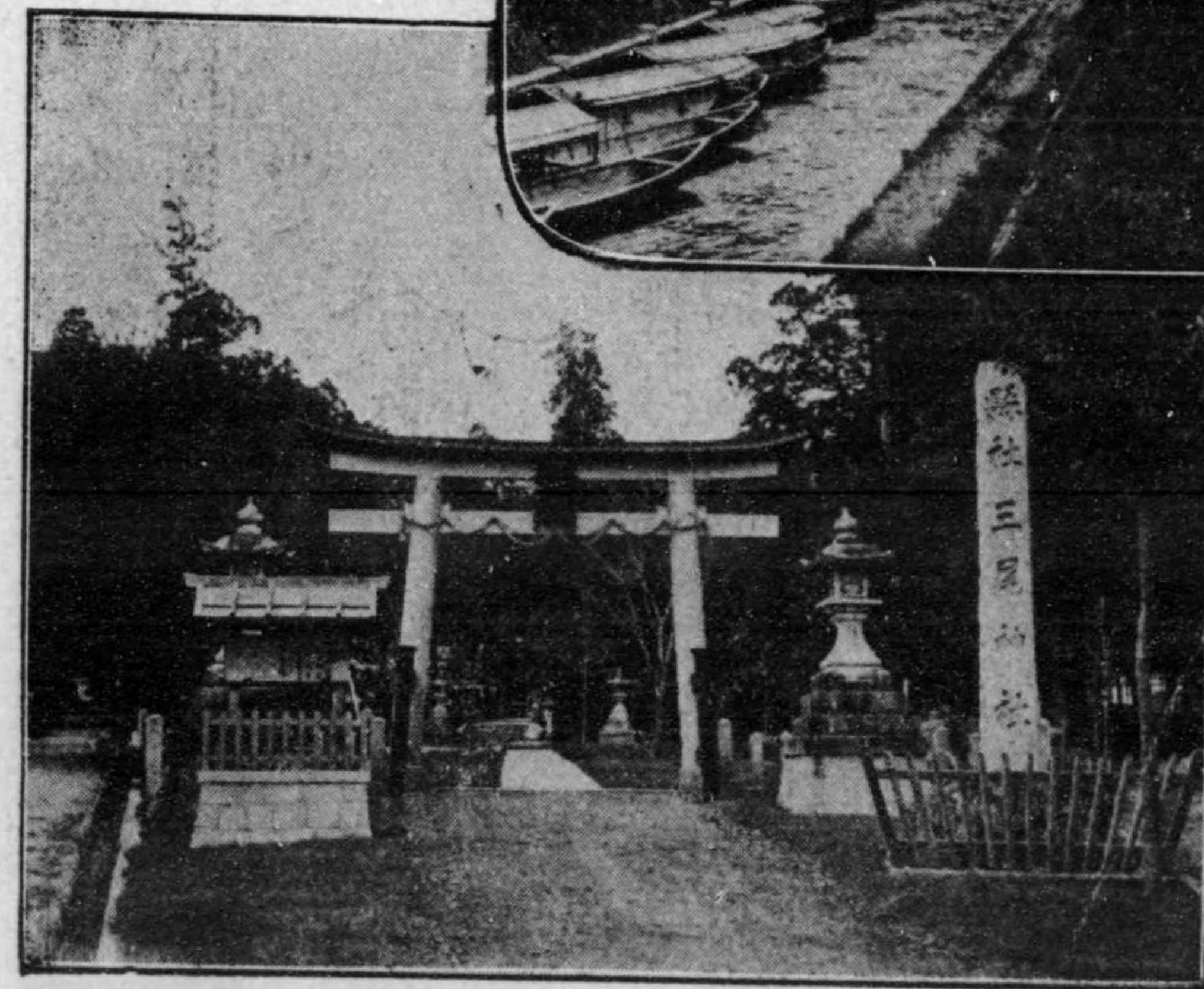
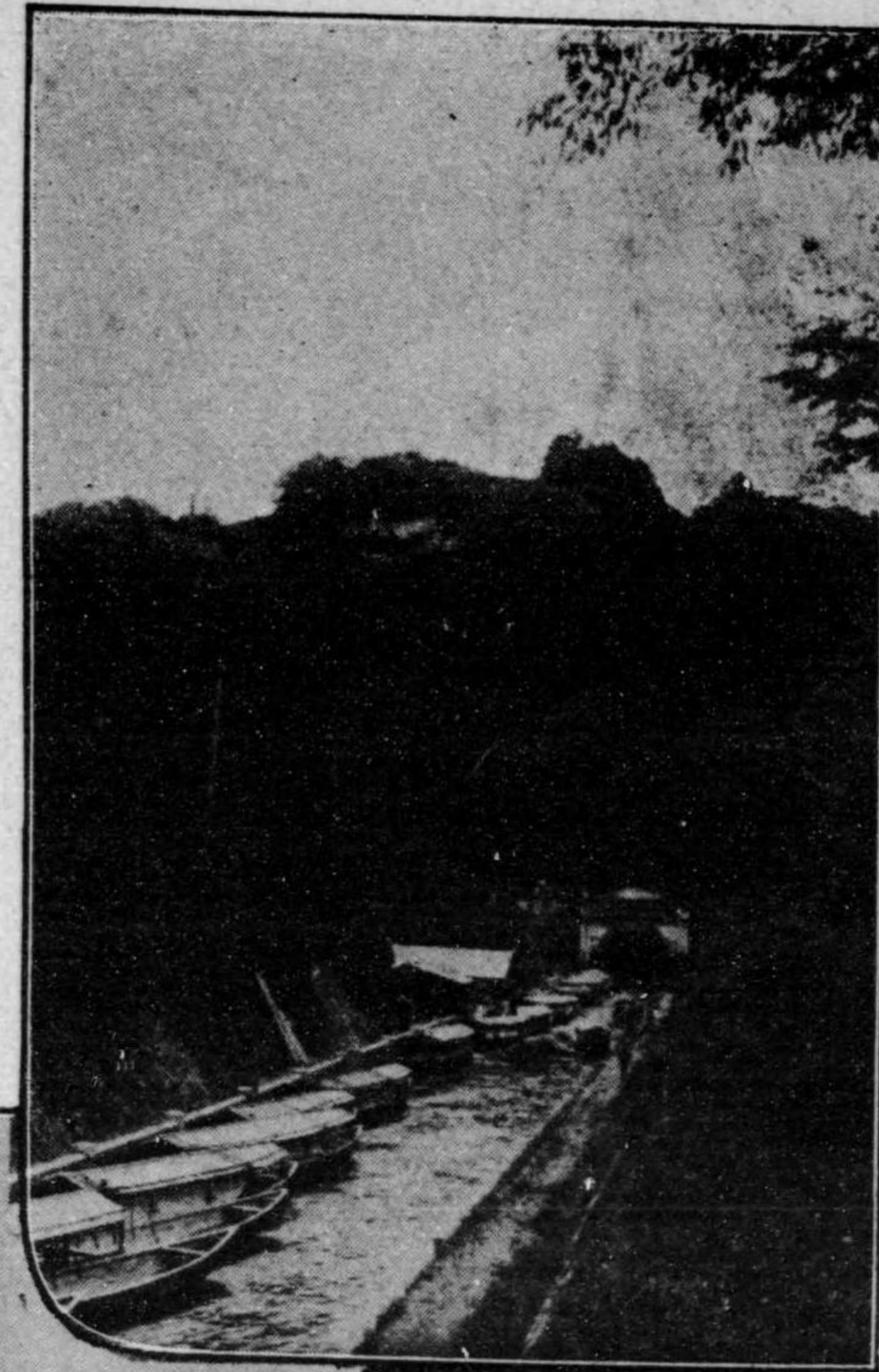


關 玄 院 滿 圓



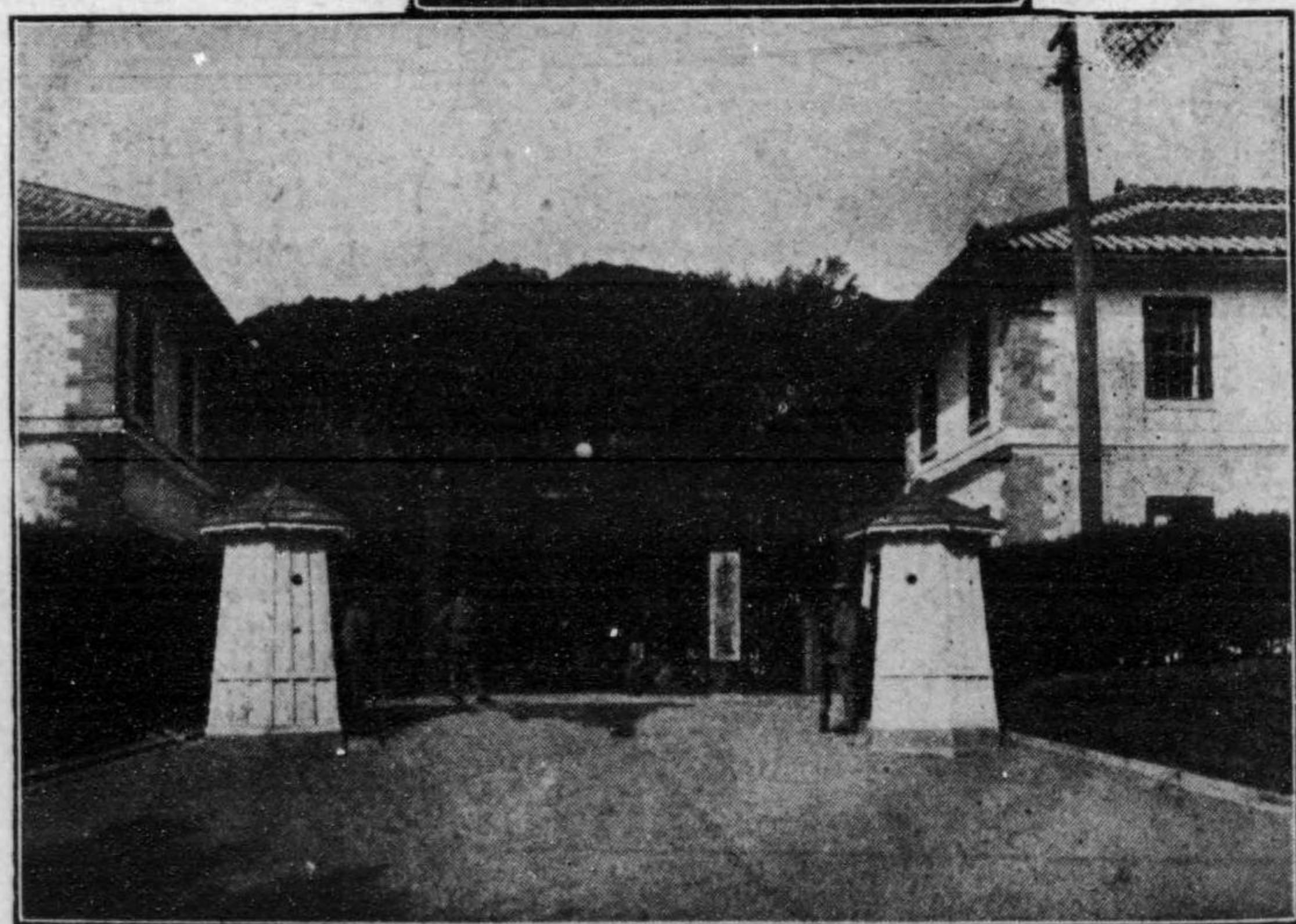
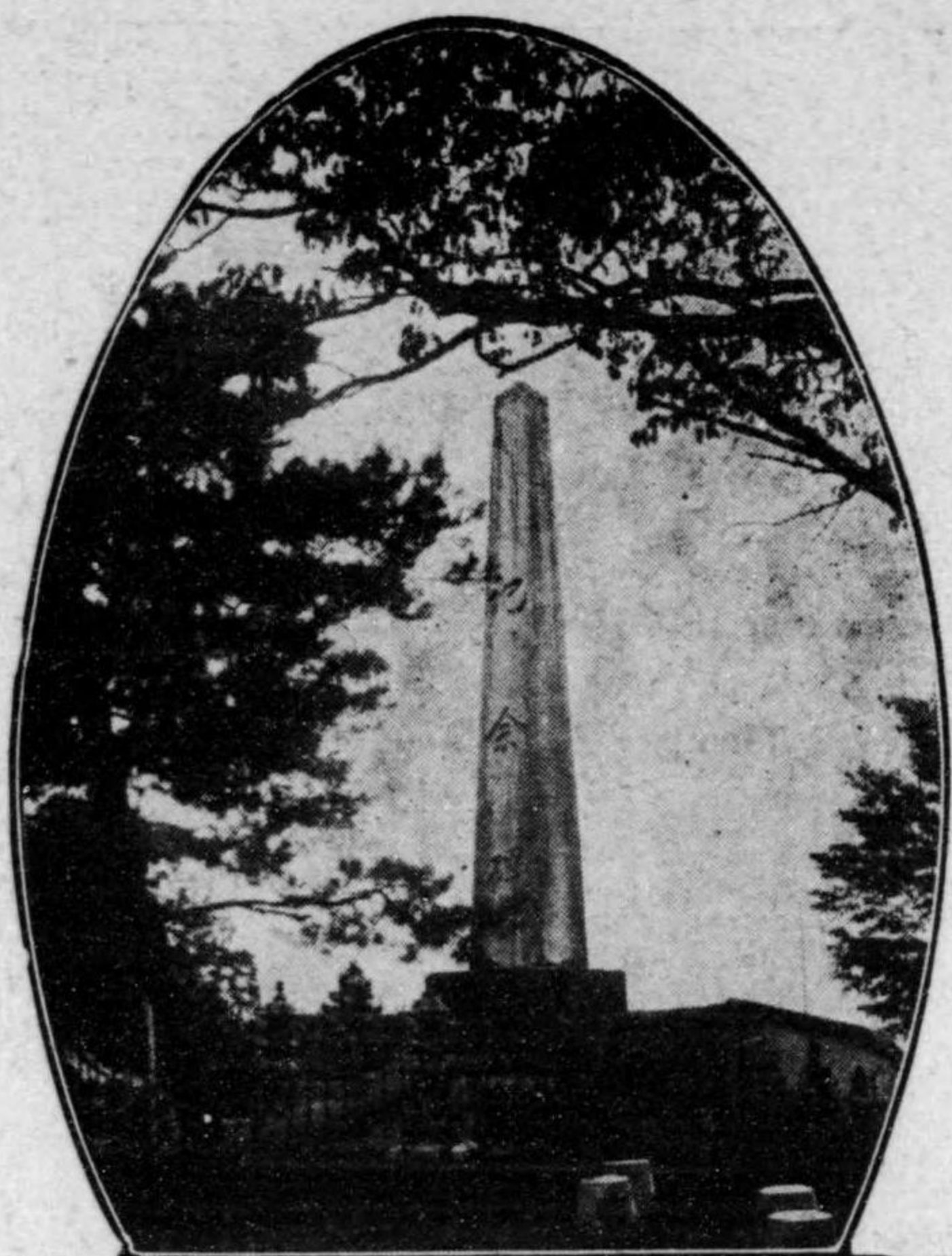
園 庭 院 滿 圓

第一疏水隧道東口

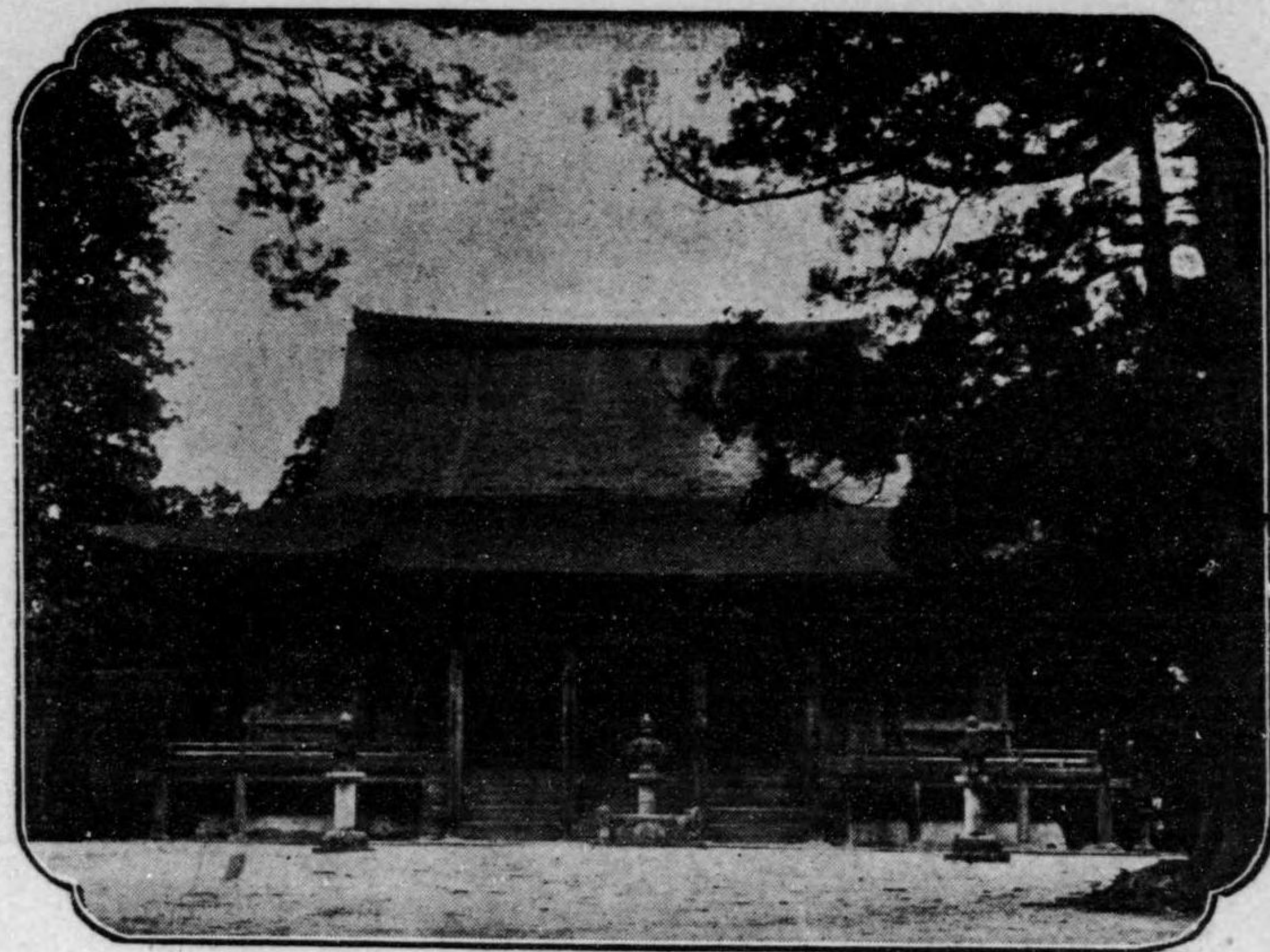


社 神 尾 三

御幸山紀念碑



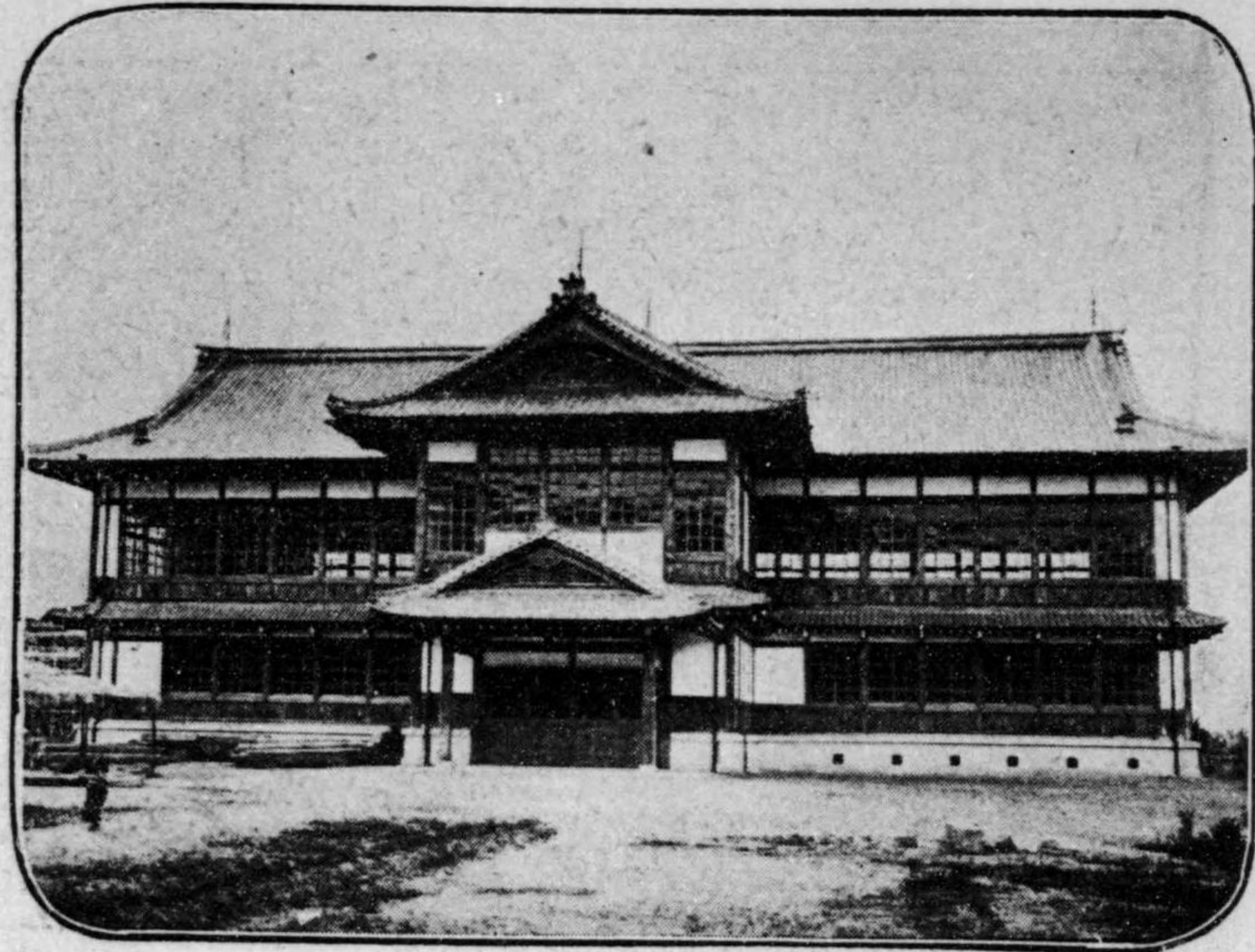
歩兵第九聯隊



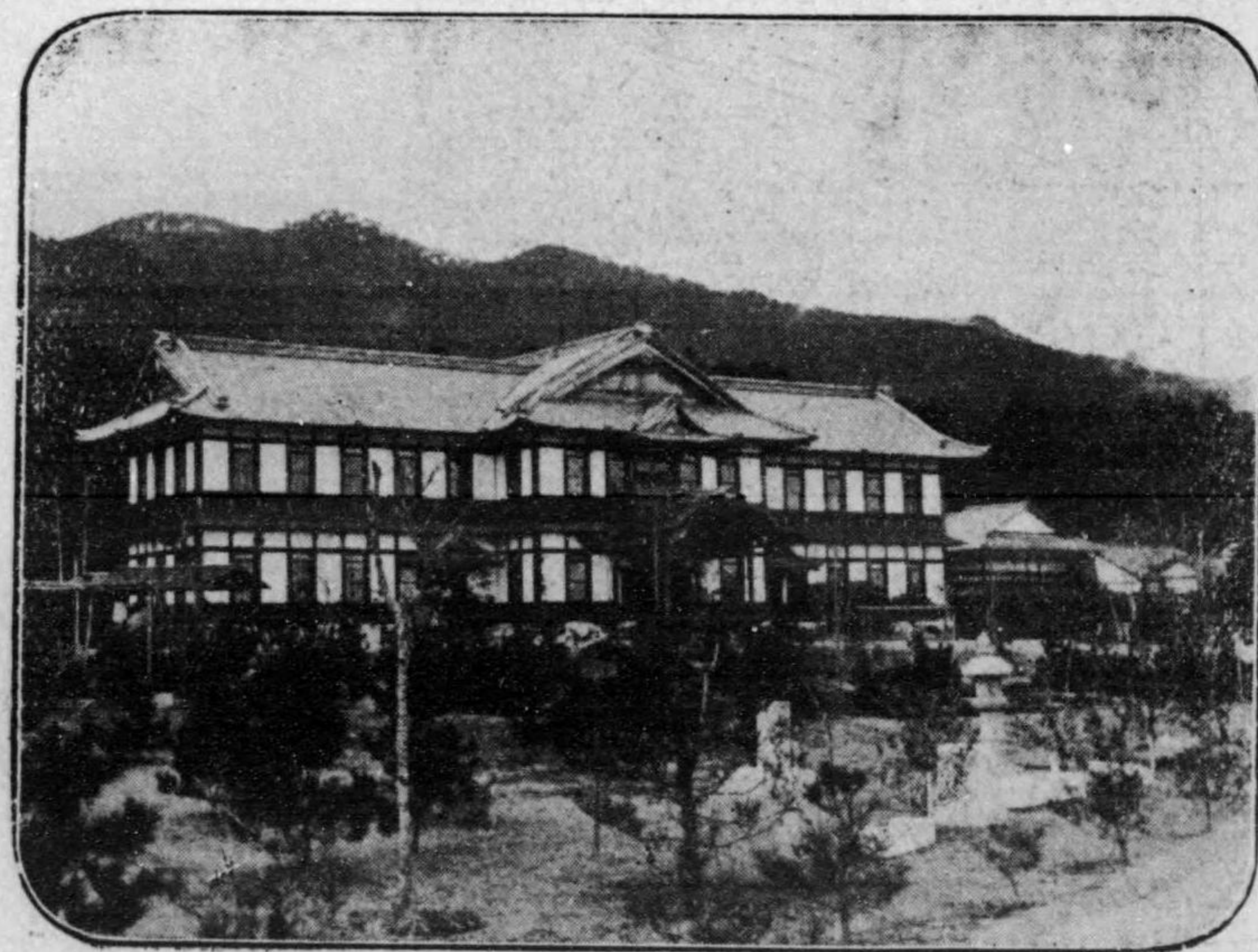
園城寺境內金堂



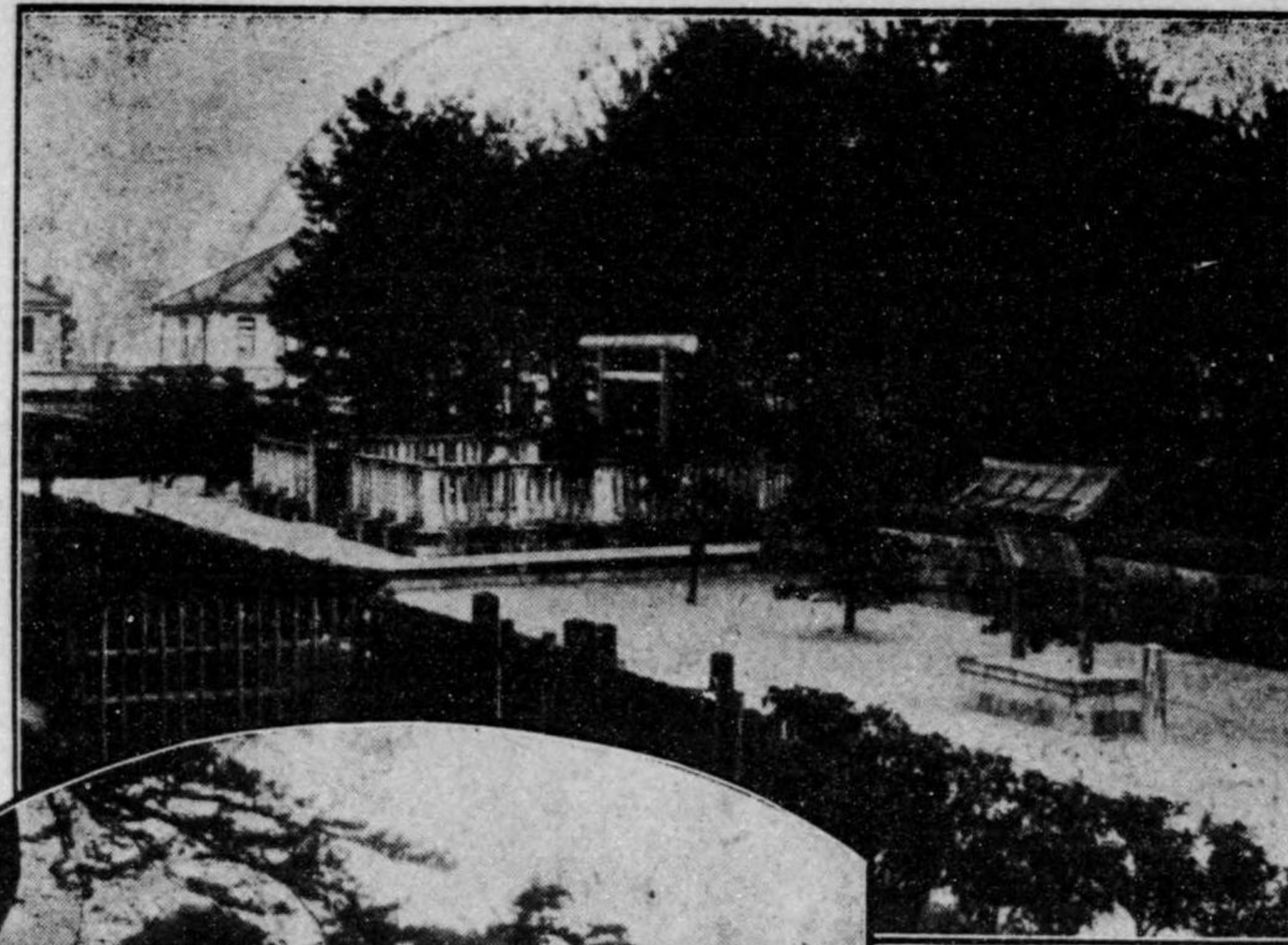
法明院



滋賀縣公會堂



滋賀物産陳列場



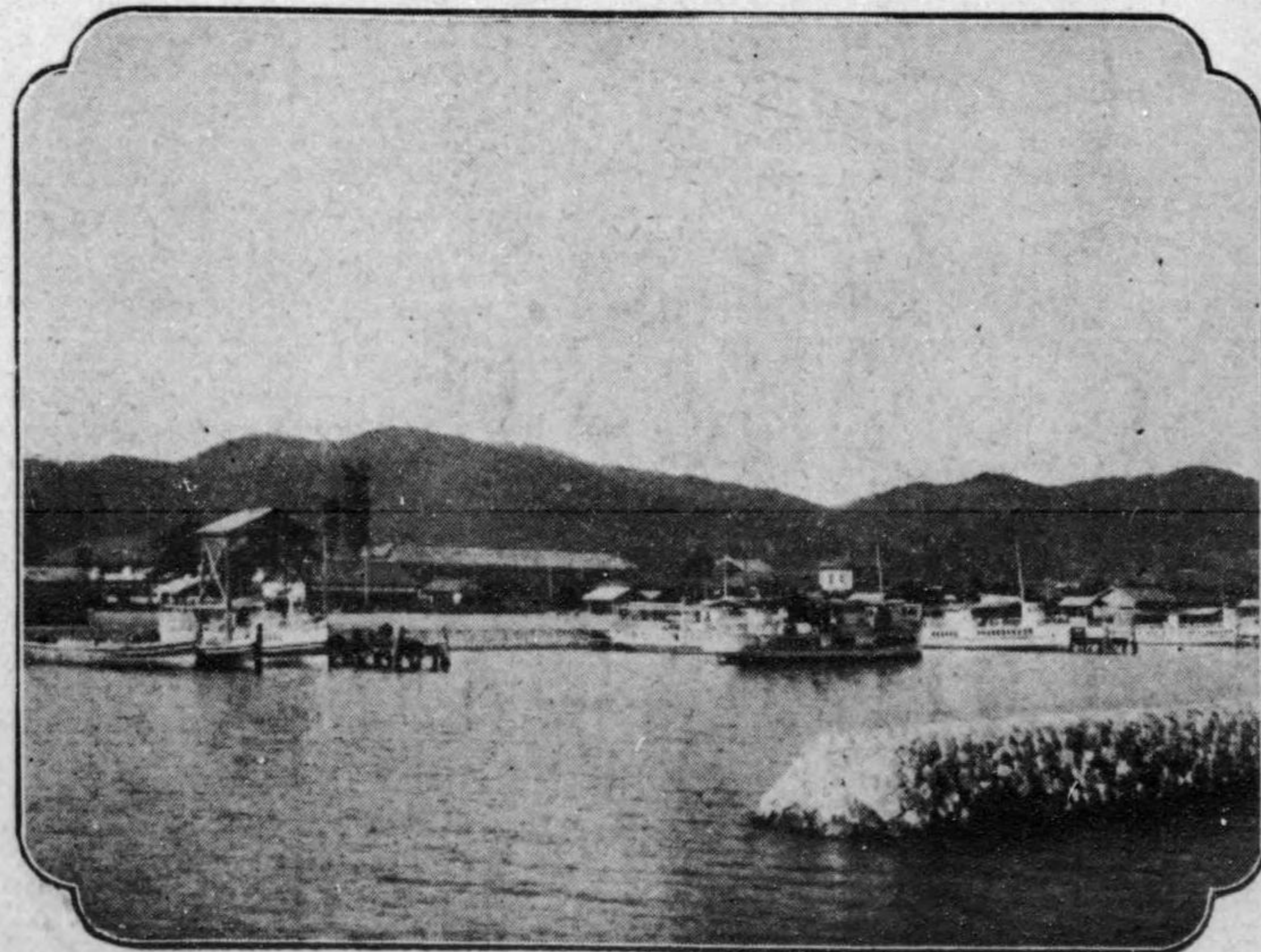
弘文天皇御陵



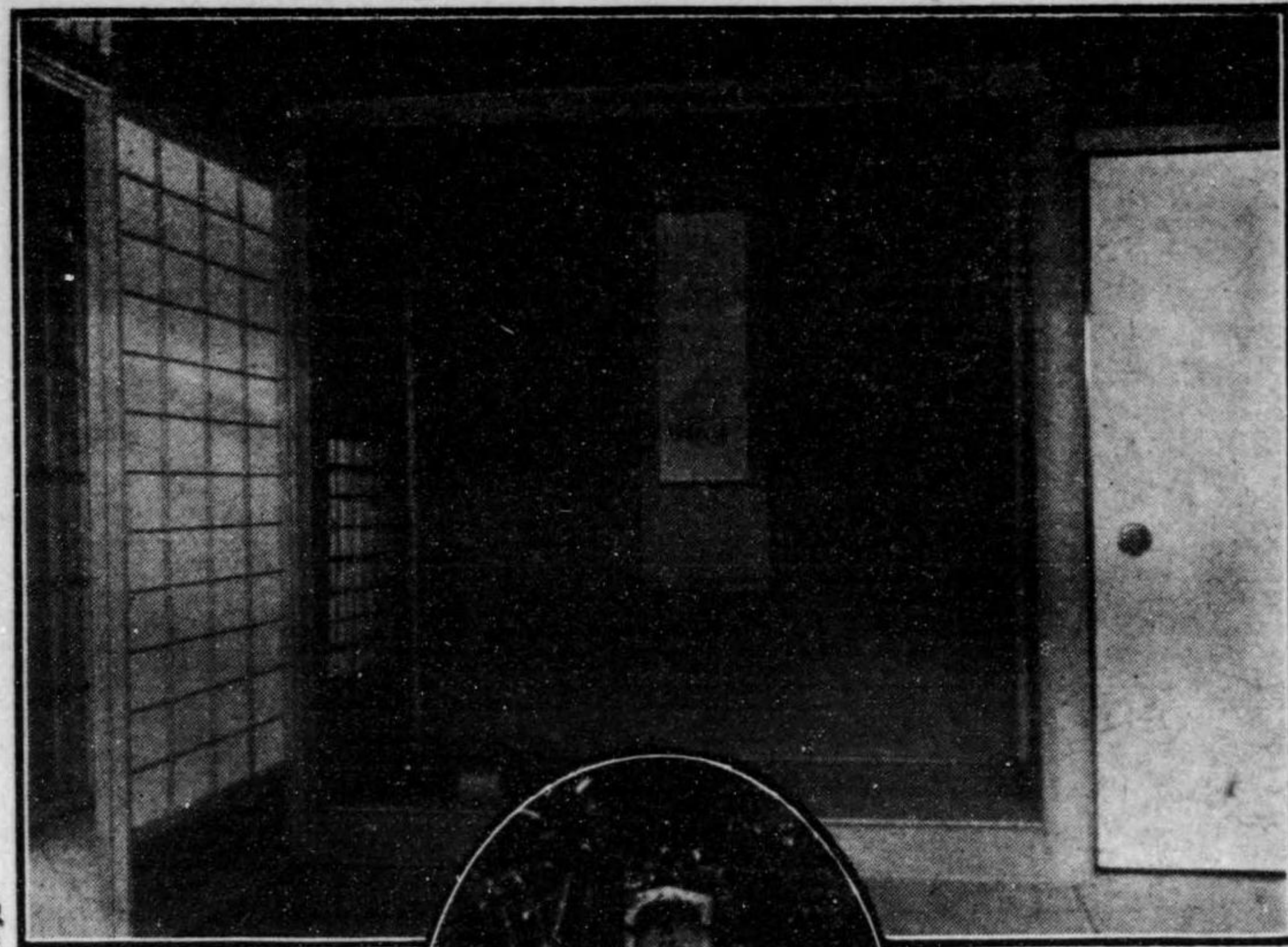
長等神社



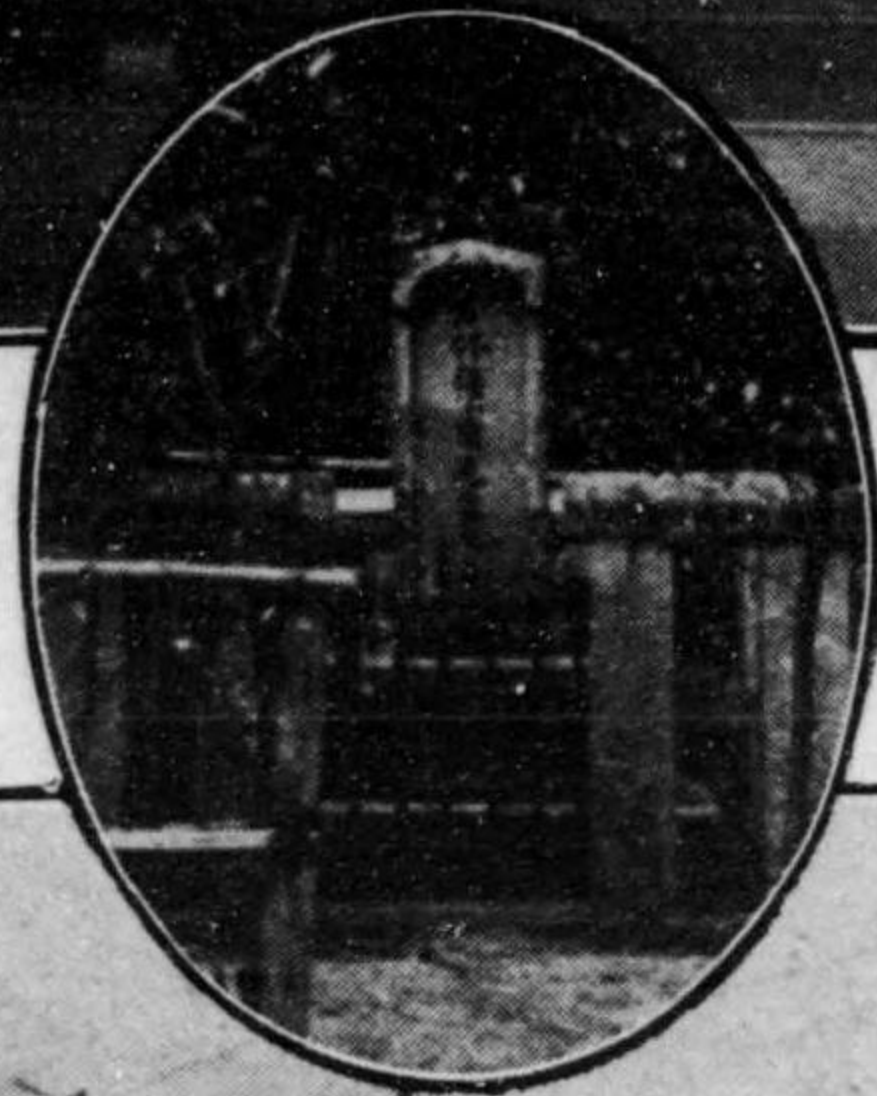
赤十字病院



紺屋ヶ関



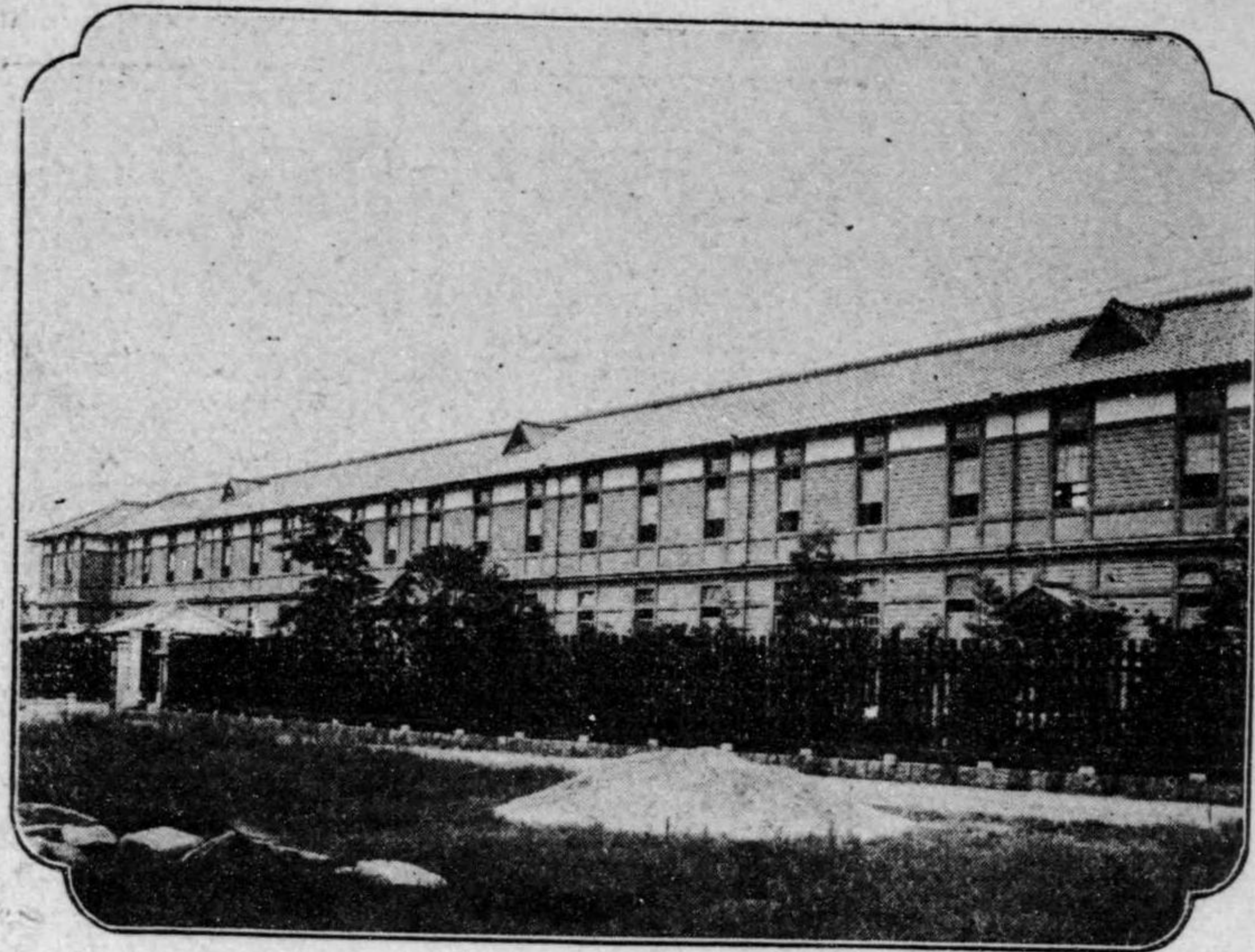
強齋先生の居宅



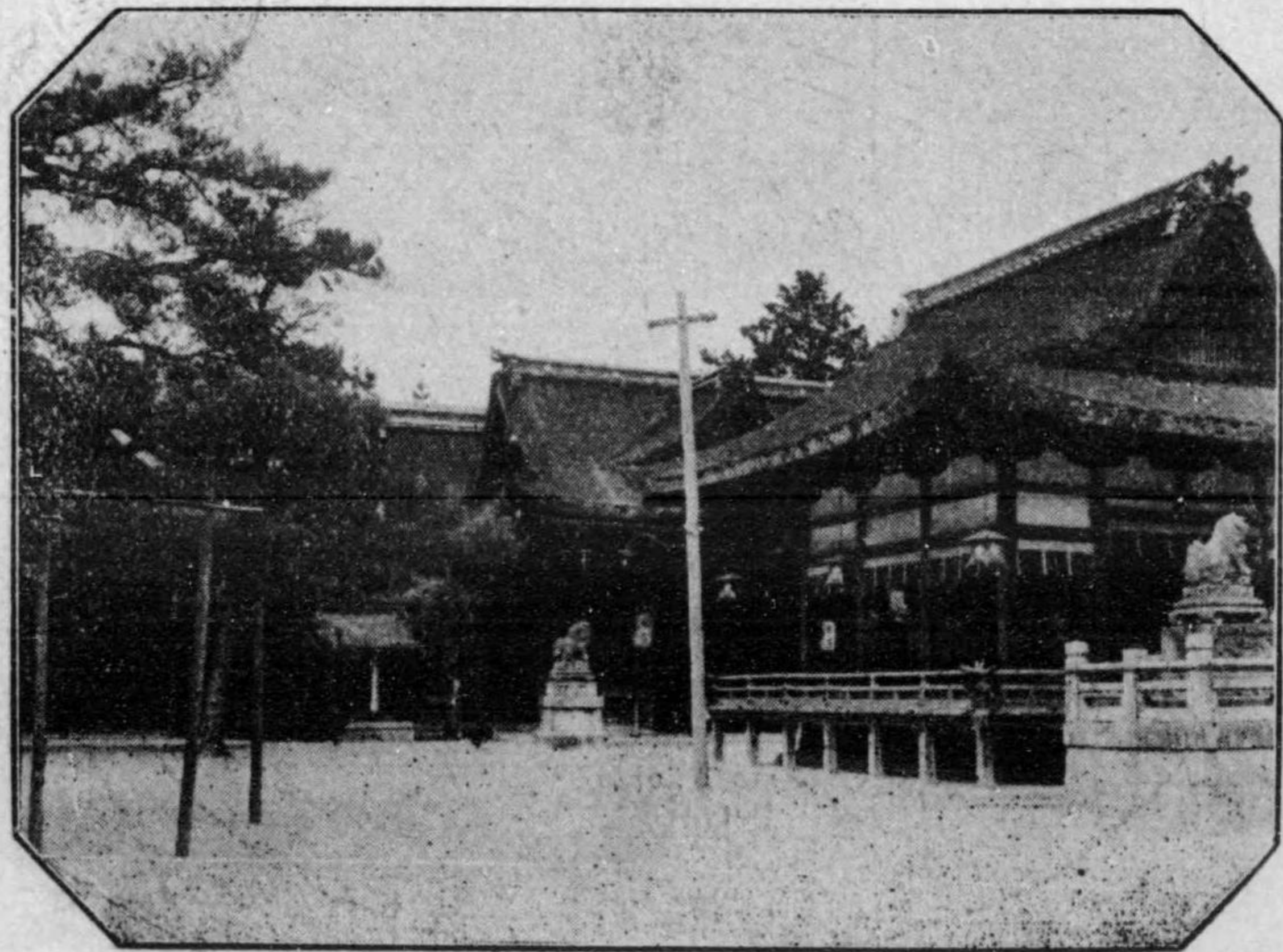
強齋先生の墓
(中央)



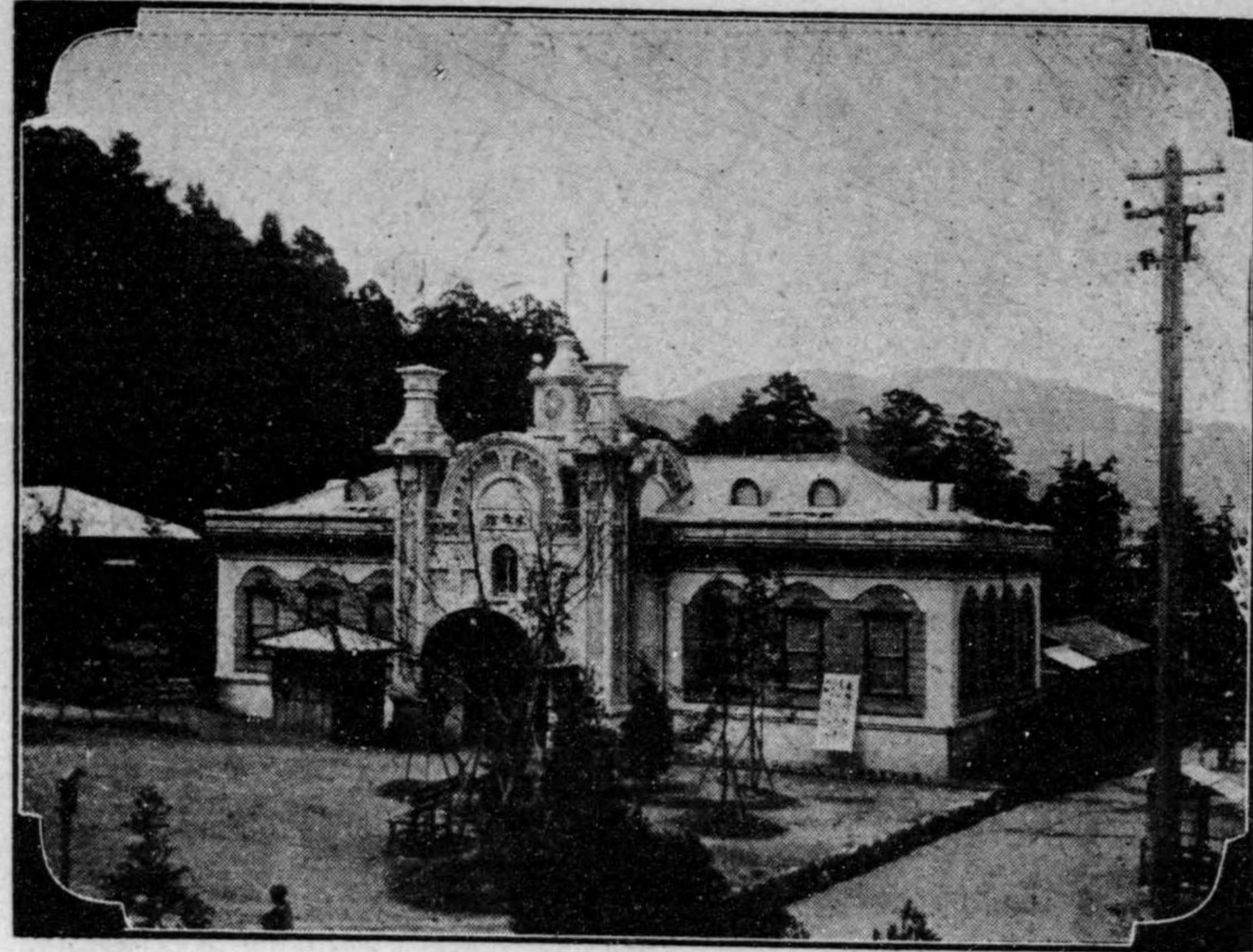
東京電車札ノ辻停留所



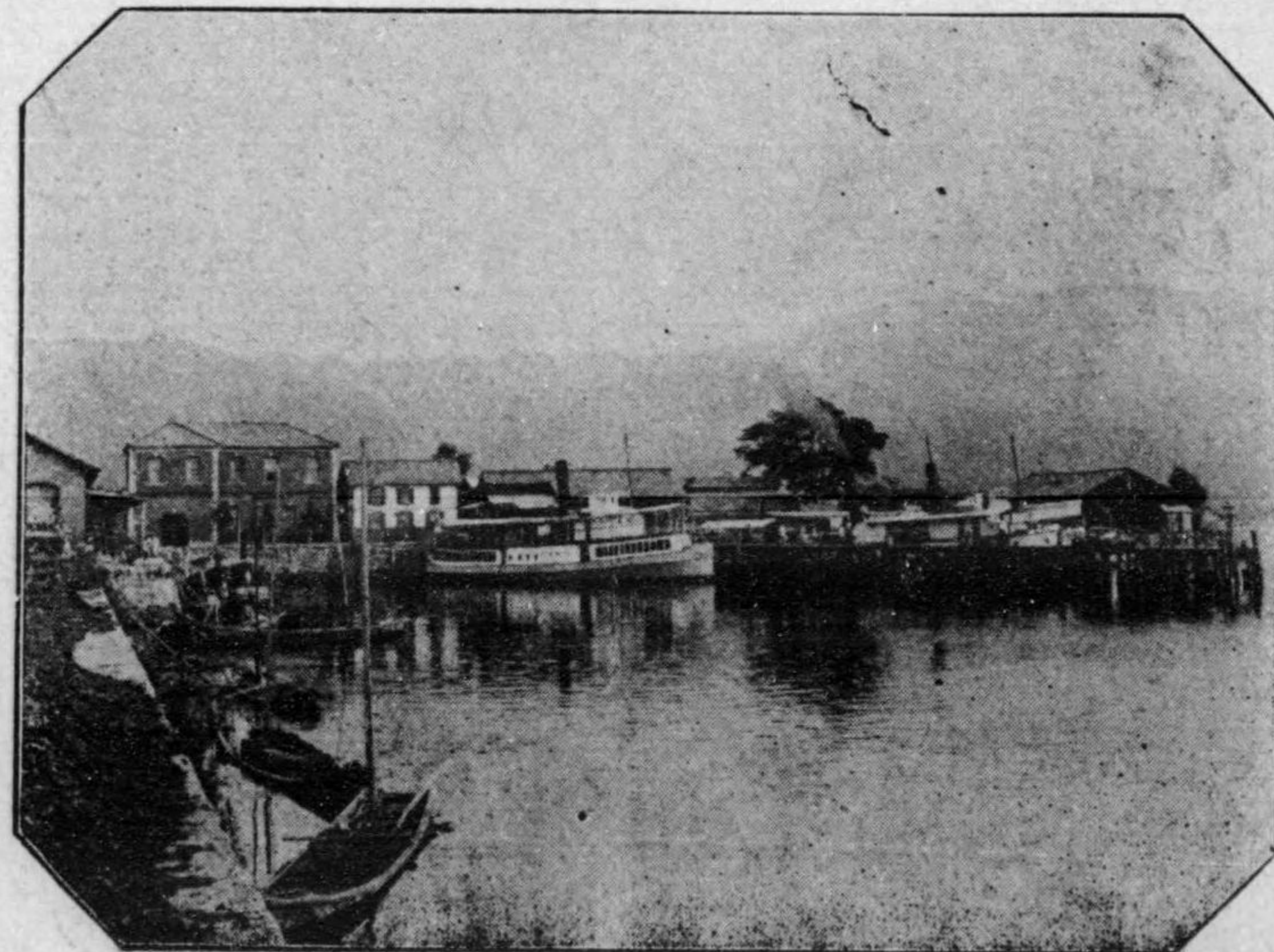
大津高等女學校



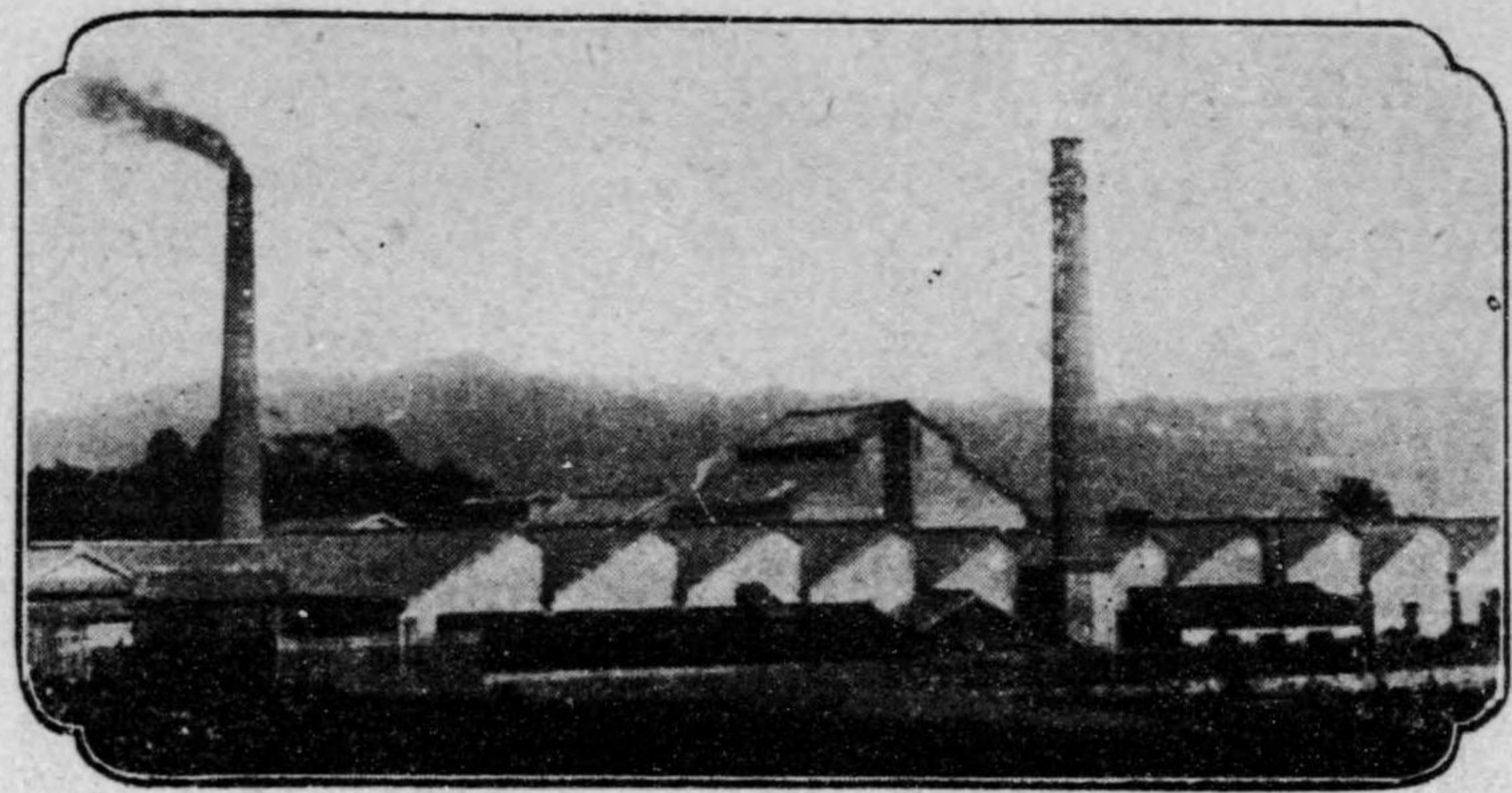
天孫神社



大津水族館



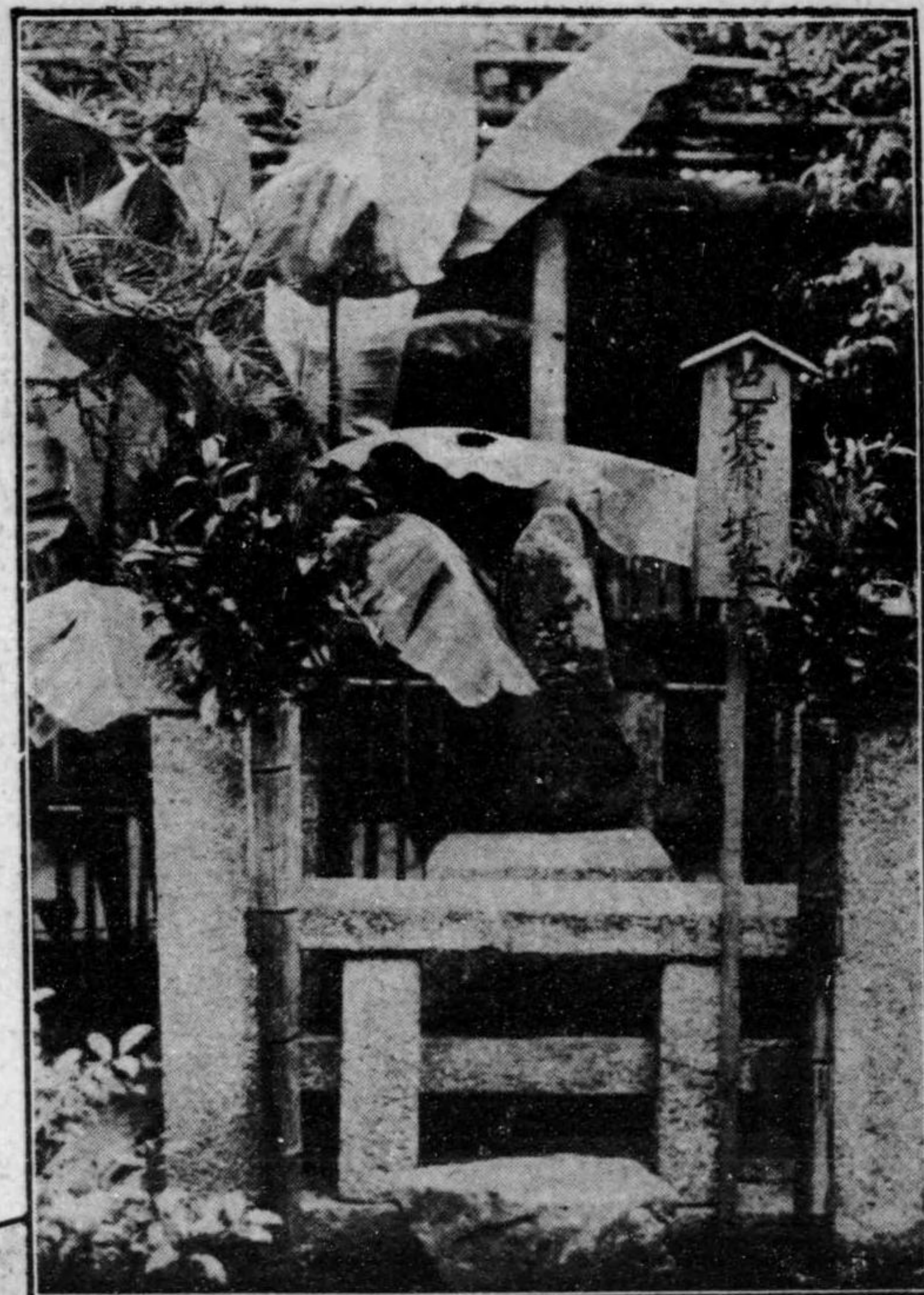
大津湖漚船會社波止場



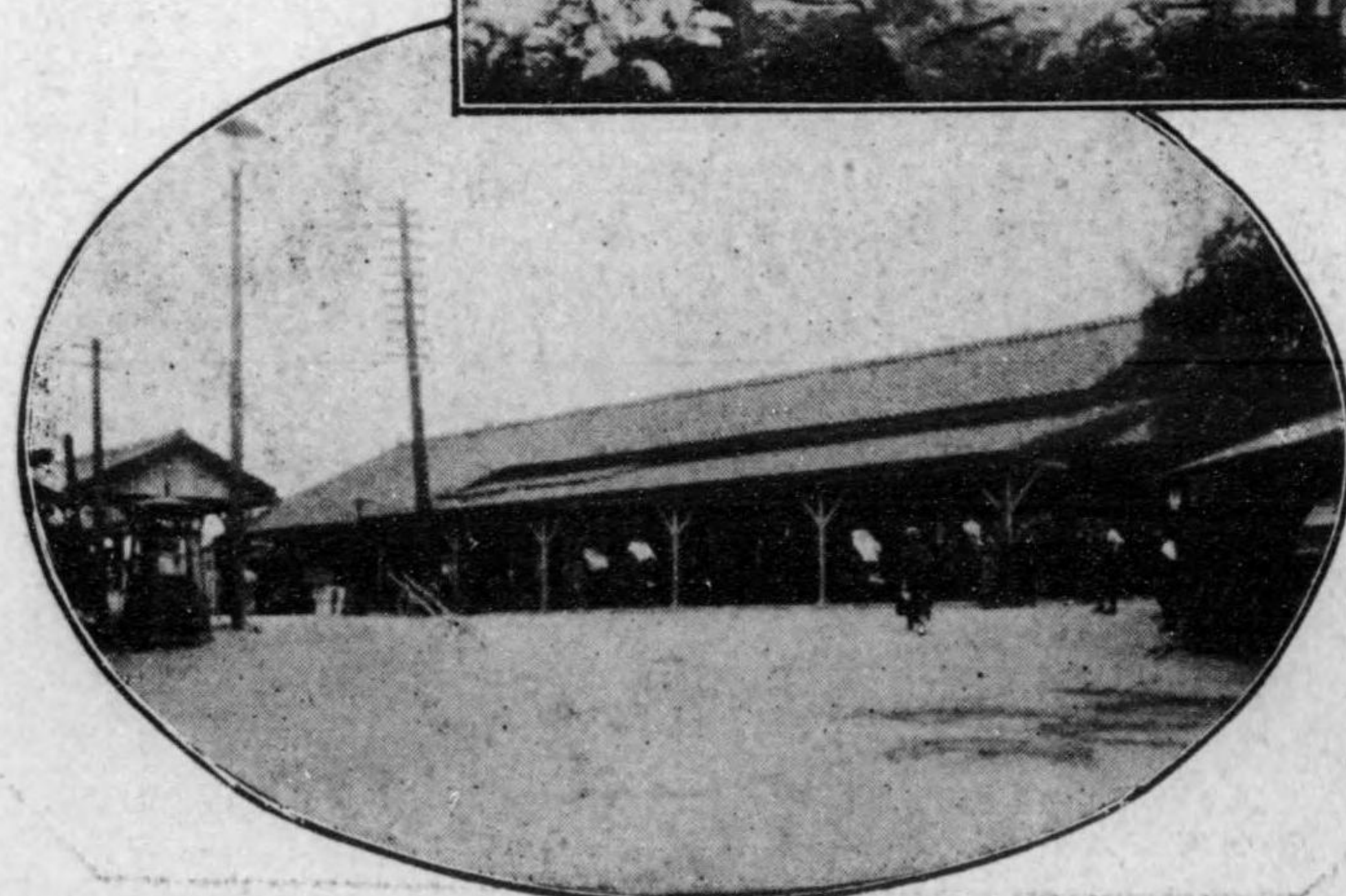
場工練製津大社會麻製國帝



墓之仲義曾木



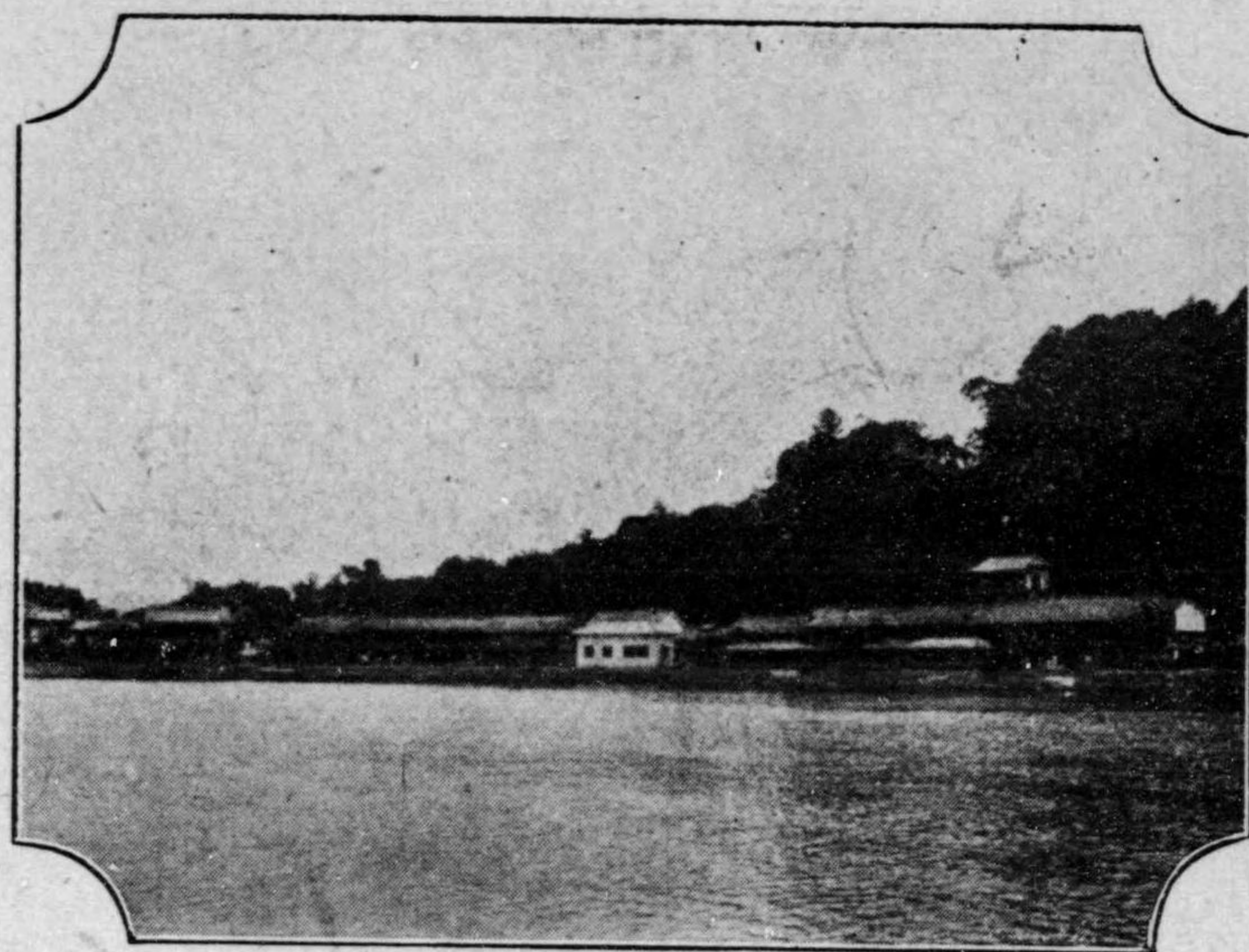
芭蕉翁之墓



大津驛



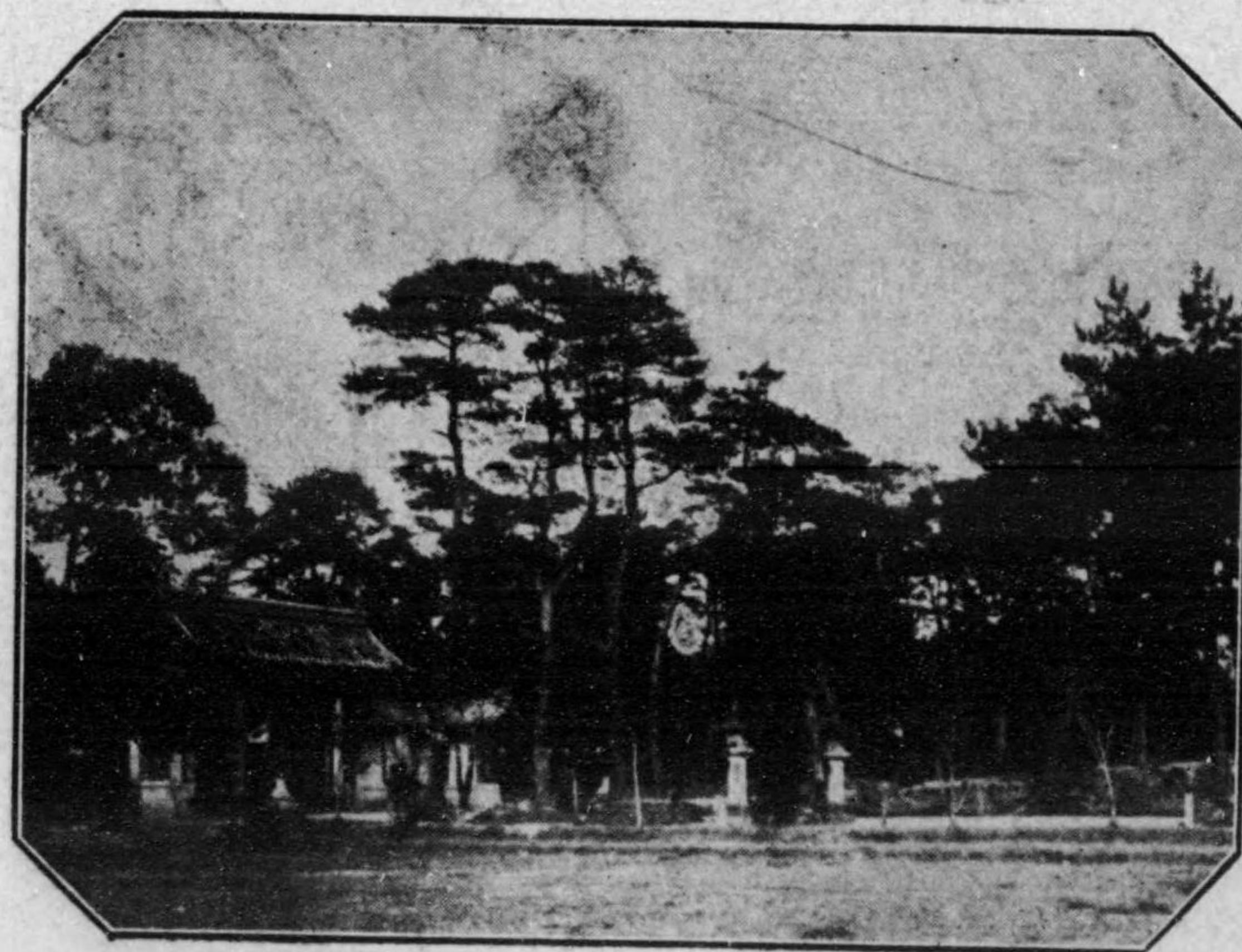
瀬田川洗堰



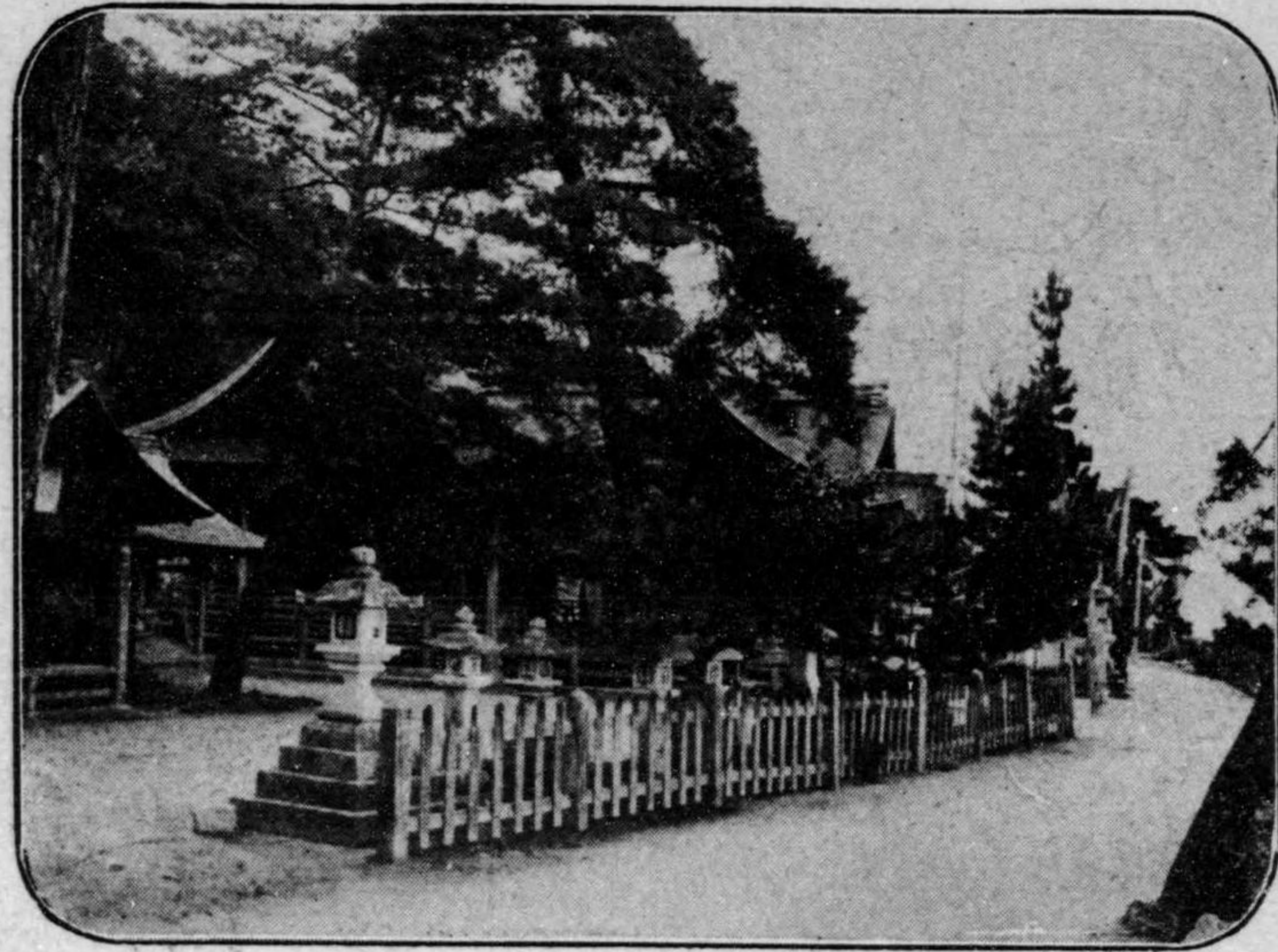
瀬田川よ石山を望む



雄松崎近江舞子



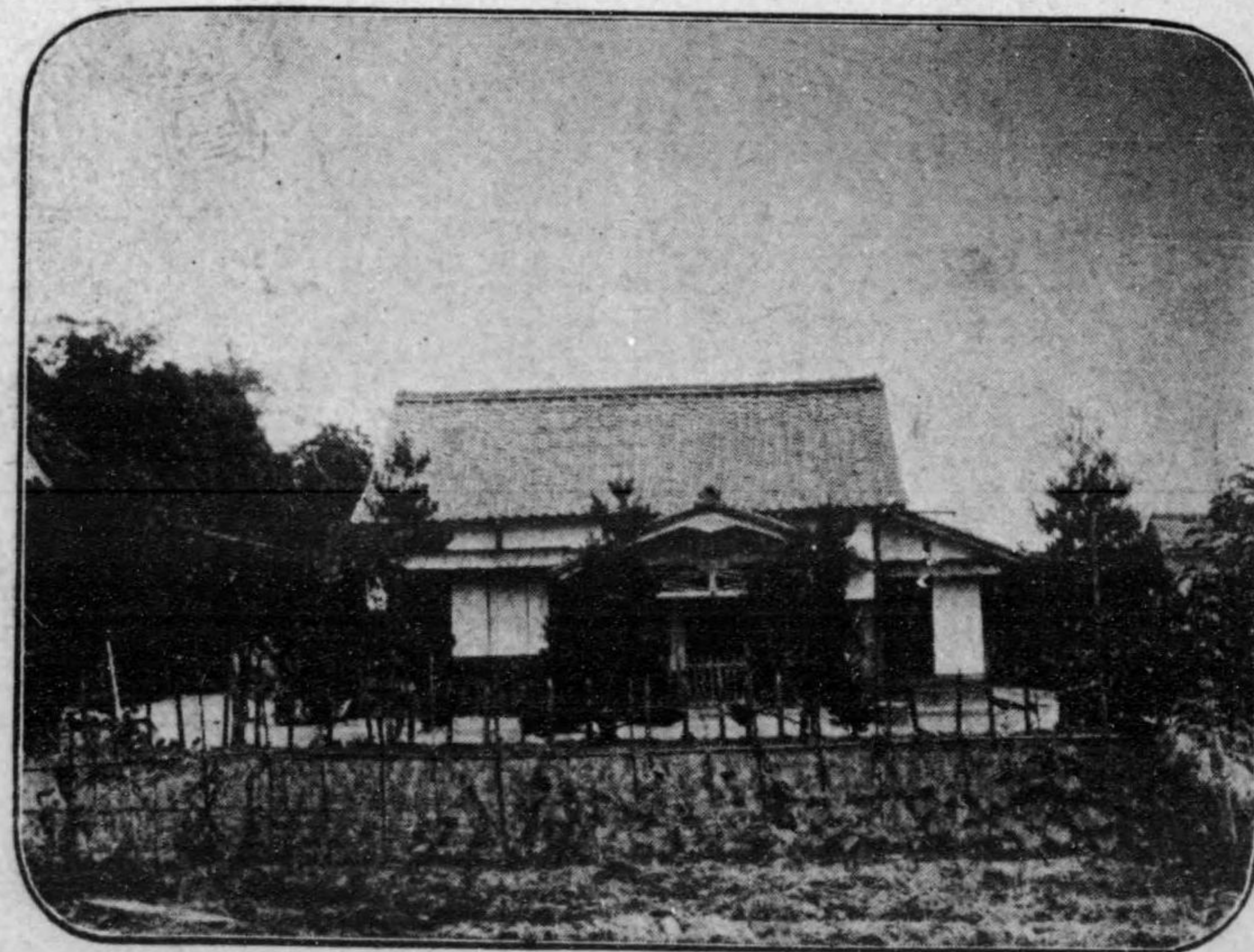
建部神社



社 神 鬚 白



社 神 吉 日 社 大 幣 官



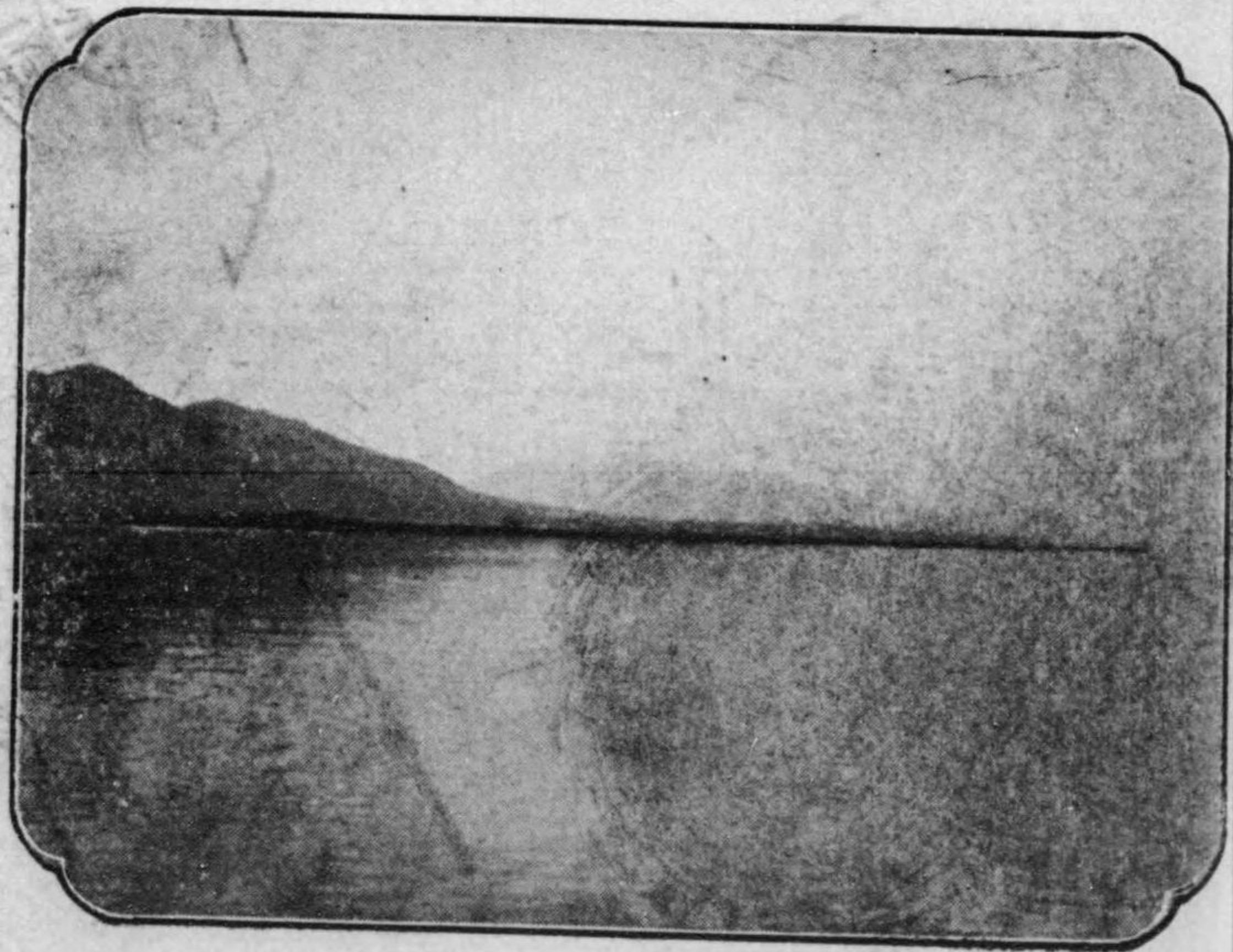
院 書 樹 藤



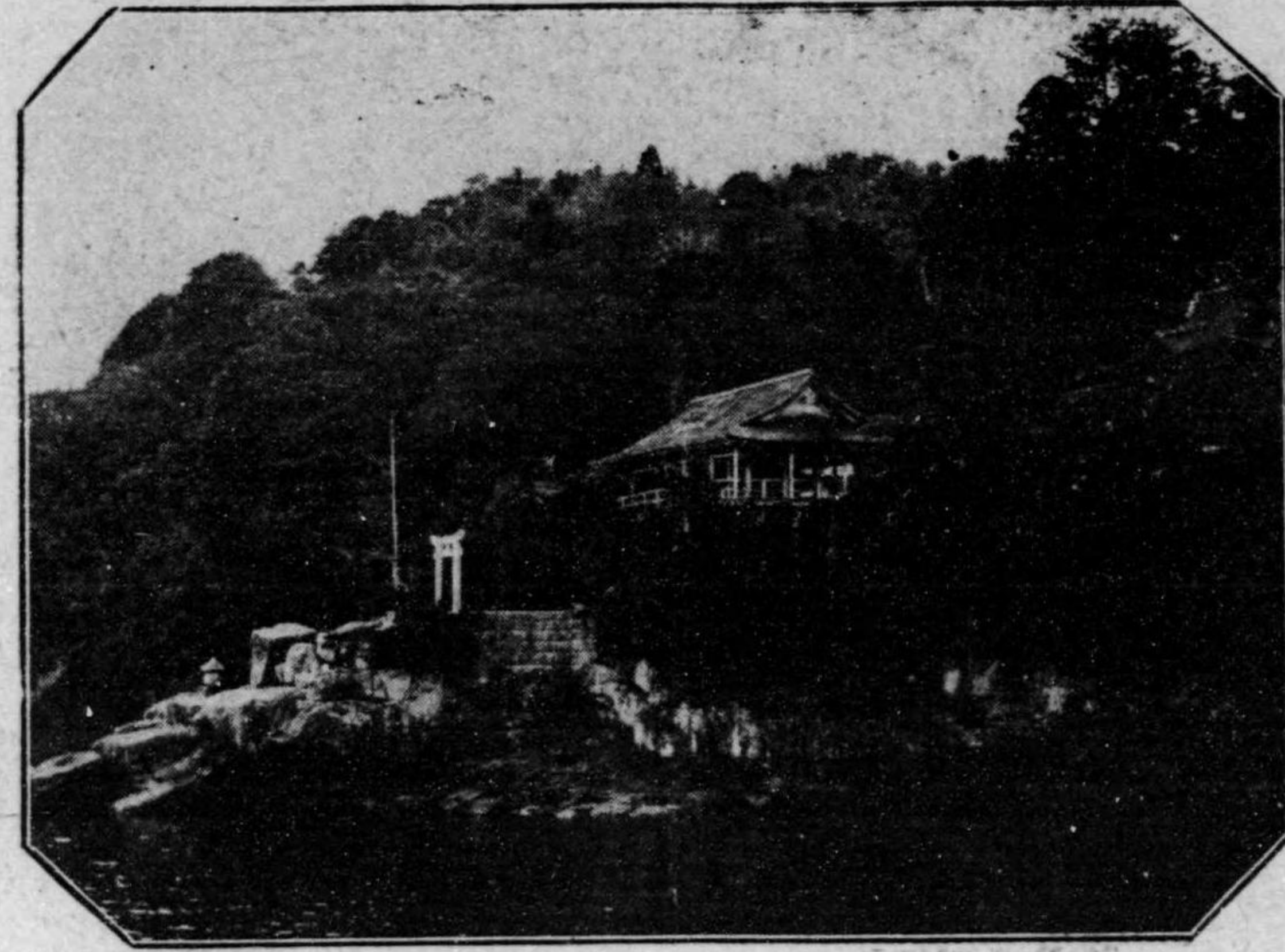
場 馬 櫻 吉 日



堂見浮の田堅〇



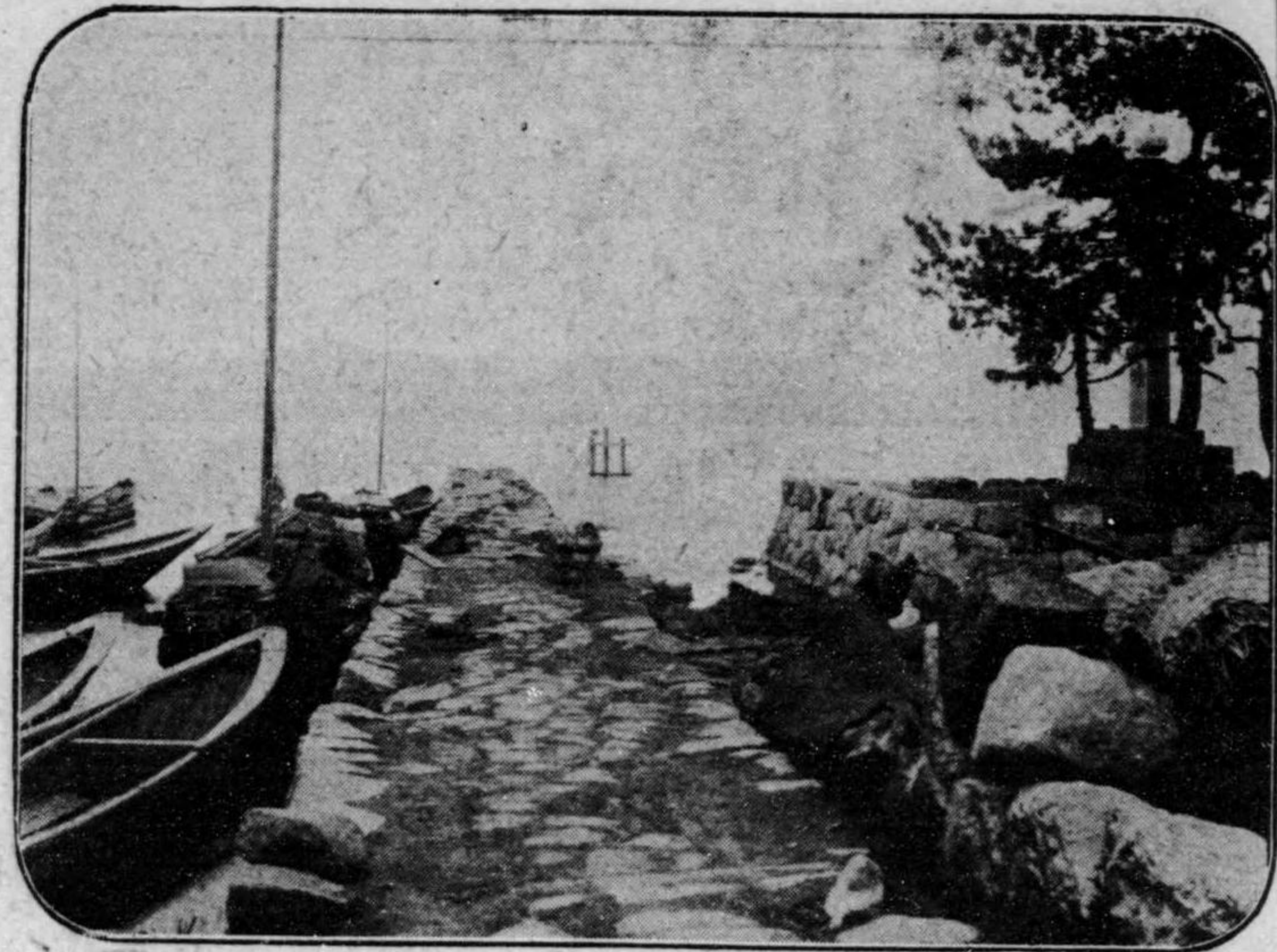
雪暮の良比〇



島生竹〇



寺命長



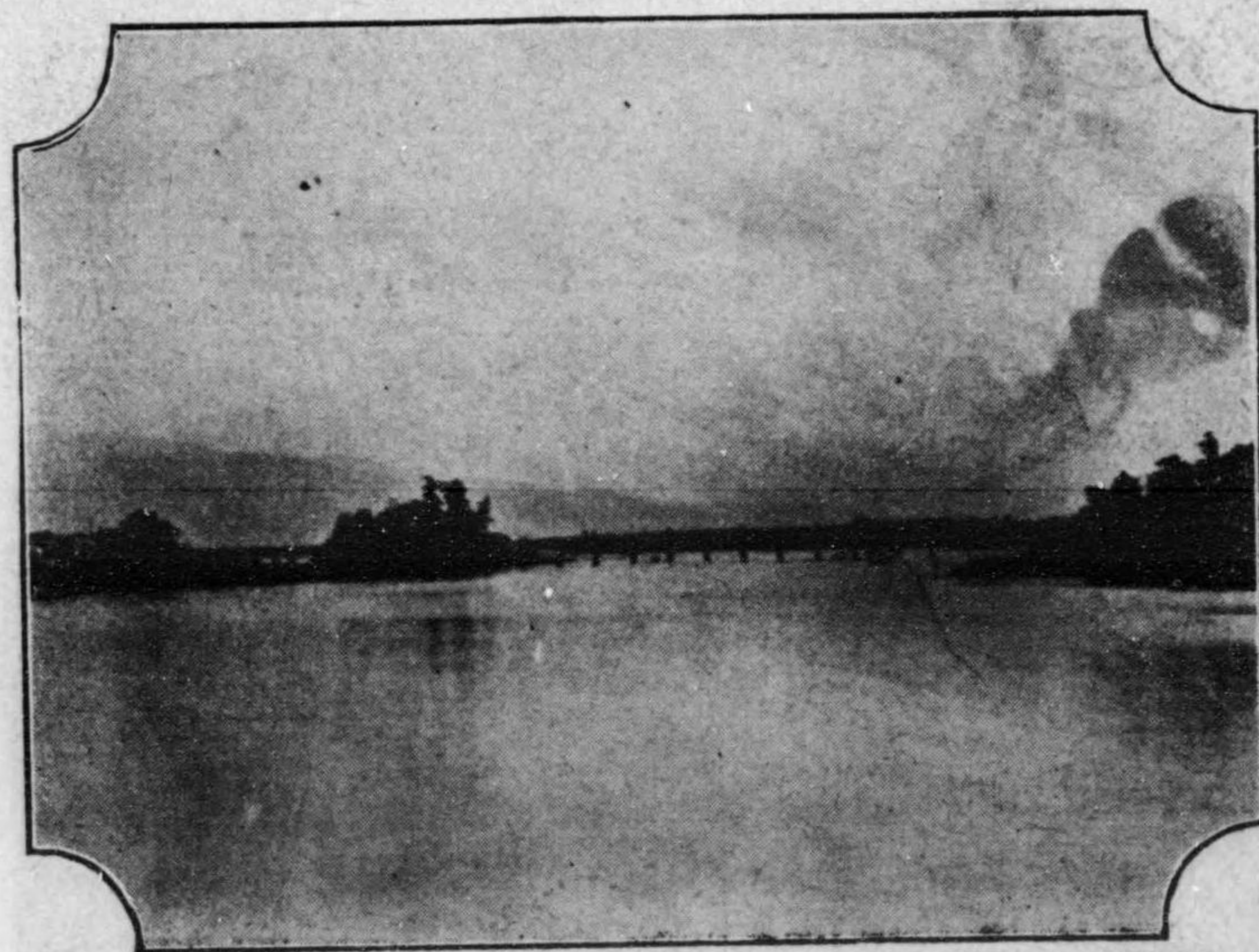
帆 歸 の 橋 矢 〇



嵐 晴 の 津 栗 〇

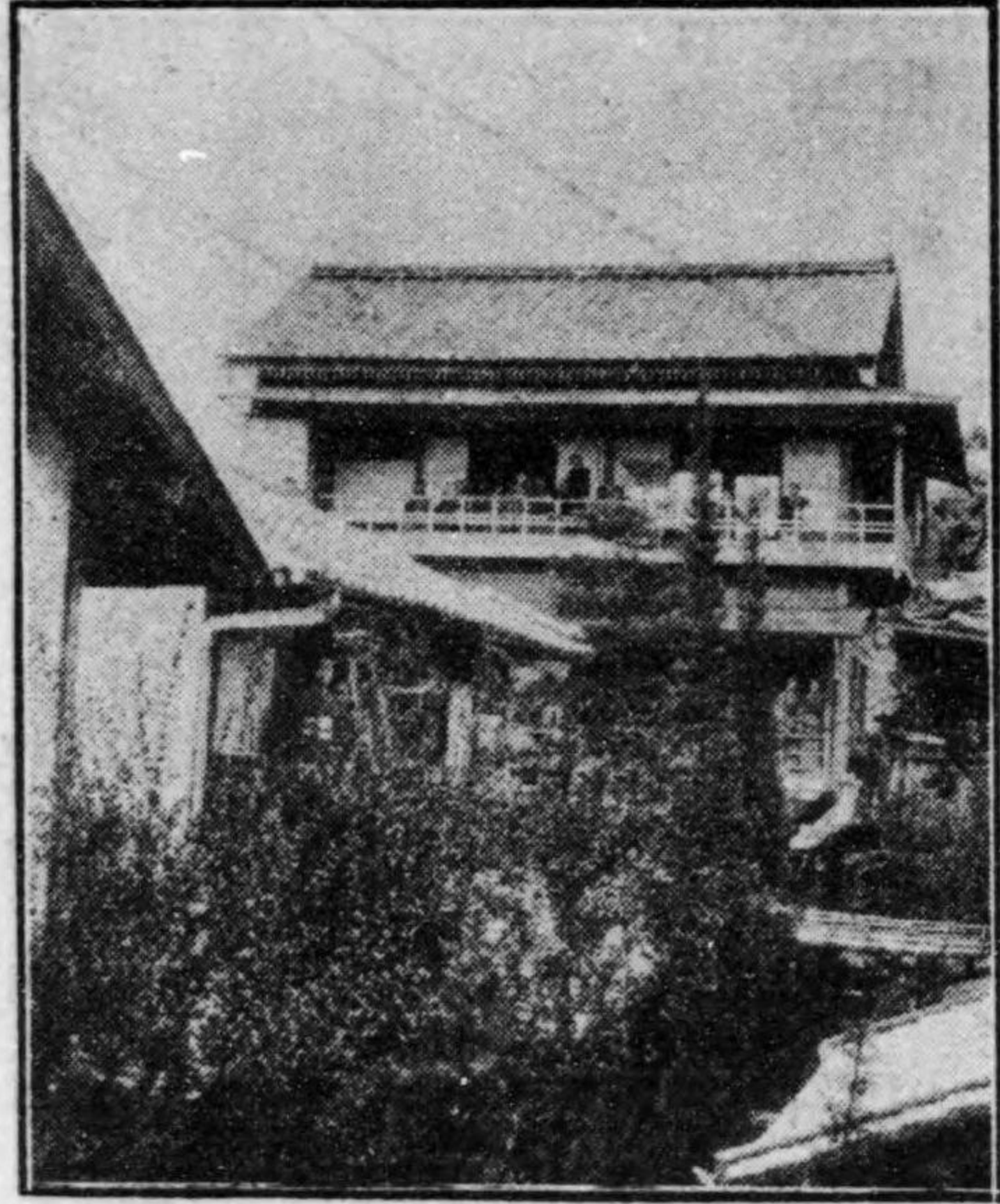


寺 井 三 〇



橋 唐 田 瀬 〇

會
肉席
御料理



三階樓上眺望絶佳
宴會講席等精々

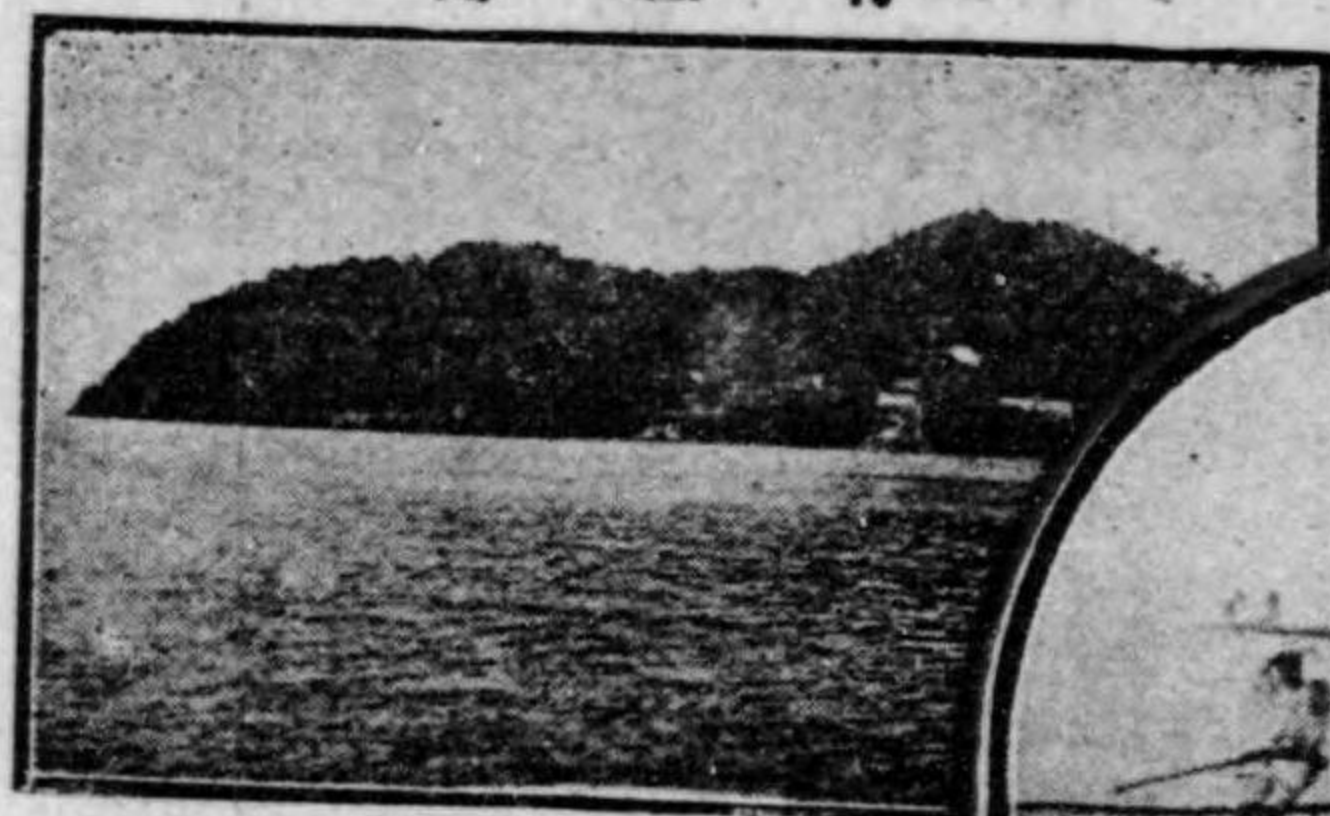
御便利に計らひ可申候

大津市石橋町

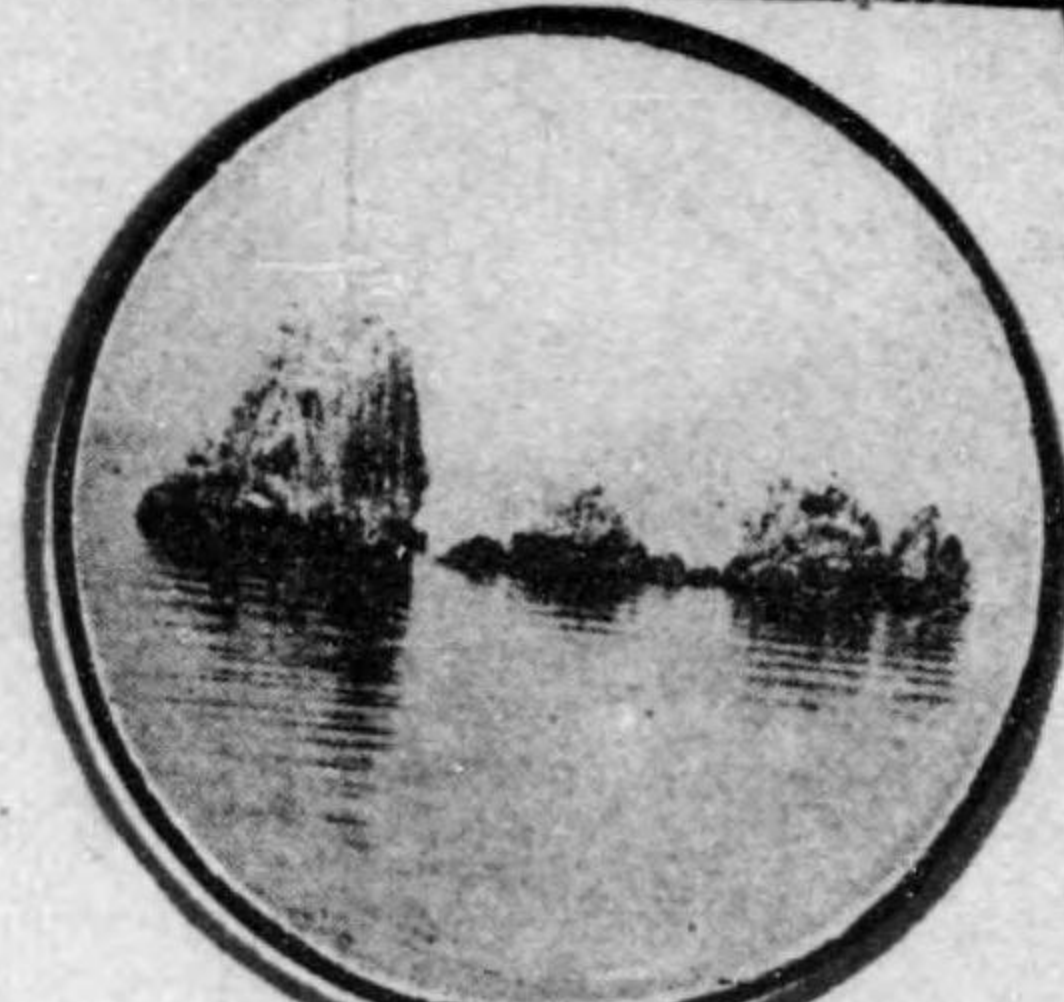
廣梅樓

電一五八番

竹生島



近江舞子



沖之白石

又遊覽
船大小
數隻アリ
テ、貸切
リノ御需
メニ應ズ

株式會社

東海道名古屋線及彦根、
若狹街道今津、敦賀街
消鹽津ノ各要口ト東
西兩江州ヲ廻航シ
郵便物モ搭載ス
ル確實ナル運
搬ヲナセリ

毎年
自四月
至十一月
白石丸廻遊
毎月

一日、十五日、
日曜、祭日、

出船

大津

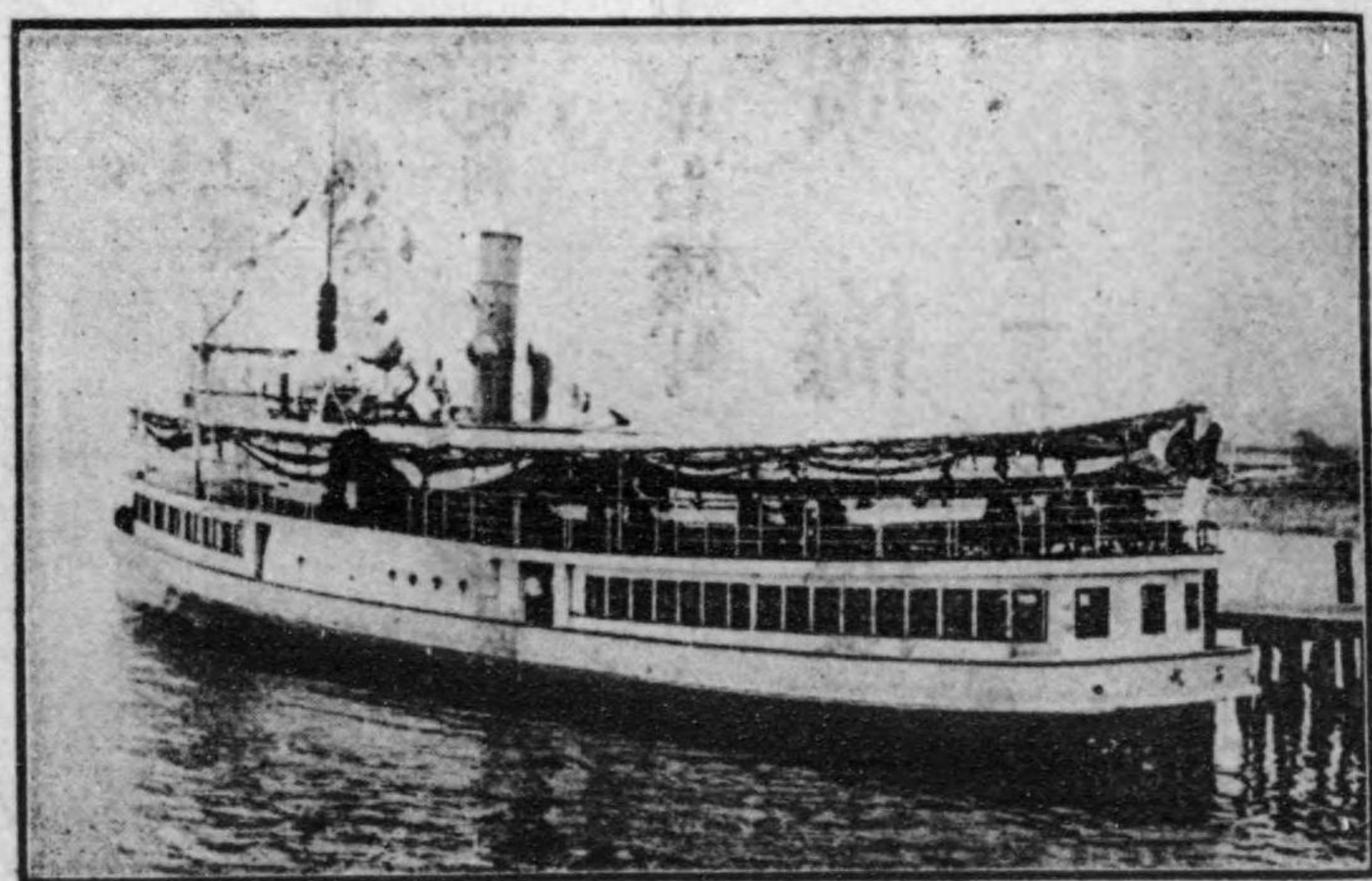
發午前九時卅分
着午後七時卅分

外ニ毎日竹生島行ハ
午前七時同十時發日歸リノ便アリ

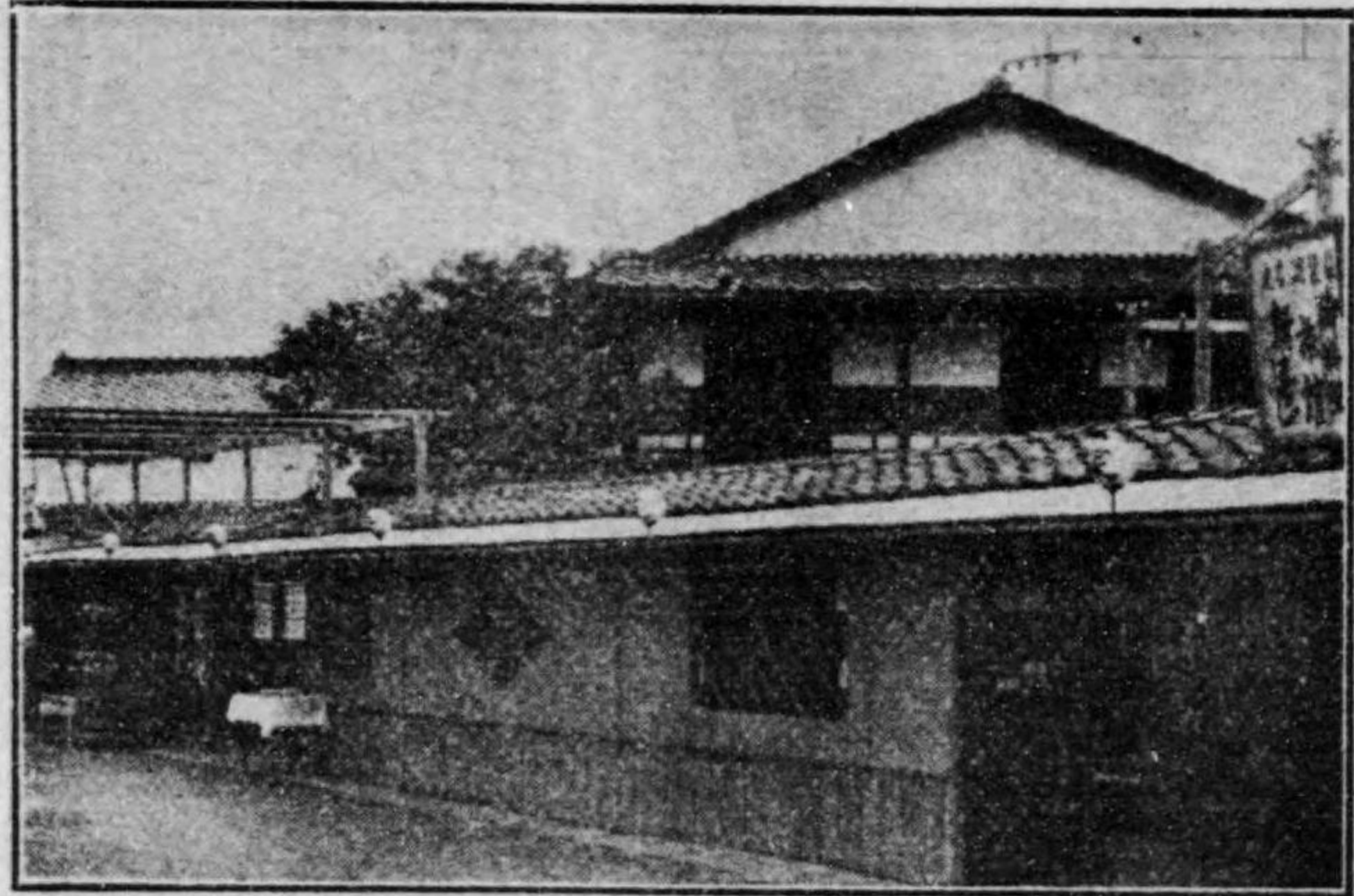
大湖汽船會社

遊覽箇所

堅田浮御堂、近江舞子、
白鬚神社、竹生島、
多景島、沖ノ白石、
伊崎、沖ノ島、
長命寺
船内に御手輕
和洋料理
浴室の設
備あり



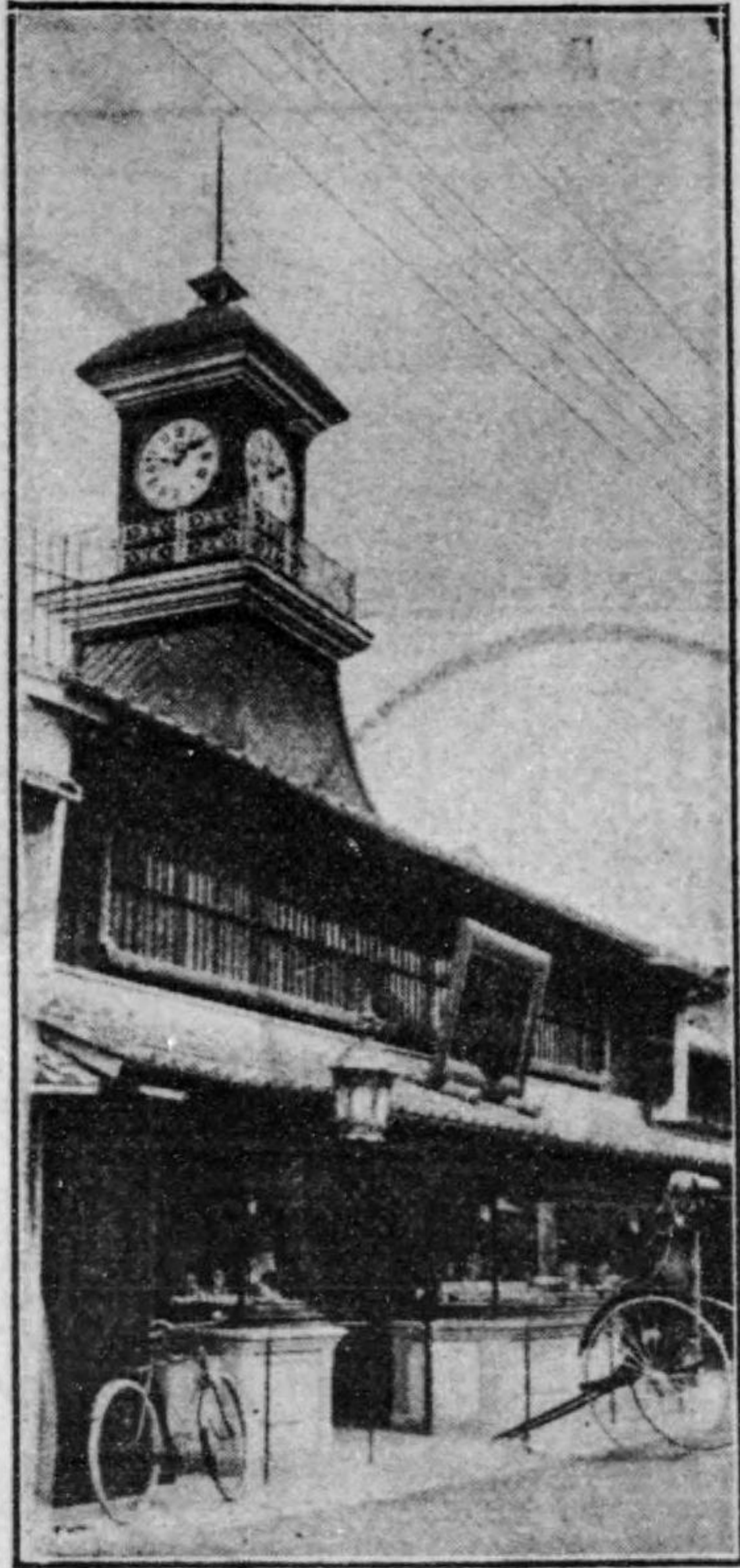
當會社ハ毎日數回定規船出船大
津ヲ起點トシテ北陸線長濱



大津市下北國町
御料理
旅館
菊屋

電壹貳壹番

三井寺下疏水河畔
菊屋支店
輕便
御料理
湖月庵



商品目錄

- 一金銀時計及附屬品
- 一貴金屬美術製作品
- 一並ニ御進物用紀念品
- 一金銀綠眼鏡及雙眼鏡
- 一金銀煙管及煙草入金物類
- 一懷中電燈及萬年筆
- 一東京金庫及手提金庫
- 一蓄音器各種及新吹込音譜

大津市樹屋町
今堀時計店
長電話二三一番
振替大阪二〇五九八番
伊賀名張町
今堀支店

洋傘製造

雜貨商

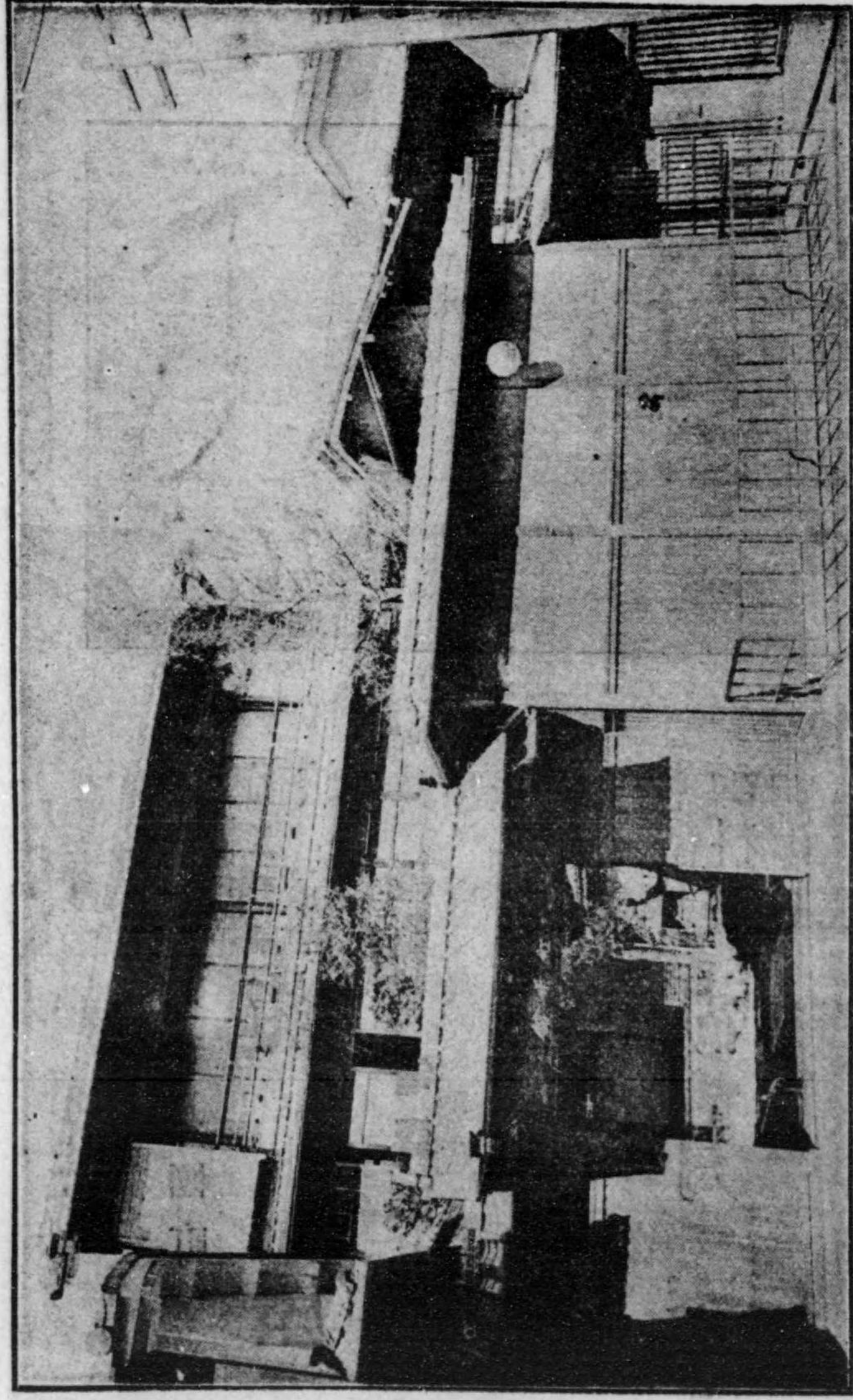
大津市中町通太間町角

池内正價堂

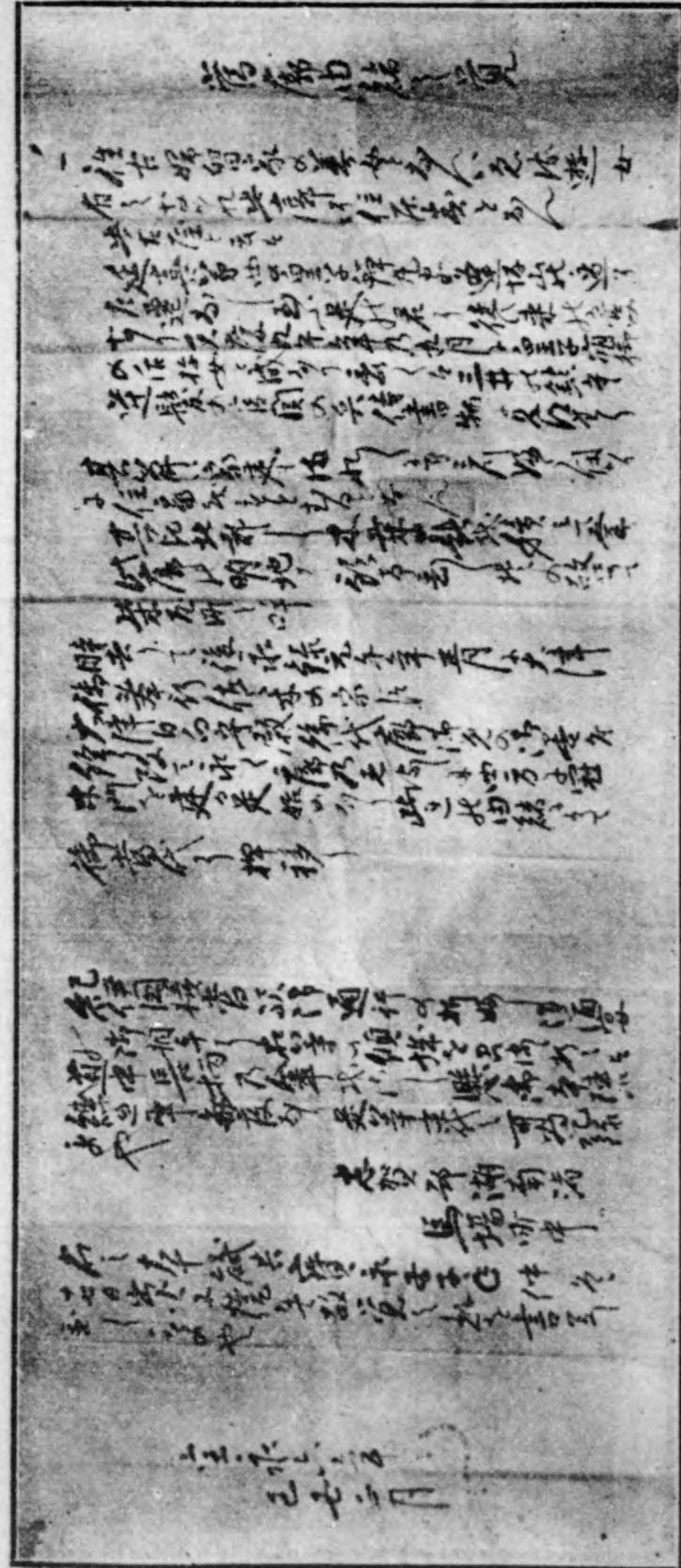
電話七八番



御料旅館紅葉館 大津市白玉町 電話二四九番



(柴屋尾緒由の町町の眞寫緒緒)



自序

見よ、山に富士山あり、水に琵琶湖あり、白鷺倒に東海の天に懸るの壯觀と、明鏡長に大八洲の中央に横はるの美景とは、相並んで我邦の飾たり、而して造化は琵琶湖風景の秀を湖南に鍾め、嵐光碧波相和して、こゝに所謂、八景を産み、此に天然絶好の大庭園を造る。大津市は實に湖南の中心に位置し、管に山媚水明の景勝に富めるのみならず、到る處、史蹟の存するあり、交通機關の發達に伴ひて觀光の士の日に益々多きを加ふるも偶然に非ず。況んや本年は御即位大典を隣接地の京都に於て御舉行あらせ給ふに於てをや、内外貴紳雅客の我が大津市に來遊するの著しく夥多なるべきは想察するに餘りあり。偶々大津書籍商組合は此機會に於て新に案内記上梓の企劃あり、之が編纂を予に囑す、予や業に操觚に従ひ、日夜多忙なりと雖も、組合の企劃は機宜に適し、一は大典の好紀念となり、一は大津市の繁榮に資するに於て頗る我が意を得たり。曷ぞ辭すべけんや、乃ち餘暇を以て此稿を起し、剞劂に付して以て世に問はしむ。幸ひ新なる杖策棹舟の伴侶として、ホツケツトに收めらるゝを得ば、予の本懐之に過ぎず。只だ恐る、文辭疎雜、遺漏亦少からざるべく、爲に湖神山靈の怒に觸るゝあらんかを。

大正四年九月湖南僑居に於て

紅雨生

凡例

一本書は天津市「札の辻」を中心とし、市内を西、南、中、東の四部に分ち、順を追ひて名所、舊蹟等來遊者の参考となるべきものを網羅せんことを期せり

一官公衙、學校、銀行、會社、團體事務所、旅館、料理屋、里程、名物、年中行事等は之を一覽表として掲ぐ

一大津市附近の名所、舊蹟亦少からざるも其重なるものゝみを撰びて參考たらしむ

一急用を辨するの利便を計り官公衙其他電話あるものは悉くその番號を付記す

編者識

目次

◎總說……………至十一頁

◎市内西部……………至三十七頁

札之辻—近松御坊—犬塚—長安寺—世喜寺—牛塚—小町塚—關清水—
 丸神社—安養寺—蓮如の名號石—赤十字病院—高觀音—觀音堂—如來
 堂—菩提樹—獨鈷水—安然の塔—尾藏寺—松田道之碑—鴿尾八幡宮—
 孝子宇野修自の碑—時雨の楓—長等新公園—慶祚阿闍梨—微妙寺—強
 齋僑居の趾—小關天滿宮—千代野の松—小關越—等正寺—新光寺—強
 齋先生の墓—紀樸亭の墓—水道貯水池—長等神社—水族館—三井寺—

正法寺—百体堂—觀月台—御幸山紀念碑—南院の總門—勸學院—琴緒
 谷—三尾の神杉—村雲橋—唐院—經藏—善法院—滋賀縣育兒院—金堂
 —燈壇—教待和尚の廟—關伽井屋—古鐘堂—鐘樓—光淨院—辨慶汁鍋
 —仁王門—圓滿院—護法善神堂千團—三尾神社—川瀨太宰夫妻の碑—
 疏水運河—通船乘場—物產陳列場—公會堂—大津衛成—長等山前陵—
 新羅善神社—義光の墓—法明院—光輝梅—合抱樟—フエノロサ氏の墓
 —近江蕪—長等漬—三保ヶ崎—醫科大學臨湖實驗所—三井寺下流船乘
 場—大練寺—柴屋町遊廓—大黒座—一六市—博秀館—朝日座—青龍寺
 —眞町遊廓

◎市內南部

.....
 至 自 三十八頁
 四十五頁
 阪關—關蟬丸神社—關の小川—蟬丸神社—蟬丸—戰役紀念碑—吃又平

◎市內中部

—大津繪—大谷驛—大谷停留場—走井餅—走井—鶴阪—藤尾—

 至 自 四十六頁
 五十一頁
 濱—大津驛—太湖汽船發着所—大津城趾—米濱—交通館—大津商業會議
 所—市會議事堂—紺屋ヶ關—汽船の起點—電車停留場—東本願寺別院
 —行在所—華階寺—藤原秀郷の館趾—月見岩—矢の根地藏—公孫樹—
 天孫神社(宮)—大津祭—滋賀縣廳—縣會議事堂—赤十字社支部—武
 德會支部—梅林

◎市內東部

.....
 至 自 五十二頁
 五十八頁
 名木櫻—松本—菊が濱—松本城趾—古梅林—蹴鞠明神舊趾—月見阪—
 平野神社—精大明神—恒世神社—甚七町遊廓—白いもじ—稻荷座—石
 場停留場—石場—石場乘船場—呼次松—高燈籠—馬場—大高寺—打出
 の濱—義仲寺—義仲の墓—芭蕉塚—芭蕉堂—木曾義仲—芭蕉翁—大津

驛—大津驛前停留場—玉造莊—

◎市外東南部

.....

自五十九頁
至七十一頁

膳所町—膳所城—本丸趾—正法寺—和田神社—石座神社—倭神社—清
德院—安昌寺—殉難志士の墓—梅仙窟—五百羅漢—茶白山—本多神社
—招魂社—粟津が原—兼平の墓—粟津停留場—石山驛—驛前停留場—
栗津乗船場—農事試験場 瀬田—勢多川—勢多橋—瀬田乗船場—唐橋
前停留場—橋姫祠—秀郷祠—建部神社—鰻と蜆—石山村—國分寺趾—
石山—石山乗船場—石山寺—本堂—仁王門—多寶塔—源氏の室—觀月
台—梵鐘—良辨僧正の杖櫻—天狗杉—岩間寺—南郷港—乗船場—宇治
川—水力電氣工事—南郷洗堰—立木觀音—鹿跳—米かし—田上の不動—
證智大師手植の櫻

◎市外西北部

.....

自七十二頁
至八十七頁

錦織郷—宇佐山—宇佐山城趾—宇佐八幡宮—山上の不動—山中越—大
伴黒主祠—與多崎—光春駒留松—志賀浦—志賀の大輪田—大津宮趾—
崇福寺趾—梵釋寺趾—唐崎—乗船場—志賀高穴穗宮趾—御所跡—日
吉神社—橋殿—山王祭—春日岡の藤—走井杉—明星杉—比叡山—紀貫
之爪髮塚—延曆寺—東塔—無動寺谷—横川—西塔—戒壇院—傳教傳來
の茶樹—西教寺—光秀一黨の墓—來迎寺—十界圖—可成の墓—坂本城
趾—堅田—浮御堂—關の濱—勾當内侍の墓—乗船場—小野神社—篁社
—道風社—小野妹子舊蹟—和邇乗船場—志賀清林墓—比良山—雄松崎
—乗船場—小松養魚場—楊梅瀧—白鬚神社

◎参

考

.....

八十八頁

近藤重藏墓—藤樹書院—饗庭野—大崎—竹生島—多景島—沖の白石—
長命寺

◎ 市内年中行事	……………	自 八十九	至 九十九	頁
◎ 銀行會社一覽	……………	自 九十一	至 九十二	頁
◎ 官公衛學校一覽	……………	自 九十三	至 九十四	頁
◎ 團體事務所一覽	……………	九十五		頁
◎ 新聞社及通信部	……………	九十六		頁
◎ 旅館料理屋一覽	……………	自 九十七	至 九十八	頁
◎ 大津名産(土産物)	……………	自 九十八	至 九十九	頁

大津名勝案内記

37-475

總 說

中村紅雨編

日本は狭小なる割合に湖沼に富む、就中琵琶湖は週廻五十九里三十二町面積四十四方里餘にして蕩々三萬六千頃の淡水を湛へたる日本第一の太湖たり。湖は漸く南して漸く狭く將に盡きんとして翠巒縹緲たる所仙鶴の兩翼を張りて翔けるに似たるの狀を爲すものを大津市街とす。湖山の風景は近江全國到處として佳ならざるはなけれど、湖南の山影水光は眞に畫中の趣致あり。古來人口に膾炙せる近江八景の勝は總て湖南に在り、而して大津市は實に其中心たり、内外觀光の人士の大津市を訪ふもの日に月に多きを加ふるは宜なりと謂ふべし。湖南は琵琶の柄の細き所、即ち湖の末の

盛りたる所なるが故に、其風景を箱庭的小景なりと説くものあり、然り、湖の廣き部分に屬せる雄大の風景とは其趣を異にするや勿論なれども、漣波寄する湖面に影を蘸せる比叡長等一帶の青螺翠黛には神寂びし社殿樓閣の陰見するあり、櫻花の白、楓葉の紅、積雪の銀、新樹の綠、四季折々の點綴高雅にして優美なるに、呼べば應へんとする對岸の物象と能く調和を保つに於て詩味津々、雅人俗客を恍然たらしむるは實に湖南の風景美なり、若しそれ時代の錆と歴史の燻しとに至りては湖南到る處に之を認め得べく遊覽の人士をして家路に就くを忘れしむるものあり。

〔近江國〕北は越前若狹、西は丹波及山城、南は伊賀並に山城、東は伊勢美濃に接し琵琶湖は國の中央に在り、四山の水悉く之に注ぎ、西南に一溝を決潰して疏通するもの、之を勢多川と云ふ、淀川宇治川の源流なり。東西約十二里南北約十九里、面積二百六十方里。琵琶湖を中心として湖南湖北、及湖西湖東に大別す。滋賀郡の南部及大津市、栗太、野洲、甲賀の三

(2)

郡を湖南と云ひ、蒲生、神崎、愛知、犬上、の四郡を湖東、阪田、東淺井伊香、三郡を湖北、高島郡及滋賀郡の中部以北を湖西と概稱す。氣候中和地味肥沃にして、農耕の業に適し工藝品の精巧なるもの亦少からず。一ヶ年の生産額は農産物三千九百九十九萬圓、工産物千六百五十萬圓、林産物二百七十三萬圓、水産物七十五萬圓、畜産物六十七萬圓、合計六千餘萬圓なり、農工産物の重なるは米、麥、菜種、大小豆、茶、繭、蠶種、生糸、縮緬、麻布、蚊帳、木綿縮、綿子ル、刺繡、天鵝絨、麻糸、綿帆布、陶器漆器、藤細工、銅器、竹根鞭、扇子扇骨、菜種油、清酒、醬油、灰石、賣藥等なりとす。

(3)

過 湖 山

柴 栗 山

湖邊沙路淨無泥、柳渚松灣任馬蹄、休怪兒童語言好、皇州近在彩雲西。

〔琵琶湖〕琵琶湖の水底最も深きところ三百十八尺、湖面の海面を抜くこ

と二百八十尺に達す、其形北部は潤く南部は次第に狭少となり琵琶に似たるを以て此名あり、又湖中にカイツムリと稱する水禽多く棲息せるにより鴉の海ともいひ、和歌には「四ツの緒の海」と詠めり。滋賀郡の堅田と野洲郡の木の濱との両突出點は湖の最も狭き場所にて其れより南を内湖、北を外湖と呼ぶ。外湖は琵琶の胴に當る部分にて水温低きが故に鱒(鮭)鮎、鱒水魚などの冷水魚族多く、琵琶の柄に當る内湖は水温高きが故に温水魚族たる鯉、鮒等の棲息に適す。琵琶湖の漁獲高は約六十萬圓なるも縣は利源開發の爲め明治四十一年度より十一年計畫として鮭、鯉の人工孵化を行ひ、又鰻兒を他地方より買入れ共に湖中に放流して其蕃殖に努めつゝあり。

(4)

湖上 欄目

梁川 星巖

楓葉蘆花灣亦灣、雨餘雲歛夕陽間、湖光一片明如鏡、照出文君黛色山。

淡海の海ゆふなみ千鳥なかなけは心もぬしに古れもほゆ

〔近江八景〕 芭蕉翁の所謂「七景は雲に隠れて三井の鐘」その鐘の音の湖上に響き亘り、餘韻縷々として雲煙の間に消ゆるの趣は眞に湖南の天然美を發揮し盡せり、實に八景は琵琶湖の絶勝を代表せりと云はん。近江八景の稱は謂ふ迄もなく支那瀟湘のそれに擬せるものなるも何人が選定せるかは諸傳一致せず。最も普通に唱へらるゝ八景命名者は近衛政家にて、明應九年八月十三日政家尙通父子佐々木高頼の招請によりて近江に遊べる時、政家が八景を詠せりと稱し、其の八景の歌頗る世に著しく成れり。されど又近衛尹信の八景の詠に始まるとの説あり、圓光寺元信こそ八景を始めて詠じたる人なれど記せる古書もあり、何れにしても非常なる年代の差あるに非ず、先づ足利時代の半ば以後より豊臣氏の頃迄の間に云ひ出でしものなるべし。只だ此に忘るべからざるは「八景」と稱する謠曲ある一事なり、其文詞古雅にして彼の關白政家の八景の詠に比すれば稍や趣を異にす。若し

(5)

これが明應以前の舊詞なりとせば、八景の思想も早く足利時代の初世に入り來れるものとせざるべからず。要するに何れを先きとは定め難きも、近江八景こそは實に我國に於ける八景名勝の根本にして各地の八景は皆これに因みて模擬せるを疑はず。所謂政治家の八景の詠は左の如し

勢多夕照 露時雨もる山遠く過來つゝ夕日のわたる勢多の長橋

石山秋月 石山やにほの海てる月影は明石も須磨も外ならぬかは

粟津晴嵐 雲はらふ嵐につれて百船も千船も波の粟津にそよる

唐崎夜雨 夜の雨に音を讓りて夕風をよそに名立るからさきの松

比良暮雪 雪はるゝ比良の高根の夕暮は花の盛に過るはるかな

堅田落雁 峯あまたみえて越路に先近き堅田になひき落る雁かね

矢橋歸帆 眞帆引きて矢橋に歸る船は今打出の濱をあとを追風

三井晚鐘 思ふ其曉ちかき始るとまつきく三井の入あひのかね

〔交通機關〕 湖南の交通機關の一斑を紹介するには之を水陸の二方面に別つて便とす。先づ陸上の機關より説かんか、東海道鐵道線路は湖南の地を

横斷又は縦斷し、大津市の東南部と西南部とに停車場を設く、東南部のを大津驛、西南部のを大谷驛と稱す。西より來るものは大谷驛に、東より來る者は大津驛に下車するを便とす。西、神戸より入るものは二時間餘、東京より入るものは十三時間内外を以て湖光眼底に映するなり、大津市の中心たる「札の辻」を起點とし東海道に沿ひて京都三條大橋に通ずる京津電車あり、起終兩點の間僅に、三十分間内外を以て達すべく、京都大津兩地間の來往に便なり。又大津電車は札の辻より約三町を隔れる湖畔、御藏町地先なる元大津停車場(今、濱大津と稱す)より風光明媚なる湖畔を縫ひ膳所の市街、粟津ヶ原を縦斷して石山に達す、起終兩點間二十五分内外を費すに過ぎず陸上に於ける湖南の遊覽には便利なり。更に水上の機關を擧げんか、大津電車の起點たる濱大津の傍に本據を構へ琵琶湖上の旅客貨物の運輸を業とせる太湖汽船會社あり、日々數隻の汽船を以て堅田を始め所謂外湖の各港に廻航する定期汽船を往復せしむる外、特に湖上の遊覽に適す

る新式の汽船を備へて貸切りの需めに應ず。之と相對して湖南に於ける各港間の運輸交通機關としては湖南汽船會社あり、大津市紺屋ヶ關に本社を置き、北は唐崎、阪本、雄琴、南は膳所、勢多、石山、南郷間に數十回の定期汽船を航廻せしむる外、對岸の山田、志那中、杉江、木の濱、吉川又堅田を起點とし木濱、杉江、支那中等へも數回の定期船を往復せしめ、尙ほ太湖社と同様遊覽汽船の貸切りをも營めり。而して水上の湖南汽船と陸上の大津電車とは共に湖南の名勝を探らんとするの好機關たり、京近曳船會社通船は京津電車と共に大津京都兩地間の交通機關とす、此通船は大津三井寺下なる第一疏水東口の起點より京都蹴上げの終點まで約一時間にて達す、屋形付の和船にて本邦第一の大仕懸なる疏水運河を下るものにて、一種の興味あるを覺ゆ。

〔大津市〕 大津市は滋賀縣の首都にして、近江の南端琵琶湖に瀕し、湖南の中心地たるは前にも述べたるが如し。市街は九十七町より成り、戸數六

千二百、人口四萬餘にして、京都市を距る約三里、東海、東山、北陸三道の咽喉を占め、水陸交通の便備はり、旅客の往來物資の集散頻繁にして市況日に殷賑を極む。中世大津關の名あり、慶長五年の役に京極高次大津城を以て東軍に應ず、徳川幕府其城を膳所に移せしも尙ほ代官を置き太倉を掌り又市政驛務を監せしむ、明治維新に際し此地に滋賀縣を置き近江一國を管帶す。古の滋賀の大津は今の滋賀村にて此地に非ず。されど日本記畧に『延曆十三年勅、近江國滋賀郡古津者、先帝舊都、今接輦下、可追昔號改稱大津』と見ゆ、古津は蓋し和名抄古市郷にして、古都廢したる後錦部古市の二郷に分れ、宮址は錦部郷即ち今の滋賀村なれど、津頭は延曆再復の勅旨に任せ依然其南に在りて今日に到れるならんか、中古には大津濱、又は打出濱と曰へり。市内名勝古蹟頗る多く、所謂時代の鏽と歴史の燻しは全市に滿つ。

○

君か代は大津の濱のまさこもて敷にさるともつきしと思ふ

大津

菊池海莊

湖城歌吹海、澤國自繁華、百里開清鏡、群鸞擁琵琶、桃花春雨驛、柳色暮煙家、好坐飛樓上、引盃看落霞。

〔長等山〕 大津市の西方に蜿蜒起伏する山脈の總稱にして一に志賀山とも曰ふ、比叡山脈より分れ南は笠置山脈に屬する逢阪山に連る。最高部は海拔千二百三十一尺にして山勢温籍、老松古杉鬱々たり。相場山、明神山、團子岩山等の稱あり、相場山の稱は、安永九年より近年市内電話開通に至るまで大津米會所の旗信號を以て大阪相場の引移しを爲したるに起因す。三井寺、高觀音等、大津市屈指の名勝舊蹟を包容し、京都に於ける東山に髣髴たるを感せしむ。

前中納言資實

藤原範綱

菅の根の長等の山の峯の松吹きくる風もよろつ代の聲

さざ波やかならの山の嶺つゞきみせはや人に花のさかりを

市内西部

札の辻を中心とし、突抜け通り以西、逢阪山以北を西部とす、

〔札之辻〕 は大津市役所の（電話^四五二番）所在地なり、京津電車が此地に停留場を設けてより交通上全く市の中心たる位置を占むるに至れり。此辻より以南を八丁通^{三條街}、北を突抜け通^{湖岸に}と稱し、又東を京町通、西を石川町通と呼ぶ。

○ からき名を言立てらるゝ札の辻

宗因

市役所の西南數十歩、南町に

〔近松御坊〕 あり、文明三年^{西曆一四七一年}三月蓮如上人の開基に係り近松山と號し顯証寺と稱す。寶正六年正月山門の衆徒蜂起して洛東大谷の本願寺を焼

く、後日華門を本願寺に賜ひて坊を建てしむ、山徒之を嫉みて又火を放つ、

蓮如之を恐れ祖師親鸞の像を負ひて園城寺(三井寺)に逃れ來る、園城寺の衆徒之を助け、近松寺の領を分與して一寺を建てしむ、時に文明三年三月なり。同十三年十一月山城國山科に一寺を建て、親鸞の木像を移し、蓮如自筆の畫像を此に安置して第二子蓮淳に付す、後、河内國久寶寺村の顯證寺より之を主持せり、今は本派本願寺の別院なり。院の西に犬塚あり、蓮如の危難を救へる犬を埋葬せる所なりと傳ふ。塚上の樺は蓮如の植へたるものにて周圍二十一尺高さ十五間、江州名木の一に數へらる。犬塚の前を南進する約二丁

〔長安寺〕に達す、清水町の西の山手にて古の世喜寺せきでらの一寺趾なり。本堂は峯腰に懸り老樹鬱蒼として閑寂、眺望亦佳絶、殊に境内には清泉滾々として酌めども盡きず、寺内水道の水源となり、水聲琮琤玉を鳴すが如く心氣頓に爽なるを覺ゆ。近時附近の藪を拓き、堂宇を修築し、長等公園の域内として櫻楓を植栽し、風致大に加はる。世喜寺は拾芥抄に日本三大佛の

一と曰ひ今猶ほ謠曲關寺小町鸚鵡小町等に傳唱せらる、往古は大寺にして今の清水町、上下關寺町など其寺域に屬し、堂塔伽藍壯麗を極めしなり、長安寺境内に牛塚あり迦葉佛應化の靈牛を埋めたる處

和泉式部

○ き、しより牛に心をかけながらまた、そこひねあふさかのせき

長安寺の南方蟬丸神社の後方の山中に小野小町の塚あり、又程遠からの下片原町念佛寺境内に小町の墓といふがあれど信偽詳ならず。八町通に出れば清水町に

〔關清水蟬丸神社〕札の辻つじあり、市内に蟬丸の名を冠する神社三社ありて共に蟬丸を合祀す、當社は下の蟬丸と稱す。祭神は豊玉姬命なり『嵯峨天皇の御宇弘仁十三年西曆八二二年三月近江守小野朝臣岑守、逢阪山道饗祭の舊趾に關所鎮護の爲め道友大神を齋祀せられ、阪神社と稱す、是れ當社御鎮座の起元なり、文徳天皇天安元年逢阪の關を置き給ひしとき、關戸守護の神

と崇祀せられ關明神社と稱す……朱雀天皇天慶九年蟬丸の靈を當社に合祀す、社域に關の清水あるを以て俗に關清水大明神蟬丸宮と稱す』とは蟬丸社傳に記する所。蟬丸宮は音曲諸藝道の祖神なりとの故を以て、當社は古來日本全國中、説教讚語勸化師者其他諸種の藝術の免狀を出したり（市内南部蟬丸の項參看）。境内に古色蒼然たる一個の燈籠あり、古來史家の重きを爲す所、口碑の傳ふる所によれば時雨燈籠しぐれとうろうと稱し、或は蟬丸形とも曰ふ、世喜寺せきでら建立と同時に建造にや、春日形と大差なければ、蟬丸形とて別形を造り出すものあるに至り、以來石工の摸表として之に倣ひしなりといふ、現今滋賀縣物産陣列場内にある燈籠は即ち此形を模したるなり。

紀貫之

(14)

あふ坂の關の清水に影見えて今や引くらんもち月のこま
〔安養寺〕 程遠からぬ上關寺町に在り。智證大師の開基にて、寺門派に屬せしも、明治維新の際京都本願寺に屬せり。境内觀音堂に安置の本尊觀世

音は昔蟬丸逢阪に居る時、琵琶を立聞せりとの傳説ありて世に立聞の觀音と稱す。又木造阿彌陀如來の坐像は國寶なり、境内の蓮如の名號石は上人自ら名號を記せる石なり。これより踵を旋し、八町通を引返し犬塚の前を左折すれば、右方に宏壯なる建物あり、これぞ

〔赤十字病院〕 電話一八番なる。元は市内東部の松本に在りしが、赤十字社滋賀支部の事業の發展に伴ひ、此地に完全なる建築を爲し明治四十五年に移轉せるなり。板塀に添ひて約一町を進めばやがて

〔高觀音〕 札の辻しのつじの山下に達す。石階數十級を登れば即ち長等山の山腹にして、觀音堂あり。園城寺五別所の一にて、延喜年中僧安然の開基に係り、安然教待と相會せる所に松樹ある。因みて近松寺と云ふ、往古は伽藍壯大にして寺域も亦廣濶なりき。觀音堂の北に隣りて俗に善光寺と稱する

(15)

如來堂あり、本尊は陽成天皇の安然に賜へる閻浮檀金の靈像にして信州の善光寺と東西正に相對すといふ。堂前の菩提樹は近江名木の一にて、周圍二十尺高さ十間樹齡實に一千年と註せられ、延喜の昔安然唐より歸朝の際、携へ歸りて此所に植へたるもの斯く成長したりと傳ふ。土地高燥にして眺望頗る壯豁、試に眸を放てば、煙波漂渺たる太湖は明鏡の如く、白帆四五鯉魚の風を孕んで走り、瀛船二三淡煙を吐いて飛ぶ、右方には近江富士、田上の連山呼べば應へんとし、左方には比良比叡の靈峰相揖して立ち、唐崎、堅田、長命寺、沖の島など指顧の間に在り、眞箇天然絶妙の畫圖と云はん、しかも滿山の櫻花と楓葉とは湖南の春秋を飾る、大津近傍登臨の快は此地を以て第一とすべし。近時市は此邊一帶を公園として來遊者を迎ふべく諸般の設備を加へつゝあり。境内に獨鈷水あり、往古此地に水なかりしかば、安然獨鈷を以て岩石を打つ、忽ち清泉滾々たり、故に此名ありと傳ふ、安然の塔は南の山上に在り、安然和尚の爪髪を埋めたる所、石塔五

層高さ一丈三尺あり。安然西曆九一五年は智證大師の高弟にして高德の聞えあり、延喜十五年西曆九一五年二月十九日、出羽國置賜郡澤山の岩窟にて入寂す。

雲の峰高觀音を離れたり

龜友

〔尾藏寺〕は菩提樹下を横切りて北へ十數歩石階を下りたる處に在り、正曆三年西曆九一二年僧慶祚の開基にて園城寺五別所の一なり、本尊十一面觀音立像は、志賀寺の古佛にて今は國寶たり、昔時男女群をなして之に詣で、笠相軋りて脱することあり、故に笠脱かさをぬぎの觀音と云ふ。松田道之碑は本堂の左方芝生の一角に在り、松田氏は滋賀縣の令尹として功績あり。本堂の右手に鶴尾八幡宮あり、康平六年西曆一〇六三年源賴義の創立にして、山城八幡宮を勸請す。賴義義家之を崇敬し、祭禮には家人をして流鏑馬を爲さしむ。足利尊氏北國圍陣の時、八幡馬場の前を過ぐ、時に一鶴來りて簾の上に止る、尊氏喜び其尾を抜きて之を社に納め、北國より歸りて社を建立し鶴尾八幡

宮と稱す。神体は老翁の坐像にて左手に經卷、右手に唐團扇を持つ、丈一尺の黄金像にて頼義の納むる所と傳ふ、又別に立像あり、鎧を着し弓矢を持つ、尊氏の納むる所なりと稱す。東面の崖下に孝子宇野修自の碑あり、此邊老櫻古楓多きが中にも、高觀音より下る石階の傍に時雨の楓と云ふがあり、周圍十尺高さ十間樹齡三百年と註せられ、近江名木の一なり、特に口碑の傳ふべきものなきも、秋冬の交錦繡を飾りて美觀を極め曳杖の客多し。觀音堂の右側を後方に進めば明治三十三年東宮殿下御慶事紀念として市の施設せる

〔長等新公園〕 なり園内老樹鬱然たる處慶祚阿闍梨あぢかりの塚あるを以て阿闍梨谷と稱す、慶祚は三井灌頂の中興にして寛仁三年西曆一〇一九年十二月寂す。此邊一帶に雜木雜草繁茂して物凄かりしが、近時市費を投じて開拓し、或は櫻楓を植へ或は泉池を設くる等、遊園地としての設備を爲したれば面目頓に一新し、春の晨、夏の夕、老幼此に集まりて嬉戲す。西方の丘上を辿る數

十歩にして

〔微妙寺〕 に達す、園城寺五別所の一にて正曆五年西曆九四四年僧慶祚の開基、本尊の觀世音及西北に在る藥師は志賀寺の古佛なりと稱し、觀世音は美術参考品たる鑑査狀の下付を受く。堂前に強齋儒居の趾あり（若林強齋墓の項參看）境内櫻樹多く眺望亦頗る佳なり。石階數百級を降れば山麓にして左方に專光坊

〔小關天滿宮〕 あり、專光坊は微妙寺五坊の一にて本尊は北向きの不動明王なり、小關天滿宮は慶長年間專光坊の住職高宥の建立にて、安政四年西曆一八五七年時の住職圓定の再建せるは即ち現在の社なり境内繪馬堂の東に亭々たる老松は千代野の松と稱す、今より六十餘年前、太宰府の松の實生を大津の椿杖齋帆道が神木として奉納せるものにて、專光坊に保存せる十八公の記に其由來を記せり。こゝを出で、百々川を渡れば

〔小關越〕 なり、長等山を横斷し藤尾ふじの尾を経て三條街道に出づ。

山路来て何やらゆかしすみれ草
鶯はみだれ聲なり小關越

芭蕉
曉 蓬

瓜先上りの坂路を進むこと約半町、左方に等正寺あり、元は微妙寺の一坊なりしが文明元年二月比叡山の衆徒東本願寺を焼き拂ひし時法主蓮如難を避けて此坊にあり、同三年の初夏此處を立ち出で越前加賀に向ひたりといふ、斯る因縁を以て文化年中轉宗して東本願寺末となれり、蓮如上人の舊蹟と云ふも是に因る。上人五十七歳自作の肖像と稱する木像と、堅田浦の漁夫源兵衛忠死の首と云ふがあり。之と相對するを新光寺と云ふ、眞盛派にて西教寺末なり、本尊は藤原秀郷の守本尊にして明治二十四年鑑査狀を下付せらる。新光寺墓地には

〔強齋先生の墓〕

札の辻あり六町

あり、先生は犬上郡平田村の人、名は進居通稱は新七、強齋は其號なり、延寶七年七月八日平安に生る、後大津に移り微妙

寺の域内に僑居す(微妙寺の項參看)鴻儒淺見綱齋の門に入り苦學多年、遂に山本俊齋、西依成齋と共に淺見三傑の名を得たり、年四十に垂んとして京都に移り、師説を祖述するを以て専務とせり、享保十七年西曆一七三二年壬子正月二十日歿す享年五十四、近時大津市教育會は先生の事蹟發揚に努め、又毎年忌辰に際しては墓前祭を行ふ。又同墓地には紀樸亭の墓あり。樸亭名は時敏、字は子惠、樸亭と號す、晩年別に九老と號せり、京都の人にて書を與謝蕪村に學び、研鑽砥礪終に其妙を極む、天明の災あるに當り難を避けて大津に來り湖南の風色を愛し、遂に留りて此の地に住せり、文化七年西曆一八〇年七月七日享年七十七を以て歿す。

黄昏の重き草履や櫻人

梅亭

元來し道を引返して新光寺の下に至れば左方に

〔水道貯水池〕あり、大津市西部十九ヶ町の飲料水道の貯水池なり、此水道は京都第一疏水工事の爲めに水脈斷絶し、飲料水の枯渴を來したれば、

京都市が補償の爲に施工し、完成後大津市に引渡せるものにて水揚唧筒に要する十五馬力の電力は京都市より大津市へ永久無償にて送電す。此處を過ぎ小關天満宮の鳥居前を左折して進むこと數十歩にして

〔縣社長等神社〕に達す。長等神社は中古新宮と呼べり、祭神は素盞鳴尊すさのむね大山咋大神、市杵島姫命、八幡大神、三尾大神の五坐あり、天智天皇大津宮へ遷都の際帝都の鎮護として志賀の長等山岩坐谷今の滋賀郡滋賀村の地に崇祀し給ひ貞觀二年西曆八六〇年僧圓珍日吉神と奉祀して山王社と稱し寺門(三井寺)の鎮守とす。天喜二年四月西曆一〇五六年今の地に遷せり。後延元元年西曆一三三六年兵燹に罹り興國元年西曆一三四〇年足利尊氏之を再建す。丹碧の樓門は鎌倉季世の様式に従ひて明治三十八年に建築する所。祭神の緣故に依り長等山の櫻木を以て箸を造り授與す、其箸紙の和歌に曰く

朝夕に神のめぐみをあふぎつゝいのちながらの箸をこうとれ

境内には以仁王に由緒ありてふ神樂の瀧の遺跡あり。此地の北に接して水

族館あり、琵琶湖産の魚類を集めて觀覽せしむ、株式會社の一營にして市費の補助を受く、創後日尙ほ淺く設備未だ完からざるも本邦唯一の淡水々族館なれば入場者多し。水族館の西を

〔三井寺〕札の辻よとす。リ六町天台宗寺門派の本山にして園城寺おんじやうと稱す、弘文天皇の皇子與多王の創建にして智證大師之を中興す。三井寺は俗稱にして寺の西に天智天武持統三帝の降誕に際し浴湯に供したる井泉あるを以て御井みゐと稱したるを後世三井に書き改むと云ふも、コは俗説にて、三は敬愛の辭にて三密灌頂關伽の井の謂れなりとの説を正しとせん。寺域七萬五千餘坪、老檜古杉蒼蔚として幽靜閑雅なり、往古は八百五十九坊ありしが中世數次兵燹に遭ひ、全山の堂塔一時烏有に歸せしが、家康、秀忠に依り再營せられ稍や舊觀に復するを得たり、

筒井喬松、金堂白櫻、新羅夕蟬、唐院夜雨、靈窟古鐘、龜塚曉霜、琴谷冷螢、護法丹楓、龍池寒月、正法眺望

を三井の十景とす。長等神社の北なる表坂の石階を登れば正法寺電話四一なり、元如意輪堂と稱し南峯に在りしを、文明十三年西曆一四八三年此地に移せり。俗に三井寺觀音と呼び、西國十四番の札所なり、

いでいるや波間の月も三井寺の鐘のひびきに明るみづらみ

六尊如意輪觀音は智證大師の作にて俗に順禮觀音と稱す。本堂の北に百躰堂あり、西國三十三所秩父三十四所阪東三十三所、合せて百体の觀世音を安置す。寶曆三年西曆一七五三年講中施主となりて建立す。境内東北の隅に觀月臺あり、大津市街を瞰下し湖山の眺望に勝れたるは、夫の高觀音と伯仲の間に在り、三井十景に所謂「正法眺望」は即ち是れ。茶所には名物「辨慶力餅」を鬻ぐ、茶所の前を進みて小阜に登れば御幸山紀念碑屹然たり。明治十年の役に從軍せる大津分營の將卒にして戰歿するもの多し、因て此碑を建て、其幽魂を慰す、碑の臺は歐洲の砲臺に擬し碑は西洋の紀念柱を摸す、紀念碑の三大文字は時の陸軍中將三好重臣の書なり、傍に「玉坐の跡」あり、

明治十一年明治天皇北陸巡幸の砌登臨あらせ給ひし處にて、これより御幸山と名く。裏坂を下り行けば三尾神社の背後に出づ、同社の北にある門を南院の總門とす、門を背にして爪先上りの南院道を一直線に登ること一町餘にして路は丁字形を爲す、其角に勸學院あり、昔は一山の學室なりき、客殿は特別保護建造物たり。門前を過ぎて進むこと約二町にして琴緒谷に出づ、明治九年まで三尾神社の在りし所にて、昔天人常に此所に降りて絲竹を奏し舞遊して神を慰めしに因り此名ありと傳ふ。三尾影向石尙は存し三尾の神杉亦神々として茂れり、神杉は近江名木の一にて周圍十七尺高さ十五間樹齡六百年と聞え、衆人の崇敬淺からず。勸學院へ引返し左折して南院より金堂に通ずる大路を進むこと十數歩にして村雲橋に達す、之を渡りて更に進めば左方に唐院あり、廓内の長日護摩堂は後水尾天皇の造立に係り、三尾の塔婆は元大和の比蘇寺に在りしを、秀吉伏見の城に移し後徳川氏園城寺に寄附せるものにて明治三十九年特別保護建造物と定めらる

唐院の北に經藏あり、足利尊氏の建立にて其後毛利輝元再造すといふ、文祿後の戦利一切經を納む、是亦特別保護建造物たり。經藏の北なる石階を登る數丁にして善法院あり往古以仁王の源賴政と平氏討伐の軍議を凝し給ひし處、庭前の腰掛松有名なりしも今は枯れたり、前面老樹陰森苔石蒼古林泉奇巧を弄せざるも畫中の趣を爲す、院は今滋賀縣育兒院に充用す、金堂は當山の本堂にて豊臣秀頼の片桐且元毛利輝元等に命じて築かしめたるものに係り特別保護建造物たり、本尊の彌勒佛は丈三寸二分、南岳大師の作にて、元と陳の南岳禪室の本尊なりしが、用明天皇の朝我國に傳はり、至尊の御護持佛として累朝崇重し給ひしを、天武天皇の詔に依り此に安置す。堂の前に石造の燈壇あり、天智天皇親ら左の無名指を斬りて其下に納め給へる所なりと傳ふ。堂の東北に教待和尚の廟あり智證大師作の木像を安んず。堂の西に關御井屋あり、三井水之なり、天智天武持統三帝降誕の時此水を用ふ、故に三井(元は御井)と稱すと、井上に屋あり、四方に狩野元信

飛龍を畫く、又龍の彫刻は左甚五郎の作にて有名なり、コは豊臣北政所の再建にして特別保護建造物たり。側なる熊野社の上に古鐘堂あり、破鐘堂とも云ひ、辨慶の引摺り鐘と稱するものを掲ぐ、鐘の高さ五尺五寸厚さ三寸五分口徑四尺一寸龍頭一尺一寸五分なり、由來詳かならず、俗に俵藤太秀郷の龍宮城より齎せしものなりと傳ふ。金堂の左方前面に鐘樓あり、梵鐘は慶長七年西曆一六〇二年四月照高院門跡道澄法親王の寄附に係る、殷々水に響きて續又斷、近きが如く遠きが如く、餘音嬾々として百八煩惱を消滅せしむるに足る所謂三井の晚鐘は此鐘樓より送らるゝなり。金堂の東に在るを光淨院と云ふ、寢殿造にて結構優麗是亦特別保護建造物たり。中院の大路を下れば左方に釋迦堂あり、辨慶の汁鍋と稱する大鍋を置く、堂は往昔清凉殿の材を賜はりて建つる所の食堂にて元和年中に修理せり。今特別保護建造物たり、鍋は往古山内に大衆の僧徒ありし時に使用せしものならむ。釋迦堂の下手なるは仁王門なり、左右に運慶作の金剛像を安んず、元滋賀

縣甲賀郡西寺に在りしを慶長年中家康此に移せり。明治三十三年特別保護建造物となる、門前を左折すれば圓滿院電話二三八番に達す、三井寺山内の北端なり、院は村上天皇の皇子致平親王(悟圓僧正)の創建にして結構壯嚴を極む、元と平等院と稱し又櫻井室と云へり。代々の法親王此に住せらる、今長吏の住房たり、今の宸殿は明正天皇より古御殿を賜はりて正保四年西曆一六四七年に工事落成したるものにて特別保護建造物なり、明治天皇御駐輦の光榮を有し又明治四十三年の秋、今上陛下尙ほ東宮に在せし時、本殿を御假泊所に充て數日間鶴駕を駐め給へり。院内多くの國寶を藏す。鐘を旋らし、仁王門前を南に直進すること十數歩、護法善神堂(俗稱千團子)あり、鬼子母神を祭る、智證大師の草創にて足利尊氏之を中興す、今の堂は慶長の再建に係り本尊は國寶なり、毎年五月十六日十七日を縁日とし植木苗類の市を爲す、俗に千團子祭と稱し群衆雜沓を極む。

慈 園

山川のひとつながれの三井の水いかでか未のわかれ行らん

遊 三井寺

服 蘇 門

園城古刹枕清流、遊客閑探處々幽、玉鬘仍留三井潔、華鐘曾自九淵浮、威靈永鎮新羅廟、弘誓高標薩陞櫻、更見止靜明境、孤輪影落大湖秋。

三井 晚 鐘

林 長 老

湖面朦朧畫不成、昏鯨高響出園城、霞間好是客船月、十倍楓橋半夜聲。

秋さむし藤太がかぶらひ々々時

蕪 村

からびたる三井の仁王や冬木立

其 角

千團子の門を出で、右に進むこと半町にして三井寺南院總門の前に出づ、其南は

〔縣社三尾神社〕 なり、伊弉諾尊いさなのみことを祭る、貞觀元年西曆八五九年智證大師の創立にて、元三井寺山内琴緒谷に鎮坐ありしを、明治九年今の地に遷す、寺門傳記補録に曰く、三尾明神は昔伊弉諾尊跡を長等の山南に垂れ地主神たり常に赤白黒の三帯を着け尾を曳くに似たり、一は赤尾の本神なり、二は白

尾、三は黒尾、故に三尾明神と云ふ。境内に川瀬太宰夫妻の碑あり、太宰は膳所藩の家老戸田五左衛門資能の第五子、幕末勤王の士にして慶應二年六月七日斬に處せらる、絶命詞に曰く

吾今死於國、素志終不伸、已矣縱容去、九泉有知人。

太宰の妻幸女は彦根藩臣飯島三太夫の女なり、太宰幕吏の爲めに雲母坂に捕はるゝの後三日、新撰組の佐野某、隊士數十人を率ゐて尾花川の邸を圍む、幸女先づ時事に關して太宰の往復せし書翰を火中に投じ、七を取りて自ら咽喉を突き、寢食を廢すること八日にして遂に逝く、時は慶應元年五月廿五日なり、明治二十年九月有志者相謀りて此碑を建つ、「雙烈聯芳」の篆額は三條實美公の筆、碑文は時の滋賀縣知事中井弘の撰なり、明治二十四年十二月十七日、畏くも太宰に従四位幸女に正五位を贈らせ給ふ。境内の南に接して

〔疏水運河〕 あり、大津市三保ヶ崎の湖岸より三井寺山下を穿ち京都市蹴

上に通ずる本邦最大の運河なり、第一は明治十八年八月工事に着手し、同二十三年三月竣工す、延長六千七百七間餘、三井寺山下を貫通する隧道の長さ一千三百四十間なり、京近曳船會社の通船により荷客の運輸を爲す、第二疏水は暗渠式にて水力補足の爲め第一疏水の北に沿ひ數年前之を開鑿す。疏水通船の乗場は三尾神社前なる鹿鬮橋畔に在り、三尾神社の北に見ゆる宏壯の建物は

〔滋賀縣物産陳列場〕

札の辻より八町

なり、明治三十六年の建築にて敷地面積四千

六百二坪餘の内、本館及事務所、俱樂部、物置等の建物三百十九坪餘を有し、餘は優雅なる庭園となし梅櫻楓其他種々の草花を植込み四季の眺め艶麗を極む、本館の樓上は湖山の眺望頗る佳なり、構内の東北に當り、南、長等山に對して建てられたる一構を

〔滋賀縣公會堂〕 とす。大正二年十月に竣功す、本館百八十坪附屬建物四十四坪七合にて、樓上の大廣間は優に二千人を容るゝに足り、南西は長等

山に對し東北は琵琶湖に面し風景絶佳なり。縣は貸與規則を設け公共事業の會合には無料、其他は相當の料金を徴して使用せしむ。正門を出で、左に進むこと約四町

〔大津衛戍〕札の辻よに至る第十六師團歩兵第九聯隊の兵營なり、同隊は明治七年十二月十八日軍旗を授與せられ、同十年西南役を初とし、日清、日露の戦役に参加す、又後備歩兵第九聯隊は明治三十七年軍旗を拜受し日露の役に参加せり。

〔長等山前陵〕兵營の北西に接す、大津宮に都し給ひし第三十九代弘文天皇の御陵なり、明治九年に發見し、翌十年六月を以て御陵と確定す、此地を龜岡と稱し又住吉の森とも呼びき

資 業

〔新羅善神堂〕萬代に千代をかされて見ゆるかな龜の丘なる杉のみざりには御陵の北に接する新羅しんらの森に在り。三井寺五社鎮守の一

にて貞親元年西曆八五九年智證大師の創立なり、神像は大師の作にて素盞鳴尊を祀れるにや、尊の嘗て新羅しんらに渡り給へることは古史に見ゆ、社殿は特別保護建造物なり、伊豫守源賴義いたく明神を尊崇し、三男義光を當社の氏人と爲し新羅三郎と號せしむ、義光亦父の教戒に任せ、子息を門徒に加入せしめ、自身は出家入道し、三井寺の北院に一堂を建立して金光院と名け、其寺に於て往生を遂ぐと云ふ。西南の丘上に義光の墓あり、明治十二年五月裔孫佐竹義堯小笠原長守墓畔に新羅公碑を建て、併せて義光の裔なる十八家の姓名を刻し、垣柵を設け、櫻樹を植へて大に風致を加へ、歳時更に來りて祭典を行ふ。新羅の森の北を上ること約三町の山上に

〔法明院〕札の辻よあり、三井寺の別院にて圓戒道場なり、延喜四年西曆九〇四年義瑞和尚の創立に係る。土地高燥にして風光に富む、唐土峰、吼風鐘(今は)、輝梅、錦繡楓、時雨亭、臥龍松(今は)、標月藏、澄心池、合抱樟、點翠祠は越溪沙門敬長の撰める法明院の十勝なり、光輝梅は靈元法皇の義

瑞和尚に賜ふ所、合抱樟は周圍十五尺樹齡六百年、顯道律師之を愛し老子の語を取つて命名す、共に近江名木に數へらる、庭後の墓地にフエノロサ氏の墓あり、瑩域約三坪、青苔滑なるところ和泉石の五輪の塔は北に向つて建てらる、フ氏は明治の日本畫の一大恩人にして又佛教を信すること深く、本院の住職たりし櫻井敬徳師に戒を受け、本院に深き縁故を有するは人の知る所、明治四十一年佛國に死するや、遺言して遙に遺骨を此に送りて葬る、斯くて生前、日本畫の恩人は、死後、湖畔畫景裡の歸化人とはなれり。法明院は此偉大なる歸化人に依り、湖畔の新靈地たるを得たり。此處を辭して大津衛戍前の練兵場を横ざれば

(34)

〔三保ヶ崎〕札の辻よに至る、湖上に疏水運河の突堤あり、東の突堤の北端には湖南漁船會社の三井寺下漁船乗場あり、唐崎、坂本、瀬田、石山、南郷等の遊覽者は此所より乗船するを便とす。

〔臨湖實験所〕 疏水築地にあり大正三年 五月京都醫科大學の創設にして琵琶湖の魚族藻類に關し學理的の研究を爲しつゝ、あり本邦唯一の淡水水族研究所たるを以て學生の參觀頗る多し、疏水運河の南堤を三井寺へ向つて進むこと約二町、鹿關町通を左折し、更に約一町にして神出車路の〔大練寺〕に至る、泉涌山と號す、昔は三井寺の境内なりしと云ふ、天智天皇の御宇、御衣を當寺の涌水にて練られしより其名起る、練貫水と稱するもの今も寺内に在り、天智天皇の御木像を藏す。境内墓地に慶長中伏見を死守せし内藤家長及弟元長、川崎派の儒者にて前田雲濱と深交ありし上原立齋等の墓あり。車路を南進し長等神社前を下りて北國町に出で更に右折すれば半町にして

(35)

〔柴屋町遊廓〕 札の辻リ五町よりなり。享祿年中四曆一五佐々木氏の族青地市右衛門戦功あり、大津近邑を領し、馬場を設け櫻桃を栽へて騎射を爲す、當時鍵屋又右衛門と云へるもの請ふて此地に茶亭を設け遊女を置きて遊廓となせり慶長以後徳川氏の許可を得て傾城町となし馬場町と名くと、又京極氏大津城主たりし時、轡屋の娘に長柄の朱傘を與へ茶立ちやだてと稱へて八町本陣に宿泊せし大名に侍せしめたるに始まり、元祿年間本曲輪ほんくるわ（日木四曲輪の一、四曲輪とは吉原、新町、島原、柴屋町）となるとの説あり。今は上馬場下馬場の二町に分たる、近傍に大黒座電話四二〇番あり、市内第一の劇場なり、大黒座前より東數町の間は商家檐を列ね市内繁華の中心たり、殊に菱屋町丸屋町の一六市は大津名物の一なり、菱屋町に寄席博秀館あり、階下は勸商場にて各種の物品を即賣す、丸屋町には劇場朝日座あり、之と斜に相對して勸商場あり。大黒座より約一町、小川町に

〔青龍寺〕

あり、曹洞宗大本山総持寺の直末にして同宗屈指の禪刹なり、

開山は竺山得仙禪師にて應永十九年四曆一四の創立に係る、本尊は華嚴の釋迦とて蓮花一枝を持てる立像なり、本宗第一の寶物高祖彈虎杖の畫其他多くの寶物を藏す。西南隅に赤穂の義士大高源吾？の隠棲せし草庵ありしが明治十六年これを毀ち今は市民の住家となれり。青龍寺の後方は

〔眞町遊廓〕

札の辻リ三町

よりなり、明治の初年に設置し、滋賀縣廳の新築に際し四宮遊廓を同所へ移轉合併せり、

市内南部

京町通以南にして、札の辻より東、寺町通より西の部分及逢阪山以西を南部とす、札の辻の南約一町、八町通の上榮町に

〔行在所跡〕あり、元八町本陣の在りし所にて今は市立南尋常小學校となる。樓上御眞影奉置室の晝天床は、明治天皇の行在所に充てさせられたる舊本陣の遺物なり。本校の横、金塚町の

〔榮泉寺〕は往昔天臺宗に屬し本昌寺と稱する名刹にして此寺のみ瓦葺なりしにより俗に瓦寺と云ふ。元和四年西曆一六八八年眞宗に轉じ榮泉寺と改稱す。八町通に引返し南に進む數町、左の阪路を登れば

〔幻案寺〕に達す、鎮西派にて京都智恩院末なり、永祿十年西曆一五六七年僧西念の開基、圓光大師作形見の御影、同遺骨舍利等現存す。幻案寺の裏手に若宮八幡宮あり境内に近江名木誌に掲げられたる檜の老木あり

鐵道線路の南は

〔向山寺〕にして山麓には梅林あり。高山寺は今荒廢して大津市の墓地となれり、林中無緣塔の傍に思塚あり、記録の存するものなきも左の碑銘と和歌とを見れば尋常一般の戀ならざりしを知るべし。

婦榮者予思之所存相深縹繆之情至矣入室末期文化癸酉七月七日忽薨亡矣吁何思之厚而緣之薄也吁何天上佳期之夕舍我而仙也每思一至仰號於彼蒼耳追思不已是作思塚

君がもとにかくてきしなは露の身の昔の下にも何か思はん
露の身もともに消ぬとおもふうよなれにし人の長き別れに

女 政 永

思塚の南隣に扇塚あり、碑面に鐫られたる「扇塚」の二字は中山亞相愛親卿の筆なり、昔京師鹽小路に舞姫貞代と云ふがあり、中山亞相の寵を受け花晨月夕昇殿して舞をかなでしに、寛政七年西曆一七九五年六月九日十七歳を一期として薨の花は散り失せぬ、依つて生前愛用せし舞扇と傳書とを此地に埋めて塚を築き、中山亞相に染筆を請ひ、加茂祐爲すけたかの

ありし世にこのめる舞の扇をやしるしの塚の名に残すらむ

の和歌と共に之を刻むと傳ふ。松風常に颯々として長に少女の靈魂を弔ふの感あり。向山寺の東方、則ち市の南の山麓を

〔靈山〕 又は圓山と云ふ、京都の靈山（ちうざん）に擬せるなり、眺望雄豁にて登臨に値す、往昔時宗の僧國阿、此地に一寺を建つ、正福寺と號す、中世旗亭を設け遊人醉客此に至れば精進料理を供せり、後、湖南第一樓と稱せしも明治の初年廢絶に歸す。

〔逢阪山〕 札の辻は一に手向山ともいひ、合坂、相阪、なども書し、古來有名なり、笠置山脉に屬し北は長等山に連る。東海道鐵道及京津電車の隧道は山下を貫通す。往昔山上に官道あり、阪を上下して通行せりと云ふ。後今の街道を拓けりと傳ふるも時代を詳にせず、上片原町下片原町は此山に屬す。逢阪の名は一千七百餘年前、武内宿禰（おしくま）が忍熊王と交戦の日、ゆくりなく此阪にて出逢ひ大に敵軍を破りたるに始まると日本書紀に見ゆ。

後 京極攝政

逢阪の山越はて、眺むればかすみに續く滋賀の浦波

逢坂の かたまる 頃や初櫻

千那

山上に茶屋ヶ谷と稱する房あり、元逢阪の關の傍にありたる茶亭の跡なりと云ふ、此口碑に據れば逢阪關は舊官道なる逢阪山の絶頂にありたるならんも今は其跡詳ならず、桓武天皇都を平安城に定め此地に關を置き給ふ、伊勢の鈴鹿、美濃の不破、及此逢阪を日本の三關と云ふ、天下事ある時は必ず此地を固む、延暦十四年に廢せられてより茲に一千百餘年なり。

○ 蟬丸

これやこの行も歸るも別れては知るも知らぬも逢阪の關

逢阪山の阪の中程、上片原町に關蟬丸神社あり、中の蟬丸と云ふ、猿田彦命と蟬丸とを祭る、弘仁十三年（西暦八二二年）の鎮座也、往昔は山上に在りて手向神と稱す、旅行の安全を守護する神なり。文政九年平松家より和琴一曲を奉納す、逢阪山の谷間より出づるを和歌には關の小川と詠む、關田川、吾

妻川、常盤川、中寺川とも云ふ、大津市の中央部を南より北に貫流し、其末流は境川となりて琵琶湖に注ぐ、往古は水深かりしも後土砂流出して今は川底高く水淺し

○ 音羽山紅葉ちるらし會阪の關の小川に錦おりしく

後 頼

逢阪山の南端、大谷町なる蟬丸神社は上の蟬丸と稱す、關清水蟬丸神社の分靈を祀る、境域雅致に富み旅人の來り憩ふ者多し。そも上中下の三社に祀られたる蟬丸は其姓氏詳ならず、宇多天皇の皇子式部卿敦實親王の雜色に、管絃を嗜み、琵琶を善し、自ら流泉啄木の曲を愛して敢てこれを人に傳へず、世を遁れ、逢阪の關に菴を結びて山居す。常に弄する琵琶を無名と號す、蟬丸頭は童子の如く体は僧に似たり、時の人道士と云ひ又仙と呼ぶ。延喜天皇の皇孫三位源博雅、かの流泉啄木の秘曲を習はんとて毎夕菴側に往き窺ひ聽くこと三年、然も蟬丸未だ嘗て彈することなし、偶々中秋月陰

(42)

り風凄き夜、例に依り往て之を伺ふや、蟬丸忽ち盤涉調を彈す、博雅其宿望を達するを得たるを喜び、心中悶癢只管其秘曲に及ばんことを冀ふ、既にして蟬丸彈じ罷め、肅然として情を遣り嘯咏し且歎すらく、嗚呼其人なき哉、此寂夜に當り誰か當に靜夜思を共にすべき者ぞと、此に於て博雅聲に應じて出で、名を通じ且具に向來の事を語る、蟬丸其心の切なるを感じ悉く秘曲を授くといふ。謠曲には延喜帝の皇子とし、又盲人に作れるも其證詳ならず。境内の二拾七八年戰役紀念碑は同町有志者の建つる所。向ひ側には又平谷あり、大谷山の麓を流るゝ小谿にして水質極めて清冽、鰻魚の發育に適す。往昔吃又平の住みたる所なれば此名あり。又平は天正年間の人、世に大津又平と稱す、岩佐又兵衛に對して又俗に二代又平といふ。傳へ云ふ、又平性來訥なりしかば人呼んで吃の又平といへり、又兵衛の風に倣ひて浮世繪を善くす、妹の藤浪といふが人手にかゝりて非命の最後を遂げたるを歎き、京都を去りて大津追分の邊りに住み、妹の菩提の爲に佛

(43)

像を畫きて旅人に鬻ぐ、これ世に持て囃さるゝ大津繪の濫觴なり。

其後何時の程にか佛畫は廢たれて戲畫を畫くことゝなり、片原町以南大谷追分に亘りて殆んど毎戸之を賣り旅人之を求めて禁厭の符となす、繪は藤娘、鬼の寒念佛、雷公、瓢箪鯰、座頭、鎗持、鷹匠、辨慶、矢の根男、長頭翁（長頭翁）などあり、明治維新後時勢の變遷と共に漸次衰へ、今は長等神社附近に一二の賣店あるのみ、されど之に因みて「大津繪人形」「大津繪焼陶器」「大津繪手拭」「大津繪帛紗」などを案出して賣出せり、何れも手土産に適す。

○ 大津繪の筆の始は何佛

芭蕉

逢阪山墜道の西は大谷驛（札の辻）なり、新橋驛を距る三百拾九哩九、之と相對して京津電車の大谷停留場あり、停留場前に大津名物走井餅の老家あり、元此處より約二町の南なる走井の所在地に住みしが近時此に移る。走井は南大谷町に在り、昔は路傍に一小池ありて旅人の休憩所なりしが、後茶亭

を設けて餅を鬻ぐ、其庭園は木石の按排巧緻を極め、水は清冽にして氣亦清し、古來五拾三次を過ぐるもの必ず此に汗を洗ふを常とせしより其名高し、餅屋は今前記大谷停留場前に移り、其跡は私人の別荘となる。

○

清輔

はしりぬのかけひの水の涼しさにこえもやられず逢阪の關

三條街道と醍醐宇治木幡へ通ずる道路の分岐點附近を追分と云ふ、此處に鶴坂と稱する小阪あり阪の北は近江、南は山城なり、鶴坂の由來は詳ならず、追分の南を藤尾とす、往昔如意寺、藤尾寺あり、是れ地名の起因か、壽永年間平氏の一族西海に奔る、其遺族片岡六郎藤尾の山中に潜匿し、田園を拓きて村落を爲せりと傳ふ。藤尾の西北龍神山の山上に小池あり、大早の時は里人池に望みて雨を祈れり、往昔此地に阿鍋と云ふ女あり、常に芋を積みて此山に入る、里人尾して探るに、阿鍋は此池に入れり、それより阿鍋を龍神なりとし、死後池の傍に小祠を建て、其靈を祀ると傳ふ。

市内中部

京町通以北にして、突^{つぎぬ}抜け通より東、縣廳前より西を中部とす。札の辻より突^{つぎぬ}抜け通を一直線に下れば

〔濱大津驛〕札の辻より四町の前に出づ、御藏町の地先に屬し大津電車の起點なり。一方に大津警察署あり、他の一方には大津郵便局あり、驛の北隣は太湖瀨船發着所なり、沖の島、彦根、長濱及び湖西湖北の各港、竹生島等への定期汽船は此を發着點とす（總説、交通機關の項參看）此邊は大津城址なり、本丸は今の太湖汽船會社棧橋の有る邊なりしが、濱大津驛前の東西の廣道は御藏堀及大橋堀を連ねし本丸の滙を埋め立てし地にて城の前と稱しき、二の丸は、西は川口堀、東は中堀、南は桶屋町附近を境とし、三の丸は西は今堀柴屋町通の西を流るゝ百々川を境とし、東は大橋堀を限りとし南は今京町通と中町通との中間を際とす、大手は京町口にありて今の勘八突

抜け通の附近、三井寺口は今の土橋町附近、尾花川口は今の北保町附近、濱町口は今の阪本町方面とす、初め天正年中、豊臣氏阪本の塞を此に移す、近江源氏京極高次此に籠城し、尋でまた膳所に移す、徳川時代には此本丸跡に代官所、組屋敷、幕府の倉稟等を置く御藏町の名ある所以。約一町半にして坂本町に出づ俗に米瀨と稱す、近江米取引所の所在地にて銀行本支店此方面に在り、取引所の向側、湖岸に沿ひて

〔交道館〕電話三番あり、明治拾七年の建築にて總日本風二層建、間口七間奥行拾八間半、其宏壯當時にありては大津第一と稱せらる、殊に眺望佳絶湖山の風光を一眸の裡に收む、大津市の所有にして一定の料金を徴して希望者に貸與す、市民の便を假るもの多し。館の一部を大津商業會議所電話三番に充て、樓上を市會議事堂に使用す。大津商業會議所は明治拾貳年市内有力の實業家に依り組織せられたる商法會に起因し其後大津商法會議所と改稱し商業會議所法發布後同法に據りて改設せるものにて會議所當然の職務の

外商業講習會若くは實業講習會を開き店員獎勵規程を設け商業時報を發行し或は各商組合其他諸団体の事務所を所内に設けて之等の事務を兼掌し商工圖書部を設け或は生産品見本を陳列して公衆閱覽の便に供する等商工業者と密接の關係を結び産業の獎勵發達を圖り一面市、縣、國家の實業問題に貢献する所少なからず軌近時運の趨勢に伴ひ事務逐年増進の狀況なり。約一町の東の湖畔を

〔紺屋ヶ關〕札の辻よと曰ふ、湖南汽船會社定期汽船の起點なり、又大津電車停留場あり。交通機關の項參省。往昔此邊の湖岸を大津浦又は屏風浦と云ひ、大津七浦とも云ひしことあり、屏風浦の名は四面の山岳屏風を引きまはせるに似たるに因るか。

○ 立てけるか屏風か浦の春霞世に逢ふ阪の關を越さしと
紺屋ヶ關の南二町、笹屋町に

萬業集

○湖南航路は大津、瀬田、石山、南郷、唐崎、阪本、等を乗心地よき遊覽汽船晝間絶間なく巡航するを以て近江八景御遊覽には至極御便利です
○湖南航路は到る處山水明媚にして沿道名所古蹟に富み神社佛閣國寶保護建造物等多く趣味最も深し

近江八景と琵琶湖見物

○湖南汽船は鐵道院京都、大阪、三の宮、神戸、兵庫の各驛(四月一日より十一月中發賣)京都大津間、京津電車(年中發賣)と連絡し大割引便利切符を發賣す
○湖南航路は賃金安く規模廣く一日の御清遊に好適す又時間待を要せざれば短時間にも充分御探勝が出來ます

大津市紺屋關港
湖南汽船株式會社
長電壹貳四番

外商業講習會若くは實業講習會を開き店員獎勵規程を設け商業時報を發行し或は各商組合其他諸團體の事務所を所内に設けて之等の事務を兼掌し商工圖書部を設け或は生産品見本を陳列して公衆閱覽の便に供する等商工業者と密接の關係を結び産業の獎勵發達を圖り一面市、縣、國家の實業問題に貢献する所少なからず軌近時運の趨勢に伴ひ事務逐年増進の狀況なり。約一町の東の湖畔を

〔紺屋ヶ關〕札の辻よと曰ふ、湖南汽船會社定期濠船の起點なり、又大津電車停留場あり。交通機關の項參省。往昔此邊の湖岸を大津浦又は屏風浦と云ひ、大津七浦とも云ひしことあり、屏風浦の名は四面の山岳屏風を引きまはせるに似たるに因るか。

○
立てけるか屏風か浦の春霞世に逢ふ阪の關を越さしと
紺屋ヶ關の南二町、笹屋町に

萬葉集

○湖南航路は大津、瀬田、石山、南郷、唐崎、阪本、等を乗心地よき遊覽汽船晝間絶間なく巡航するを以て近江八景御遊覽には至極御便利です
○湖南航路は到る處山水明媚にして沿道名所古蹟に富み神社佛閣國寶保護建造物等多く趣味最も深し

近江八景と琵琶湖見物

○湖南汽船は鐵道院京都、大阪、三の宮、神戸、兵庫の各驛(四月一日より十一月中發賣)京都大津間、京津電車(年中發賣)と連絡し大割引便利切符を發賣す
○湖南航路は賃金安く規模廣く一日の御清遊に好適す又時間待を要せざれば短時間にも充分御探勝か出來ます

大津市紺屋關港
湖南汽船株式會社
長電壹貳四番

近江米取引所
仲買人

石田藤右衛門
岡田定治郎
谷澤彌三郎
梅景仁三郎
塚市兵衛
木村吉兵衛
吉田久四郎
九重宗兵衛

横井庄七
藪下幾太郎
北脇佐藏
安本喜助
木村市松
田中清助
森野善八
武村小太郎

御料理
御旅館

大津市石場

魚善樓

電話百三十六番

御 旅 館



大 津 市 川 口 町

松 阪 屋

電 四 十 二 番

氷 製 造 販 賣

合 資 會 社

近 江 製 氷 會 社

電 話 三 七 六 番

諸 油 製 造 販 賣 及
支 油 精 米 販 賣 及
ス タ ン ダ ー ド 虎 印 石 油
縣 下 一 手 販 賣

西 西 田 利 七

大 津 市 下 堅 田 町

長 電 話 五 三 三 番

は葉紅の一本日

三日吉 坂本 江州



御料理旅館

三橋樓 三番電



▼..... 専門家ニ限ル..... 診察ハ醫師..... ▲

◎貴價藥ハ其理由ヲ明示シ
相當代價ヲ申受ク

醫家藥價 日一分 金六錢

京都藥學校 卒業生 金谷和三郎
藥劑師 橋本八次郎
藥劑師 森久右衛門

大津市 高岡屋藥局

◎持續者ハ特ニ割引ヲナス

振大阪二〇四〇〇
替東京七四七



▼..... 専門家ニ限ル..... 藥劑ハ藥劑師..... ▲



内外砂糖

大津京町三丁目

西村甚三郎商店

電話 三十三番

振替(大阪)一六三八六番

瀬甚流
行の下
駄は壺
江履物
店に限
る



大津市菱屋町

壺江善吉

電話六一八番

〔東本願寺別院〕札の辻よあり、慶長四年西曆一五九九年教如上人の開基なり、元大津総年寄矢島家の別莊地なりしが、教如上人家康と會合せし場所たるの縁故に依り、矢島家より寄附せりと云ふ、又一説には、元華階寺けいかいじの末寺なりしと、書院及門と庫裏との一部は桃山城の遺物、本堂は元阪本村に在りしものにて多く遺匏やうかんにて作らる。明治初年、天行幸の際行在所ぎやうしんじよに充てらる、書院上段の室は則ち玉座の所。本尊佛像は慈覺大師の作にて門の傍なる老松は教如上人手植の松なりと曰ふ。約半町の南、京町通よしはら原町の

〔華階寺〕札の辻よは鎮西派にして京都知恩院末なり、天文元年西曆一五三二年僧萬休西念の開基、當時の封域は八町ありしと傳ふ、西念は足利將軍義澄の次子、遁世して僧となり足利氏保護の下に此寺を開きたりといふ、大津淨土宗五大寺の一にて境内に藤原秀卿の館趾あり。往昔秀卿天慶の亂の功により鎮守將軍となりしが、晩年佛を信じ、園城寺に入りて顯密の法を學び、居を此に定めて風月を友とす、今尙ほ其遺物たる月見岩及び矢の根地蔵を

傳ふ。境内の公孫樹いちぢうのみ二株は何れも周圍一丈一尺餘、高さ拾參間、樹齡二百三拾年と註せられ、市内第一の大樹なり。

〔天孫神社四の宮〕札の辻よは葭原町の東、四宮町に在る郷社なり。初め元四の宮町今の伊勢屋町北方の地に鎮座ありしを、文明年間時の國主佐々木氏の命に依り今の地に移す。祭神は彦火火出見尊、國常立尊、大己貴尊、帶中津彥尊の四柱あり、大津第一の大社にして氏子亦多し。祭神四柱なるの故を以て元天孫第四宮大明神と稱せしを、明治初年に今の社號に改む、古來毎年九月拾日に例祭を行ふ、俗に大津祭と稱す、昔は大溝城主分部侯より拾二本を出し神輿の後に列して渡御する慣例なりき、祭典の日には各町より山鉦を出す、鶴龜山(上京町)源氏山(中京町)郭巨山(後家在町)征韓山(獵師町)湯立山(玉屋町)龍門瀧山(太間町)殺生石山(柳町)桃山(丸屋町)孔明山(中堀町)石橋山(湊町)猩々山(南保町)鯉瀧山(白玉町)狸山(鍛冶屋町)等にて何れも金殿玉樓に擬し美を盡し艶を競ひ、鼓笛鉦を鳴して囃し立てつゝ市中

を曳き巡る、緋翠燦爛として美觀を極む、遠近の來觀者頗る多く大津第一の賑ひたり、上京町鶴龜山に垂下する見送りはゴブラン織の羅馬古圖にて鑑査状の下付を受く、繪馬堂には法橋友汀の黒馬、法眼東洋の王義之鷲を愛する圖、寛齋の神馬、豊彦の鯉の庖丁の圖など見るべきもの少からず。こゝより數拾歩の東に

〔滋賀縣廳〕札の辻よあり、宏壯は縣下第一と稱せらる。明治拾九年七月工を起し滿二ヶ年にして竣功す、工費約拾壹万圓、敷地一万三千餘坪にして純洋式二階建煉瓦造なり、縣會議事堂は其西端に在り。縣廳前に日本赤十字社滋賀支部あり、是亦洋式の二階建にて結構壯麗なり、支部會員は目下約三万人。縣廳裏に武德會滋賀支部の演武場及弓場あり、明治三拾四年の建設なり。縣廳の裏手一帯の地を梅林つばきと稱す、維新前後は梅樹多く觀梅の名所なりしが近年人家次第に建て連り今は只だ其名を存するのみ。

市内東部

縣廳前以東を東部とす、縣廳の東吾妻川の堤防に名木の櫻あり、周圍八尺五寸高さ七間、樹齡約百五拾年にて、艶陽四月爛熳として獨り大津市東部の春を占むるの觀あり、近江名木の一たり。此邊一帯を

〔松本〕と稱す。謠曲「繪馬」に云ふ「風はうへなる松本や、ひばり落來る栗津野の、艸の茂みを分越して云々」又海道圖會に「大津松本は昔大嘗會の卜占に依り江州滋賀郡の獻稻をおほせらるゝ時は、大略松本村より貢ぐを舊例とせり」とあり。又此處を菊が濱と云ふは宇多天皇石山寺に行幸の時、淡海の國司大伴翁おほとものおきなといふ人此濱に行宮を建て、種々の菊花を植て御幸を饗應奉れるに基く。

○ 寛延元年桃園天皇大嘗會行はる、悠紀の方春うた、近江國松本村

松本の村の初穂をぬきうめてなほ萬世のためしとろつく

山間に松本城趾あり佐々木氏の一族松本民部少輔の居城なり、今は田圃となれり、又、鐵道線路の南、字岡山一に元宮と云ふ古梅林は今より約二百年前に初めて植栽せり、觀梅の名所たりしが現今五百歩餘は舊形を存し古梅多し、文政年中文人浦上春琴此地に遊ぶ、詩あり曰く「湖光春影好、梅放萬株花、枝濕昨宵雨、萼含今曉霞、山溪皆馥郁、村落盡橫斜、箇裏幽棲者、何邊林叟家」と、此處に蹴鞠明神舊趾あり、初めは花洛桂宮六條の北西洞院南に在り承元年中詔に依り此地に遷し、後天正二年二月再び今の地に移せり〔平野神社の項參看〕。縣廳の東約二町に小丘あり、月見坂と稱す、花園天皇此地にて觀月の宴を開き給ひしにより此名ありと傳ふ、寺あり、月見山西方寺と云ふ花園天皇の宸筆「月見山」の扁額を藏すと、此地今は墓地となれり。京町通に出で、東に進めば右方に

〔平野神社〕

札の辻よあり、
リ十一町

中世精大明神社と稱す、大津市東部の氏神にて

郷社なり、祭神は猿田彦命、大鷦鷯命なり。元比良神社に座して往古は滋賀郡の比良山に鎮座す、後松本の岡山に移し、天正二年西暦一五七四年今の地に遷座す。村上天皇天徳年中大内に蹴鞠の技藝盛に行はれ當社猿田彦神を鞠の精霊として崇信あり、蹴鞠の御會には奉幣ありしと云ふ。以後大納言成道當社の分神靈を京都西洞院の邸に勸請し滋野井社精大明神と稱し又桂の宮とも稱す。後、壽永元暦の擾亂に此社廢頽す、土御門天皇承元二年西暦一二〇八年鞠道家飛鳥井雅徑後鳥羽上皇の令旨に依りて廢頽せる滋野井社の神器を當社に返遷す、此時より難波飛鳥井の両家歴代社參ありて祭資料並に和歌を献納するを例とす。祭神猿田彦命の座像は明治三十六年四月國寶に指定せらる。當社には蹴鞠に關する舊記數百卷を藏す、総て先年京都難波家より奉納せるなり、末社恒世神社は初め恒世川の北湖岸にありしを、天文元年西暦一五三二年現地に遷す。祭神は往古唐崎に於て日吉神を舟に乗せ粟飯を献じたりと云ふ粟津の漁人田中恒世にて、膳所町の田畑の神と同じと傳ふ。中町

通を西すること約半町、恒世川に沿ひて濱通に出づれば

〔甚七町遊廓〕

札の辻よリ十一町なり、一に稻荷新地と云ふ。町内に劇場あり稻荷座

電話四七五番と云ふ、株式會社經營にして明治四拾五年の新築に係り、設備の完

全と場内の清潔とは大黒座に優れり。湖岸に大津電車の石塙停留場あり、大津停車場迄二分間にて達す。此處より東の湖畔を

〔石塙〕

札の辻よリ十七町と稱す、以前は矢橋への渡船ありて旅客輻輳せしが、交

通機關の變遷に依り今は昔日の殷賑を見ざるも風光は舊に依りて明媚なり

湖南汽船會社の石塙乗船場あり、南は石山、瀬田、南郷、西は紺屋ヶ關、三井寺下、唐崎、坂本へ赴くには此にて乗船するを便とす。待合所の後方に在るを呼次松と云ふ、一株にして枝葉繁茂し翠蓋地を蔽ひ、頗る風致に富む、寛文年間石塙の船守魚屋五兵衛の植へたるなりと云へば、樹齡二百四五拾年の計算なり、松の北、湖岸に古色蒼然たる石造の高燈籠あり、寶淨院今は衰廢す姓蓮の建つる所、毎夜點火して航行の目標たらしめしなり

矢橋から大津打出の灯籠かな

仄止

○ 此處の沖合は端艇競漕會場にして武德會及各學校のボートレース行はる、殊に八月四日の武德會のレースは壯觀を極む。これより東を馬場と云ふ。馬場の名は、往昔大高寺の門前に櫻樹を植へ馬場を設けたるに基くと傳ふ、大高寺は天武天皇の皇子高市の王子の御殿を以て寺とし天武山大高寺と名づけ、後月見山大光寺と改むとの傳説あれども其跡詳ならず。石場、馬場一帯の湖畔を打出の濱と稱す。萬葉集に「相坂を打ち出て見れば淡海の海白木綿花に浪立渡る」とあり、これより打出の濱の名あるに似たり

兼氏

○ にほの海はこほりとくらし白波の打出の濱に春風うふく

〔義仲寺〕 札の辻よは、石場の東一町大津停車場より二町、東海道筋の南側に在り、壽永二年西曆一八一四年木曾義仲粟津原に於て東軍と戦ひ流矢に中りて馬

より墜ちて死す、乃ち此に葬り、德音院義山大居士と諡す、昔一僧あり、義仲の塚の傍に一菴を設け、義仲菴と名け、其後義仲寺と改む、三井寺光淨院の支配なり、一説には天文二拾二年西曆一五五三年六月六角義質石山寺に詣で粟津原にて木曾義仲の舊墓を尋ね、その荒廢を悲みて初めて建立せりと傳ふるも、前説正しきが如し。境内に朝日將軍木曾義仲の墓あり、信濃柿二株を植へて標とす、後、其裔義長葦原檢校と稱し大學頭林衡に文章を乞ひ碑を建立す。

○ 雪消えてあはれに出し朝日塚

智月

芭蕉塚亦この境内にあり、數株の芭蕉の間に義仲の墓と相並ぶ、南方に碑あり、二尺餘の自然石に門人榎本其角の筆により芭蕉翁の三字を銘し「木曾殿と脊中合せの寒さ哉」の一句を刻す、風流韻士の來り弔するもの頗る多し、傍に芭蕉堂あり翁及門下三拾六人の畫像を藏す。

○ 晝顔や我も乳筋の土に臥
十月や花も實もなき墓参り

義仲寺

眞佐
珪琳
僧五岳

奇勳歴倒大頭公、深惜先鞭不令終、想像將軍當日恨、芭蕉墓畔立秋風。

〔大津驛〕 札の辻はは義仲寺より二町の南にして大津市の東端なり、東海道線の途中下車驛にて新橋驛を距る三百拾八哩、神戸驛へは五拾七哩二分、此驛より支線を湖岸に布敷して濱大津への貨物を運送す、支線は今、大津電車に貸與せり、驛の西方山麓龍ヶ岡墓地内に蕉門十哲の一人なる内藤文章を始め元祿時代以後に於ける俳人の墓あり。驛前に大津電車の大津驛前停留場あり、南は膳所、瀬田、石山、西は石場、紺屋ヶ關、濱大津へ通ず。〔玉造莊〕 今の松本、馬場附近の総稱を玉造莊と云ひき、舊記に、玉造とは瓦造の居る所なり、又上古保岐玉を造りて禁中に献じたる者の居住せし地なるを以て玉造と云ふとあり。

市外東南部

膳所、瀬田、石山方面を大津市外東南部とす。此方面の遊覽者は、陸上は大津電車、湖上は湖南汽船に頼るを便とす。

〔膳所町〕 大津札の辻はは大津市の東にて滋賀郡に屬す、大津驛より二三町、リ二十五町大津電車の停留所は、錦、中大手(膳所)、中庄、粟津の四ヶ所、湖南汽船乗船場は、北大手に在り。往昔は陪膳おものの濱と云へり、陪膳を轉じて膳所と爲す。戸數千二百人口六千餘、本多氏(六萬石)の舊城地たり。膳所城は、慶長六年西曆一六〇年六月大津を移し戸田一西を封ず、幾何も無くして本多俊次之に代り、子孫相次で領す。壘壁樓牆の壯麗は湖上の一美觀にして、水に映るはせいの城と稱へられしが、明治三年城廓を毀ち、今は膳所監獄たり、惜むべきかな。本丸趾は湖畔にして風光頗る佳なり今は石鹿園と稱す。大字錦の正法寺は承久の頃茶白山の下に在りしが延元四年西曆一三三〇年に移す

木造地藏立像及不動明王二童子立像は共に國寶なり、同所の和田神社は高靈神と八大龍神とを祭る、其本殿は特別保護建造物たり、式内石坐神社亦大字錦にあり、天命開別命、伊賀采女宅子媛、弘文天皇、彦坐王命の坐像を藏す、皆國寶なり、中大手に郷社倭神社(もと膳所神社と云ふ)あり御食津神を祭る、御厨を守る神なり、もと城内二の丸の前に在りしを、後今の地に遷す、境域廣く、老樹蒼鬱たり。其西北に在るを清徳院と云ふ、達磨堂と稱し、初は濱田に在りしを貞享元年西曆一六八四年此に移す、木造阿彌陀如來坐像は國寶たり。安昌寺は初は三河國西尾に在りて東漸寺と號す、本多氏の創立なり、膳所に移りて安昌寺と改む、曹洞宗なり、膳所藩殉難志士の墓あり(招魂社參看)。大字中庄に盆梅家あり、生駒氏といふ、毎年二月下旬より三月下旬迄愛培の盆梅數拾株を陳列して公衆に觀覽せしむ、庵號を梅仙窟と名づけ、近時其名大に著はれ、遠く九州奥羽地方よりも訪ね來る者多し、秋は嵯峨菊の花壇を設けて是亦公開す。同所の五百羅漢はもと栗

太郡黒津に在りしを天明年中に移せるなり、東海道名所の一に數へらる、國寶木造釋迦坐像彌阿を藏す。茶臼山は膳所町の西にある小丘にして老松蒼鬱、眺望頗る佳なり、弘文天皇御陵地なりとの説もありしが、近年に至り彦坐王の御陵と推定せらる。此山の奥三町に餅九藏植林紀念碑あり。本多神社は瓦の濱に在り、本多氏の祖先を祭る、境内樹木多く幽靜なり。之に隣りて招魂社あり、尊王の爲め殉難せる膳所藩の志士の靈を祭る、明治三年正月膳所藩主本多康禎之を建つ。膳所の藩士保田信解、阿閉權之丞、田河藤馬之丞、榎島碓之助、森喜右衛門、高橋雄太郎、關元吉、高橋作也、深栖駿助、渡邊宗助、増田仁右衛門等拾一人、勤王の志を懷き、聖護院の宮臣川瀬太宰(大津市内西部三尾神社の項參看)と謀る處あり、密に意を毛利侯に通ず、上阪某之を怪み京都守護職に告ぐ、故に、慶應元年五月拾一士を捕へて獄に下し其年拾一月悉く斬に處す、但し保田、田河、阿閉、榎島の四士は自裁せしめられたるなり。後、康禎其罪を覆按するに全く尊玉

愛君の衷情に出づるを悟り祠を茶白山に建て、之を祭る、後、宇木下の湖邊に移し、更に現地に移す。志士の忠節天聞に達し、明治三十一年正五位を贈らる。

〔栗津ヶ原〕札の辻より約一里七町は膳所町の南方なり、湖岸東海道の両側には並木の老松亭々として翠色滴らんとす俗に栗津の松原と稱す。今は水に映る膳所の城を失へるも而も風光頗る佳なり、栗津晴嵐は即ち近江八景の一。

栗づのや山から京のほこ、きす

丈 草

栗津書感

中村淡水

若非菜圃即桑田、春入荒墟綠似煙、往事回頭是屢氣、城樓如畫立湖天。

歴史上有名な古戦場にて、木曾義仲敗戦の地とす、義仲の四天王今井四郎兼平の墓は松原の西二町の田畦の間に在り。北端に大津電車の栗津停留場中央より稍や南に東海道線石山驛及大津電車石山驛前停留場、湖岸に湖南

汽船會社栗津乗船場あり。滋賀縣農事試験場を此地に設け、農事上各種の試験を行ひて縣下農業の改善發達に資す、園山の果樹園は其附屬事業にて參觀者を歓迎す。

〔瀬田〕

大津市札の辻より一里二十八町

瀬田村は栗太郡に屬し勢多川を隔て、滋賀郡石山

村と相對す、栗津ヶ原より行くには勢多橋を渡るを要す、古く國史に見へ、上古は勢多驛と云ひ繁榮の地なり、又國府を置かれし地なり。勢多川は琵琶湖の水の勢多の西に緊束して一條の細流となれるを云ふ、南に流れ、石山、南郷を過ぎて幾多の急湍と爲り、宇治に至りて始めて平夷に就く、湖口より宇治迄凡六里餘、末は宇治川、淀川と曰ふ。勢多橋は俗に勢多の唐橋と稱す、日本三大橋の一にて大橋九十六間小橋二十七間幅四間、中間の小島を中島と呼ぶ、橋上に佇めば山影水光と相映じ宛然畫中に在るの感ありて景趣絶佳なり、勢多夕照は則ち近江八景の一とす。

大江匡房

橋の板も苦むす計り成にけり幾世へわらん瀬田の長橋
永き日や蝶とつれたつ瀬たのはし

朱 迪

橋の南に湖南汽船會社の瀬田乗船場あり、大津電車の唐橋前停留場は橋西約二町。瀬田乗船場の傍に橋姫祠あり、一説に龍王女を祭るとも云ふ、之と相接して秀郷祠あり、寛永年中の建立にて田原藤太秀郷を祭る、祠廟縁起に曰く、秀郷は勢多川の邊田原(山城國)の人なり、又蒲生郡にも居る、故に田原と稱し或は蒲生とも曰ふ。蒲生氏郷の祖なり。官幣大社建部神社大津市札の辻より一里卅町は橋の東約二町の處にあり、日本武尊を祭る、近江一の宮と稱し、社殿壯美、境内清淨にしてそゆる敬虔の念を起さしむ、賽客絶ゆる事なし。

諧て來て仰げやあふげ建部たけべのたふとき神のたけき御後威を
瀬田の特産に「ぬひ目なし蚊帳」陶器あり、鰻と蜆とは名産にて味頗る佳なり。

り。又網船あり、夏季一日の清遊に値す。

〔石山村〕 滋賀郡の南端にて北は膳所町の粟津が原なり、國分、鳥居川、寺邊、南郷、内畑、外畑等の大字あり、鳥居川は勢多橋の西詰にて、大津電車の唐橋前停留場所在地なり。壬申の亂に近江朝の官軍の陣したる所なるべし。大字國分は鳥居川の西南にして國分寺こくぶんじあり。

〔石山〕 大津市札の辻より二里二町の北端に螢谷といふがかり濘々たる瀬田川は足下に流れ、鬱蒼たる老樹は頭上を覆ふ、三伏尙ほ熱を知らず、殊に螢の産地として其名高し。大津電車は其北に石山假停留場を設けて終點とす。石山は勢多の清流に其影を蘸し、山容水態相待ちて絶勝を爲す、景趣眞に畫も及ばず、殊に花晨月夕は云はすもあれ、夏の螢、冬の雪亦頗る妙なれば、來遊の雅客四時絶ゆることなし。山麓には旗亭檐を連ね、山腹には有名なる石山寺の堂塔綠樹の間に陰見す、湖南汽船會社の石山乗船場は山麓に在り。石山寺は天平勝寶年中良辨僧正の開基にして石光山と號す、本尊には二臂

如意輪觀世音を腹内に藏する一丈六尺の巨像を安んず。此本尊は古來天皇即位の初曆に開扉し又は三十三年目に開帳するを例とす。寺域は約九千六百坪とす。眞言宗に屬し、西國三十三所の第十三番なり

のちのよをねがふ心はかるくさもほとけのちかひ重き石山

天智天皇大津の宮に在せし時、此山上に當りて常に一朵の紫雲變巖たり、乃ち勅使を遣して之を見させ給ふに、山腹に八葉蓮花の巖石あり奇雲降りて帶狀を成す。其後、聖武天皇の御宇に至り、佛法隆興せしかば、良辨僧正勅を奉じて當寺を創建し勅願所と爲し給ふ。降つて華山天皇の御宇には皇子僧都深觀親王座主となり給ひ又中興の僧觀賢は密教を傳へたり。承暦二年二月二日火を失して悉く烏有に歸したるを、建久年間頼朝之を再建し、天正の頃又荒壞せしを、秀吉の側室淀君、安民治世を祈りて莊園を寄附し、伽藍を修造す、現今の本堂は其一部にて古の講堂なり、今特別保護建造物たり、仁王門も頼朝の再建、多寶塔は是亦保護建造物とす、古來焚掠の災

多からざるが故に、多くの古書書古文書を藏し、石山縁起卷物其他拾數點は國寶となり、木造の如意輪觀音半伽像、毘沙門天立像、不動明王坐像も同じく國寶たり。仁王門を入れれば賽路の左右に櫻楓の二樹列を爲し、霧島亦多し、石階數拾級を登れば毘沙門堂の前に出づ、怪岩突兀として奇雅掬すべし、水成岩なり往古湖水廣大にして此山皆水底に在りしを證すと云ふ。更に拾數級の石階を登れば本堂なり、堂内晝尙ほ暗し、傍に源氏の間あり、紫式部當寺に參籠し、明月に對して須磨明石の風光を思ひ浮べ、やがて有名なる源氏物語を草せし處なりと傳ふ。其前を過ぎ、岩石の間を登れば多寶塔及觀月臺あり、大觀亭又は豁眸亭と稱す。此所に佇みて雙眸を放てば湖光鏡の如く、比良の秀嶺雲に聳へ、勢多の唐橋脚下に横はる、殊に中秋三五の月の夜は景趣一段勝るものあり、石山秋月の近江八景として謠はるる所以。附近には紫式部墓、頼朝墓、祖師堂、内供淳祐經塚等あり、又鐘樓の梵鐘は、往昔龍宮より上りしとの傳説あり、祖師堂の西なる、八重櫻

は良辨僧正の杖櫻と稱し、近江名木に數へらる、僧正石山開基の際南都より移植すと傳ふ、拾遺集に讀人知らず

うしろめていかて歸らん山櫻あかね匂ひを風にまかせて

とあるは是れなり、關伽井の傍に、是も近江名木の一たる天狗杉鬱然たり當寺の護法神此杉に棲むと傳ふ、周圍拾五尺高さ二拾五間、樹齡詳ならず山内尙ほ紹介すべきもの多けれど紙數に限あれば之を略す。

近衛關白時照

いし山やにほのうみてる月影は明石もすまも外ならぬかは
いしやまの石にたげしる霞かな

芭蕉

石山即事

中村淡水

急風颯捲春漪、奔紫狂紅山更奇、耳食人皆唯說月、豈知湖雨欲來時。

〔岩寺間〕 石山寺より五拾町南の山間に在り、元正天皇の御宇僧泰澄の開基なり、本尊千手觀音は泰澄が一刀三禮の作にて汗かきの觀音とて有名な

り。寺域は山間高燥の位置を占め、老樹蔚然、幽靜閑雅、眞に別天地の感あり、毎月拾七日を縁日とす、西國三拾三所第拾二番の札所なり

みなかみはいづこなるらん岩間寺岸打つ浪はまつ風のおと

〔南郷港〕 元、供御の瀬と稱し歴史上著名の地點なり、湖南汽船會社の乗船場を置く、此所には宇治川水力電氣工事あり、琵琶湖の水を一秒時間二千立方尺を引き、開渠隧道等合せて六千八拾一間の水路を設け、下流宇治にて二百五拾尺四寸の落差を造り、八千馬力のフランシス形大小車五萬を以て三萬キロワットの電氣を起し五萬五千ボルトの高壓を大阪に、一萬二千ボルトを京都に、其他を附近町村に供給して各般工業の動力たらしむるものなれば其設計工事の壯大無比なるを推知すべし。之と相接して南郷洗堰あり、淀川改良事業の爲め勢多川の奔水を遮斷して堰を設け、琵琶湖の排水に加減を加へ、一朝豪雨あるも湖岸及下流沿岸に水害を及ぼさる設

計に成り、各開門より一秒時間に平均六千九拾九立方尺の排水を爲すと云ふ、されば流路の水勢は宛然數百の飛瀑を列ねたるが如く、鑿々として壯觀を極む。約二拾町の南、瀬田川の下流に山脚を浸せる立木山の山腹に立木觀音あり、本尊觀世音は弘法大師の四拾二歳の時此山の立木に觀音の像を刻めるものにて、俗に厄除けの觀音と稱し、四拾二歳に達するものは、遠近を問はず、此に詣で、幸運を祈る。毎月拾七日及節分を縁日とし、殊に一月拾六拾七拾八の三日間は初立木と唱へ、厄除けの法要を修し、參詣者非常に多し、鹿跳は立木山の麓にて瀬田川の兩岸相接して山峽を形成し、其幅約二拾八間、河中の岩と岩との間約六間餘に過ぎざれば、鹿一躍すれば此間を跳越し得るを以て此名あり、又少しく下流に米かしと呼ぶ所あり、流水河底の岩石に衝突して轟々銀泡を立て白沫を飛ばす、恰も米を洗ふが如く、奇觀云ふべからず、この二ヶ所は瀬田川下流の名所として人口に膾炙する處なり。田上の不動は對岸、田上山に在り、貞觀元年西曆八五九年智證大

師の開基にて三井寺の配下に屬す、大師三井寺を造營せんと欲し田上山に入りて良材を求む、老翁の石上に坐するあり、曰く此山に靈木ありと、大師乃ち明王を彫刻して岩窟に安置す、本尊は即ち是れ、境内に智證大師手植の櫻といふがあり、周圍三尺八寸高さ四間、不動堂開基の紀念に手植せるものなりと傳ふるも樹齡約三百年なれば數代後の新芽なるべし。近江名木の一たり。

市外西北部

大津市の北、滋賀郡滋賀村、阪本、堅田、雄琴方面を市外西北部とす、此方面の遊覽者の爲には、湖南汽船會社及太湖汽船會社の定期汽船あり。

〔錦織郷〕は今の滋賀郡滋賀村にて、南は大津市、北は阪本村に接し、山中、山上、漣、錦織、南滋賀、滋賀里等の大字あり、西に滋賀山（長等山の一部）を負ひ、東太湖に臨む、大津も古は錦織郷の中なりしならむ。此邊は昔の志賀の都の境域にて遺蹟多し。山上は大津衛戍の北に接し、古俗志賀山上と稱す、大友王子山前にかくれて自縊し給ふよし日本紀にあるは此地の事にて山前やまざきを今山上とあやまると松下見林は云へり。山上の北數町に宇佐山あり、大字錦織に屬し、今陸軍射撃場の設けあり。山頂に宇佐山城趾あり、元龜元年西曆一五七年織田信長の築く所、同年九月淺井朝倉の兵に攻め陷る。山腹に宇佐八幡宮あり、治暦元年西曆一〇六五年伊豫守源頼義の建立なり

(72)

寺門傳記補録に曰く、「頼義朝臣は智證の法流に歸伏し長子快譽を以て寺門の學侶と爲し……三郎義光を以て新羅明神の氏人と爲し、又快譽阿闍梨と謀り鶴尾八幡（編者曰、大津市西部）を創し又錦織僧正と宇佐大神を錦織山上に請ひ以て寺門の鎮守と爲さんことを議す……豫州遂に錦織莊に館し其身を終ふ」と。大字錦織に頼義邸地ありしも今其跡分明ならず。八幡宮の下に不動堂あり、智證大師の開基にて、俗に山上の不動と稱す、其地に長さ一丈餘の瀑布あり不動の瀧といふ。夏季參詣者頗る多し。大字滋賀里より京都の白川に出づる山越を山中越とす、又志賀山越といふ。五拾町計あり。

(73)

○ 櫻花道みえぬまで散にけりいか、はすへき志賀の山越

橋成元

南滋賀の内新在家に大伴黒主くろぬし祠あり、大津宮趾の西界とも云ふべき坡上にして、西に登れば即ち志賀山越なり、黒主は志賀郡の地主にて大友與多王の孫都堵磨の子なり、此地は其舊蹟なり、此側なる福王子祠は紀貫之の靈

を祭る與多崎は宇佐山の正面湖中に突出する四町許の沙嘴なり、大津市の尾花川より北六町、北なる唐崎と相距る二拾四町、往昔大友與多王の領地なりしにより此名あり、俗に柳が崎といふ。此處に光春駒留松あり、明智左馬之介光春、安土城陷落の後單騎湖水を涉り此地に上陸し駒を繋ぎて休息せる處なりと傳ふ、近江名木の一なり。此邊の湖邊一帯を志賀浦と呼ぶ、

○ 公 任

さ、波や志賀の浦風いかりこゝろのうちの涼しがるらん

志賀の大輪田は滋賀の都の時の渡津にて栗太郡山田方面へ航したる湖岸の曲なり、其跡詳ならねど、滋賀里の東なる唐崎邊ならんか、此湖岸は年々泥沙の堆積ありて古今の汀線は同じからざるべし。

〔大津宮址〕 大津札の辻より 大字南滋賀に宮址の碑あり、大津市の建つる所。天智弘文二帝の皇居し給へる遺跡なりと傳ふ、當時の都邑(志賀の都)は唐崎より栗津迄の地、即今の滋賀村大津市膳所町に渉るも、内裡の跡に付い

ては諸説紛々たり、宮址の碑を此に建てたるは輿地志略の説に隨へるなり。

○ 高市 黒人

さ、なみの國つ御神のうらさひて荒たるみや、見れば悲しも

○ 頼 杏 坪

滋 賀 有 感

湖田麥秀菜花黄、偶問舊都過樂浪、豈料周公升帝位、華山何處甲成王。

〔崇福寺址〕 崇福寺は一に滋賀山寺又志賀山と稱す、續紀大寶元年の條には志我山に作り、天平元年の條には紫郷山寺に作れり、大字南滋賀の見世の西五町の山間にあり、大津宮の舊境とす、天智天皇戊辰歲に勅建せられ、延喜式拾五大寺の一にして崩御の後法會を設けしことあり、中世以後廢滅す、梵釋寺跡は、地域志賀寺跡に混じて明ならず、桓武天皇延暦五年の勅建にて延喜式拾五大寺の一なり、天皇は大津宮御宇天皇(天智)の四世の孫なれば、故宮の跡に就き營み給ふ所ありしなり。

○ 定 家

仙人のひかり尋ねし跡や、これ深雪さねたる滋賀のあけほの

〔唐崎〕 大津市札の辻より一里廿町 滋賀村大字南滋賀の東北拾五町湖濱の地を云ふ、一老松あり、舒明天皇の世に始て植ゆ、今は天正十年西暦一、五八二年 大津城代新庄駿河守直頼の植替へしもの（元の松根と稱するもの阪本中邑庄五郎方に秘藏す）なり、枝は八方に擴がり、遠く望めば翠巒の如く、近けば蟠龍に似たり、枝の延長東西四拾間南北四拾八間、幹の廻り二拾七尺餘、支柱數百本、高さ二拾尺餘あり。希代の靈松とす。唐崎夜雨は近江八景の一なり。樹下に唐崎神社あり、日吉山王の御旅所とす、毎年七月二拾八日より三日間の夏越稜（御洗手）には遠近の男女群集して雜沓を極む。湖南汽船會社の唐崎乘船場あり。

○ 顯 家

○ 月かげは消ぬ氷とみへながらさゝ涙よするしかのから崎

からさきの松は花よりおぼろにて

芭 蕉

唐崎の西に阪本村大字穴太あり、比叡山無動寺の東麓にて、此に志賀高穴たかのな穗宮址あり、高島と字す、景行成務仲哀三帝皇居の地なり、武内宿禰亦此に居る、今尙ほ竹内を姓とする者あり。御所跡は足利義晴六角氏に倚りて來り、天文拾九年西暦一、五〇年 終に薨する所とす。

〔官幣大社日吉神社〕 大津市札の辻より二里六町 阪本村大字阪本比叡山麓に鎮坐す、唐崎より約拾五町、往昔山王權現と稱し延曆寺建立後、同寺僧徒の奉ずる所となり、一朝事あれば山僧等神輿を昇けて平安の公家に逼る、之を神輿振りと稱し京師の戒懼甚しかりき。天龜の兵火に罹り、今の社殿は天正拾九年西暦一、五九〇年 豊臣氏の再建に係る。本社（大比叡宮）は大山咋尊を祀る、一の宮（小比叡宮）には國常立尊を、聖眞子の宮には天忍穗耳尊を、客人の宮には伊弉諾尊を、十禪の宮には天瓊々杵尊を、八王子の宮には國狹槌尊を、三の宮には惶根尊を祀る、之を上七社と稱し、外に下の七社及八拾七の末社

あり。本殿及攝社大神社の本殿は共に保護建造物なり。日吉白山宮神輿額日吉二宮神輿額、日吉牛尾宮神輿額は何れも國寶とす。境内老杉蔚然として神々しく、祠前を流るゝ大宮川の三橋附近は橋殿と稱し楓樹多く、又馬場の両側には櫻樹並列し、春と秋とは風致殊に絶佳、夏亦納涼に適す。大祭は四月拾四日にて俗に阪本の山王祭と稱へ、近國稀に見るの殷賑を呈す樓門前に春日岡の藤あり、周圍二尺八寸高さ十三間にて近江名木の一なり古來此地は春日の神の靈地として日吉祭禮の日神輿渡御の時に社家此所にて笏拍子を拍ち「あきらけき日吉の御神君かためやまのかひある萬代やへむ」の神歌を唱ふるの例あり、儀は今猶ほ存す。三橋の側に四本殆ど一株の如き老杉あり、其下より清水滾々瀧の如く湧く、故に走井杉と稱す、又明星水と稱する古井の側に二株の老杉亭々たり、大なるは周圍拾三尺小なるは拾二尺高さは共に拾五間なり、明星杉の名あり、共に近江名木に數へらる。

(78)

日吉やま七坐す神の跡たれてくもらぬ影は世をてらすらん

法親王尊圓

ひさかたの天つ日吉の神まつり月のかつちもひかりそへけり

〔比叡山〕 日枝山又は天台山とも稱す、江城二州に跨りて海拔二千七百尺あり、頂上を大嶽と云ひ其西南に四明嶽あり、山脈の東嶺を東塔、南嶺を無動寺、北嶺を横川西嶺を西塔と云ふ、之に登口數條あり、阪本より東塔に至る廿五町、之を東坂と云ふ、之を本道とす、阪本より無動寺に至る路は拾八町、仰木村より横川に至る路は亦拾八町、飯室谷より横川に上る拾七町なり、又山城國より上るには山中越、雲母坂越、黒谷越、横川越、大原越等あり。絶頂より俯瞰すれば華洛の市街、琵琶湖の激波一眸の裡に集まり風光の明媚景勝の雄偉、近畿に冠たり。無動寺の一嶺を裳立山といふ、紀貫之の爪髮塚あり、先年贈位の時、勅使此に參向せらる。

(79)

長嶽從來守紫宸、先王立作國家鎮、雲波五色三津浦、星斗千年七社神、湖水朦朧空得日、山櫻寂寞自過春、好風景非無意、吾亦東西南北人。

〔延曆寺〕電 叡山に在り天台宗の大本山にして山門と稱す、延曆七年西曆七八年桓武天皇の勅を奉じ傳教大師の創建する處にて皇室鎮護の靈場として仰がれ、九院拾六谷拾六院ありしが元龜の兵燹に罹り一山悉く焦土に歸し後、豊臣秀吉、徳川家光等相次いで寺領を寄付し再興を計り、山上山下の殿堂稍や舊觀に復するを得たり、境域は殆ど比叡山の全部に亘り老杉古檜蔚々として密林を成し、流泉飛瀑所々に懸り、満山冷然三伏の候も苦熱を知らず、中央の東塔には、根本中堂、大講堂、同鐘樓、戒壇堂（以上保護建造物）法華堂、文珠樓、前唐院等あり、東谷拾一坊の一なる壽量院には國寶木造阿彌陀如來の坐像あり。中堂の南なる無動寺谷には無動寺あり

相應の刻める不動尊を安置す、寺前に慈覺大師墓あり、又辨財天祠あり信者の參詣常に絶へず。横川の中堂は首楞嚴院と云ふ、慈覺大師の開く處、今保護建造物たり、横川六谷の一なる飯室谷に安樂律院あり、惠心僧都の居りし所、所藏の絹本著色の彌陀三尊二拾五菩薩來迎圖及び千手觀音像は國寶なり。西塔は中堂の西北にあり、釋迦堂（轉法輪堂）法華堂、常行堂、椿堂、元三大師堂等あり、釋迦堂及び瑠璃堂本尊は保護建造物とす。堂塔は孰れも建築宏壯にして大乘佛教の精華を極め、日本天台の法幢たるに慚ぢず。登山案内者は、阪本より三塔廻り約七拾錢、腰押同約七拾錢、山駕籠は根本中堂迄往復約一圓五拾錢、三塔廻り約二圓五拾錢なり。

阿彌多羅三藐三菩提のほそけたちわが立袖に冥加あらせたまへ

〔傳教傳來の茶樹〕 は日吉馬場の東、阪本村大字阪本にあり、此處を御茶園と字す、拾二株の茶樹の中、最大なるは株の周圍四尺三寸六分高さ七尺

一寸樹齡一千年と註せられ近江名木に數へらる。傳へ云ふ、傳教大師入唐して茶實を得て歸り、此處に栽えしめたり、之を我國に於ける茶の始めとす、今日茶の名産地たる山城の宇治桐尾の茶は何れも此所より植弘めたるなり、嵯峨天皇弘仁六年夏四月二拾日、天皇唐崎に奉し、途崇福寺を過ぎ給ふ。時に大僧都永忠自ら茶を煎じて之を奉る、天皇痛く歎感あり、詔して永世の神供となさしめ給ふ、其茶は即ち其園より摘採して製したるものなりと、茶供の儀今に存す、

〔西教寺〕

大津市札の辻より二里十六町

日吉神社の北數町、上阪本村小字野田（横川谷に通ずる奈良坂山徑の傍）に在り。天台宗眞盛派の本山にして、推古天皇二拾六年の建立、聖德太子の開基なり、本尊佛は洛東法勝寺の藥師如來を安んず。寺祖は慈攝大師（眞盛上人）と云ひ、文明明應の頃、公武の歸依頗る厚大なり、横川衆徒の招請に依りて此寺に講説す、明應四年西曆一四九六年伊賀西運寺に寂す、其教は寡慾清淨念佛に在り、徒弟推して西教寺の一祖と爲

し法流を分つ。寺内に明智光秀一黨の墓あり、また國寶には惠心僧都經曼茶羅あり、諸堂廣麗華潔なるが中にも客殿は伏見桃山の舊殿にて、花鳥の間、賢人の間、猿猴の間、鶴の間等あり、鶴の間以外は總て狩野永徳の筆なり、今は保護建造物たり。

〔來迎寺〕

大津市札の辻より一里三十町

は湖畔、下阪本村大字比叡辻に在り、延曆寺に屬す殿堂輪奐にして殊に繪畫の藏幅に富む、國寶多し。就中十界圖は巨勢弘高の筆にて海内無双と稱す。惠心僧都の彌陀の來迎に感じて寺を建て、彌陀を安置せる處なりと傳ふ。境内に、森三左衛門可成の墓あり、可成は信長の將、淺井朝倉の勢を拒いて戰死す。來迎寺の南、下阪本の湖邊に坂本城趾あり、信長より光秀に賜はりたるもの、天正二年之を廢して大津に移す（大津市内中部、大津城趾の項參看）。下阪本に湖南汽船會社の乗船場あり、日吉神社まで拾町なり。

〔堅田〕

琵琶湖の西岸、大津市の北三里に在り、堅田落雁は近江八景の

一たり。浦頭に淨御堂あり、惠心僧都の草創にて海門山満月寺と云ふ、木造の正観音坐像は國寶とす、湖岸の關の濱は、中古關を設け一往來の船を檢せしと云ふ、足利氏の末、こゝに城あり、又徳川氏の時、堀田備後守正高始めて陣屋を設けしが、後世下野佐野に移封す。

○ 鎖あけて月さし入れよ淨御堂

芭 蕉
頼 山 陽

(84)

○ 夢詠漁莊隔岸呼、晴波一束似胡蘆、平生漫談天正記、始信濃軍飛渡湖。

勾當内侍墓は今堅田の田の畔に在り、左中將新田義貞の妻にて藤原經平の女なり、義貞北國へ落つる時路次の難を顧みて内侍を此堅田に留む、後、内侍義貞の越前に戦死するを聞き身を此浦に投じて死す、近世加藤季鷹碑文を撰みて之を建つ。

中 村 淡 水

○ 鷺姿連夜恍然問、儘放饑狼飽肉還、若使良人得機會、天龍未必鬻南山(勾當内侍)

堅田には太湖漁船會社の乗船場あり、西廻り東廻りの定期船共に寄港す。堅田の北約二里、和邇村大字小野に小野神社あり、延喜式内にて伊弉諾、伊弉册の二尊を祭る、附近に篁社、道風社、小野妹子舊蹟と稱するものあり、篁は小野岑守の子、參議に在らず、世に野相公と曰ふ、父母に事へて至孝、博學にして書及詩文を能くす、道風は書を能くす、日本三蹟の一たり、妹子は推古天皇の時に支那隋の國に遣はさる、此地に住みしなり。湖濱に太湖漁船會社の和邇乗船場あり。和邇村の北約一里、木戸村大字八屋戸と大字木戸との中間、西近江路の西側に志賀清林の墓といふがあり、清林は本邦角力行司の祖なり。比良山は木戸小松二村の西に連亘し、北は高島郡の標が嶺に接す、南北すべて三里に涉り、木戸村大字八屋戸の上に屹立する蓬萊山を本山第一の高嶺とす、直高三千百六拾尺にして日本七高山の一なり、京と近江との表裏に其雄姿を見す、江州にありては伊吹山と相對比

(85)

し、雪の降ること早く夏に至るも猶ほ消えず、銀光琵琶湖に映して景趣畫の如し、比良暮雪は近江八景の一とす。

都にてさむさろ見ゆる峯越の比良の遠山雪降りけり

信 實

草山元政

○ 晚風吹雪滿湖山、時見昏鴉化鷗還、一照紅塵無入眼、碧瑤璃外玉房顛。

〔雄松崎〕 大津市札の辻より約八里 比良山より發する比良川の下流にて出崎を爲す所、

小松村大字南小松に屬す、白砂長汀を成し、翠松之を蔽ひ、而して湖上遙に沖の島と相對す、播州舞子濱の風景に彷彿たり、故に近江舞子の名あり又、後方の内湖を隔て、眺むれば、天の橋立の觀あり、近江天橋の稱ある所以、此濱にては夏季鮎網アサギの漁業盛に行はれ、銀鱗潑測の光景は壯觀を極む、太湖汽船會社は此に乗船場を設け遊覽の客を待つ設備を整へつゝあり、同社は近時遊覽客を待つ設備を整へつゝあり。雄松崎より西近江路迄は約十町、西近江路より五町餘の山手に、滋賀縣水産試驗場附屬の小松

養魚場あり、烏帽子山なる七ヶ谷川の清水を利用し、鮭魚を養成しつゝあり、土地高燥にして湖山の風光頗る佳なり、殊に大小幾萬の鮭魚の群を成して潑測たる光景は、他に見るべからざるの壯觀たり。雄松崎の北、約一里、比良山中に楊梅瀧ヤマイあり、溶澗ようはの瀧又は布引の瀧といふ、上段の雄瀧は高さ拾五尺幅三間、下段の雌瀧は直瀉三丈八尺幅二間にて江州第一の飛泉なり。天文二拾三年西曆一五五四年足利義輝比良小松に遊ぶ、時に關白二條晴良と共に此瀑布を觀て始て楊梅の瀑布と名くと云ふ。雄松崎の北約一里半の明神崎に(三尾崎とも云ふ)郷社白鬚神社あり、小松村大字鶴川に屬し、高島郡大溝町(太湖汽船會社の乗船場あり)を距る約半里なり、垂仁天皇二拾七年前西曆紀元前三年の創立にて比良明神とも云ふ。祭神は猿田彦命とす。神殿は湖上に面して眺望頗る佳なり、現在の社殿は豊臣秀吉の造營する所、世俗長壽の神として崇敬す。此社の烏居は前の湖中に在りと言ふ、往昔は陸地なれども湖水増して水中に没せるものか、江源武鑑に、永祿五年九月拾九日白

鬚明神の前の海一町沖に石の鳥居を顯す廿四日に失すと見ゆ。

参 考

以上は大津市内及大津市に近き湖北湖西の名所舊蹟なるが、此には遊覽雅客の参考の爲め、遠隔の地方及湖上に於ける名勝の重なるものを記さん、〔近藤重藏墓〕は高島郡大溝町の瑞雪院内にあり、中江藤樹先生の遺蹟藤樹書院は同郡青柳村大字下小川に在り、附近の玉林堂には先生の墓存す、饗庭野は陸軍演習地にて同郡今津町に演習隊の廠舎を置く、大崎は同郡海津村に屬し湖水第一の奇勝地たり、竹生島は湖北の北方に在る孤島にて大津よりは約三拾里を隔つ、多景島は彦根の西、湖上の小島にて風景頗る佳なるより此名あり、其の西南に沖の白石とて湖面を抜くこと三丈餘の巨石あり、長命寺は奥の島の一角にあり、西國三拾三所の第三拾一番の札所たり、右の内多景島、沖の白石の外は、太湖汽船會社の定期船の便あり。

市内年中行事

- ▲一月(一日)惠方詣、三井寺總献供献燈(毎月)(四日)消防出初式
(五日)長等神社網打神事始(八日)陸軍初め(十日)毎月京町商盛會市日(十四日)長等神社網打神事(十六日)同藁焼(十八日)三井寺本尊初緣日(十七日)三井寺中坂地藏堂献供献燈(毎月)廿五日小關天滿宮(毎月)
- ▲二月(節分)三井寺星祭厄除祈禱
- ▲三月(十五日)涅槃會三井寺畫像爲拜(彼岸會)三井寺大法會
- ▲四月(三日)天孫神社神事(八日)灌佛會(十四日)長等神社鎮花祭(櫻)高觀音、新羅森(藤、義仲寺)
- ▲五月(五日)長等平野兩神社例祭(八日)三尾神社例祭(十六、十七日)千團子祭(廿四日)蟬丸神社例祭(新緑)高觀音、三井寺
- ▲六月(廿二、廿三日)三尾神社内日御前あさ瓜祭(螢)疏水

- ▲七月(十七日)三井寺札燒 (納涼)疏水築地、紺屋關附近
- ▲八月(四日)武德會端艇競漕會 (七日)三井寺佛具磨 (九、十日)三井寺千日會(十五日)三井寺探燈大護摩修行 (廿二、廿四日)地藏盆 (中旬)納涼會
- ▲九月(十六日)天孫神社神輿洗式 (廿四日)關清水蟬丸神社逆髮祭 (月見)三井寺、(彼岸詣) 三井寺大法會
- ▲十月(一日)天孫神社神輿裝飾 (九日)天孫神社宵宮 (十日)四の宮祭 (十四日)長等神社奉粟飯式 (十六日)天孫神社神輿納 (松茸山) 相場山、大谷山、馬場山、松本山
- ▲十一月(六日)より三日間)るびす市 (廿九日)三井寺智證大師忌 (紅葉) 高觀音、三井寺
- ▲十二月(十三日)より大晦日迄)歳の市 (十八日)歩兵第九聯隊軍旗祭 (大晦日) 三井寺除夜、各神社大振式

銀行會社

名	稱	資本金	創立年月	所在	電話番號
株式會社滋賀縣農工銀行		一、〇〇〇、〇〇〇 <small>円</small>	明治三十年一月	阪本町	一一一
同 近江貯金銀行		一〇〇、〇〇〇	同二十八年六月	同	二七三
同 三井銀行大津支店		—	同四十二年十二月	橋本町	一一八
同 八幡銀行大津支店		—	同二十九年十二月	紅屋町	一〇五
同百三十三銀行大津支店		—	同二十一年一月	阪本町	三二
同 近江銀行大津支店		—	同二十七年五月	同	一〇八
太湖汽船株式會社		三〇〇、〇〇〇	同十五年六月	御藏町	一一五
湖南汽船株式會社		一〇〇、〇〇〇	同二十一年一月	南保町	一二四
京近曳船株式會社		一〇、〇〇〇	明治廿七年十二月	下北國町	一三三

大津電車軌道株式會社	五〇〇、〇〇〇	同四十四年一月	馬場	一六二
近江倉庫株式會社	一五、〇〇〇	同十八年六月	阪本町	二一九
株式會社近江米取引所	一〇〇、〇〇〇	同二十六年十月	同	五九
大津瓦斯株式會社	一〇〇、〇〇〇	同四十三年三月	松本	二六五
大津海陸物產株式會社	一〇〇、〇〇〇	同四十四年十一月	新町	一七六
大津牧畜株式會社	三〇、〇〇〇	同三十四年九月	御藏町	一八六
近江度量衡株式會社	二〇、〇〇〇	同三十三年四月	鍛冶屋町	五四九
稻荷座株式會社	三〇、〇〇〇	同四十四年十一月	甚七町	四七五
大津水族館株式會社	一〇、〇〇〇	大正二年十一月	神出	四三
京都電氣株式會社		明治二十八年九月	上京町	五四
帝國製麻株式會社			松本	五六
近江製氷合資會社	三〇、〇〇〇	明治四十三年五月	阪本町	三六
京津電車大津出張所			上京町	六一三

官公署學校一覽

名	稱	所在	電話番號	名	稱	所在	電話番號
滋賀縣廳	東浦	五二四五	京都大學醫學部	附屬臨湖實驗所	疏水築地		
大津地方裁判所	四宮町	〇九	市立實科高等女學校	玉屋町	七三一		
大津區裁判所	同	九	步兵第九聯隊	別	所一四		
大津警察署	御藏町	〇七	大津衛戍病院	同	七七二		
大津稅務署	上平藏町	一三五	大津聯隊區司令部	下大門町	七二一		
大津市役所	上京町	五一四	大津憲兵分隊	上平藏町	一六		
縣立女子師範學校	東浦	三〇五	滋賀郡役所	別	所三〇二		
同高等女學校	同	三〇五	大津郵便局	御藏町	番外一		
同物產陳列場	別	所一九	北國町郵便局	中北國町			

下榮町郵便局	下榮町	同農事試驗場	膳所町	二一〇
縣廳前郵便局	川町	市立南尋常小學校	膳所町	三三三
市立西尋常小學校	今堀町	同東尋常小學校	下榮町	三三三
市立商業學校	別所	同藤尾尋常小學校	松本	三三五
同大津高等小學校	南保町	大津商業會議所	阪本町	三
鐵道院	大津驛馬場	大津水道事務所	神出	六四四
膳所監獄	膳所町	滋賀縣公會堂	別所	七七三
縣立膳所中學校	同大津			
同師範學校	同大津			

以上

團體一覽

滋賀縣農會	東浦	日本赤十字社滋賀支部	東浦	二〇九
滋賀縣教育會	同(縣廳內)	同病院	西浦	一〇八
近江米同業組合	阪本町	愛國婦人會滋賀支部	東浦	五二八
滋賀縣藥業組合	中京町	大日本武德會滋賀支部	同	
滋賀縣度量衡同業組合	鍛冶屋町	大日本蠶糸會滋賀支部	同	
滋賀縣酒造組合	阪本町	帝國在郷軍人會大津支部	下大門町	
近江水產組合	藏橋町	同大津市分會	同	
近江牛乳同業組合	同(縣農會內)	大津市農會	上京町	
大津市教育會	同(市役所內)	滋賀縣神職會本部	藏橋町	一六九
滋賀縣神職會本部	同(市役所內)	滋賀縣神職會本部	藏橋町	一六九

以上

◎新聞社及通信部

名稱	所在地	電話番號	資組織
近江新報社	伊勢屋町	電話三七五九番	明治二十三年二月創立合資組織
滋賀日報社	橋本町	電話三五九四番	個人經營
滋賀日出報社	上京町	電話四四四番	同上
京津日報社	神出	電話二二九番	同上
大阪每日新聞出張所	獵師町	電話一三八番	
大阪朝日新聞通信部	下北國町	電話三七七番	
大阪時事新報通信部	中堀町	電話六二四番	
京都夕刊新聞滋賀支局	松本		
大阪新報社天津通信部	神出		
京華日報	上唐崎町		

◎重なる旅館料理屋一覽

(料理旅館)

種別	名稱	所在地	電話番號
料兼旅	紅葉館白玉町		四五九四
同	八景館神出		五三〇〇
同	魚善石場		一三三六
料	廣梅樓支店石橋町		一五八
料兼旅	播摩屋石場		一六四
旅	佃亭四宮町		四一五
料	丸万本店後在家町		五八
同	かね與大谷町		二二二
料兼旅	坂本屋膳所字錦		二二六
同	金波園同字膳所		二二六
料兼旅	竹清樓榭屋町		二五
料	松阪屋川口町		四二
料	菊屋下北國町		一一一
料	平岡家四宮町		二四五
料	大岡米樓中堀町		六三五
料	丸万支店高觀音		四七八
料	萩の家の大津驛前		一六三
料兼旅	快風樓膳所		三三〇
同	柳屋石山		三四〇

名	稱	所在地	札の辻	濱大津	紺屋ヶ關	大津驛
大津市役所	上京町	一	三	八	丁	丁
近松御坊	南町	一	五	九	丁	丁
關清水蟬丸神社	清水町	三	七	一	丁	丁
赤十字病院	神出	二	六	一	丁	丁
高觀音	同	四	八	二	丁	丁
強齋先生墓	小關	六	八	四	丁	丁
三井寺	神出	六	十	二	丁	丁
物産陳列場	別所	八	七	一	丁	丁
大津衛	同	十	九	三	丁	丁
法明院	同	十	十	九	丁	丁
三保ヶ崎	中保	七	六	五	丁	丁
濱大津驛	御藏	三	四	丁	丁	丁

東本願寺別院	滋賀縣廳	大津警察署	義仲寺	大津驛	栗津ヶ原	瀨田	石山寺	唐崎	日吉神社	延暦寺
笹屋町	東浦	御藏町	馬場	同	膳所町別保	大字橋本	石山村寺邊	下阪本村	阪本村	同
六	七	三	十	二	一	一	二	一	二	二
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁
半	八	八	十	十	七	八	二	九	五	三
五	四	四	四	六	三	四	四	三	九	七
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁
丁	十	十	二	二	三	四	四	三	九	七
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁
丁	五	二	十	十	三	四	四	三	五	三
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁

大正四年十一月六日印刷
大正四年十一月九日發行

定價 金拾五錢

著者 中村 紅雨

大津書籍商組合代表者
滋賀縣大津市後在家町第九番屋敷

發行者 古川 伊助

京都市三條通鉄屋町角

印刷者 高田 重之祐

京都市三條通鉄屋町角

印刷所 四日市印刷所

電話中二六〇番

不許
複製

大正四年十一月六日印刷
大正四年十一月九日發行
定價 金拾五錢
著者 中村 紅雨
大津書籍商組合代表者
滋賀縣大津市後在家町第九番屋敷
發行者 古川 伊助
京都市三條通鉄屋町角
印刷者 高田 重之祐
京都市三條通鉄屋町角
印刷所 四日市印刷所
電話中二六〇番

◎ 京都
大津間 僅に三十分

愉快で乗心地のよき京津電車

京津電車は京都三條大橋と大津札の辻の双方より數分毎に發車しますからお待ち合せの時間も省け且京都大津兩地とも市内の中心から中心まで僅に三十分で着きますから兩地の御用達並に御遊覽等には至極御便利です

御料理旅館

大津市三井寺麓
疏水畔

八景館

長電話三〇番
電話五二〇番

近江琵琶湖畔
膳所

阪本屋

長電話一二六番



東 旅 館

大 津 市 鍛 冶 屋 町

橫 山 兼 次 郎

電 七 〇 一 番

株 式
會 社

大 津 水 族 館

汽 車
疏 水

積 貨 物 運 輸

米 穀 委 托 販 賣

大 津 市 白 玉 町 (取 引 所 前)

今 岩 本 半 六 商 店

長 電 貳 〇 一 番

海陸運送

內國通運會社取引店
 濱大津驛前 森田運送店
 電話六十五番
 東海道線大津驛前
 森田運送店荷扱所
 店主 森田美三郎
 同
 藤井運送店
 電話二百三十三番
 店主 藤井幾三郎
 同
 明治運送株式會社取引店
 藤澤運送店
 店主 藤澤彌三郎
 電話五十九番

蒙畏邊御用命之光榮

登錄商標

名物
辨慶力餅

類似品有之候ニ付辨慶ニ釣鐘印ノ
 商標ニ御注意ノ程願上候

大津市三井寺
 本家力軒

電話三四五番

大津市石橋町

市川寫真館

市川正康

電話三百拾一番

會席

御料理

旅館

阪本日吉馬場

魚善支店

芙蓉園

電話一五番

株式會社

不動貯金銀行

大津代理店

大津市湊町

電四〇九番

鮒壽司

時雨煮各種

金銀銅賞牌九十二個受領

近江國大津市石川町

阪本屋

大日本琵琶湖名產
宮內省御用品

電四〇六番
振替口座(大)五二九二番

◎千歳一遇の御盛典
ニ際シ奉祝旗門幕
ヲ提供仕候

- 奉祝旗各種
- 萬歳旗各種
- 日の丸旗各種
- 門幕各種
- 附屬品各種

共同販賣所



大阪市上田太商店滋賀縣代理店
京都奉誠會大阪支部
大津市京町通護原町

近江物産合資會社
北村重之助
電話四〇七番

大津市護原町

福井安治郎商店
電話七四四番

同上

岩崎定次郎商店
電話六四五番

同 市石川町

小森重治郎商店

▼綿商▲

- 中入綿
- 蒲團綿
- ハイカラ綿
- 脱脂綿
- 眞綿
- 吹止眞綿
- 眞綿足袋
- 同チヨツキ
- 其他綿一式

大津市下小唐崎町 (京町四丁目)

商標
三 綿三 小林三四郎

電話六七二番

御料理
御旅館

竹清樓

長電話二五番

洋反物
太物類

各種

大津市京町通葭原町

與長谷商店

商號 鏡屋
電話 七〇八番

船來 雜貨 商 西 澤 老 鋪

大津市菱屋町

電一三二番

拙店特製ノ 謹告

近江八景 摸樣縮緬袱紗并木綿手拭
 大津繪 御土產御進物等ニハ至極御手輕御便利ニ有之候

近 上野吳服店

大津市中京町(電話一三五番)

乳味粉特有益

一 乳味粉は製造中既に其半は消化せるが故に如何なる幼兒又は病兒に用ゆるも消化する事至て容易なり
 一 乳味粉は其味頗る甘美にして人乳に均し
 一 乳味粉は善良なる人乳に均しく用ゐられた御手やすく且久しく貯ふると牛乳ミルクの如く腐敗する憂ひなし

大津市上京町突抜

商號

登錄商標



製造本舖

澤甚

田中甚助

電話五一八番



大津名産みやげ物各種
名所繪端書色々

各 國 砂糖及菓子類販賣

大津市札の辻停留所前

合 船 橋 商 店

電五三一番

諸紙帳簿類
學校用文具

卸 小 賣

并ニ度量衡器販賣

大津市南保町(幼稚園前)

⊕ 渡 邊 尙 文 堂

電話六二〇番

宮内省大膳寮御用達

近江名産

蕪 ながら漬

製造發賣元

大津市菱屋町

商號 八百與 小倉與七郎

電話 二四二番
振替貯東京 二八二二三番
金口座 略 ヤラヨ



美大 術津 名産
工細 竹津 名産

於博覽會
共進會
金牌
受領

製造元 水谷與之

滋賀縣大津市
西今嵐町

37
475

終